

ブラック・ブレット～
赤目の神喰人(ゴッド
イーター)～

緋悠梨

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

「GOD EATER 2×ブラック・ブレット」

「ブラッド隊長、「緋上悠梨」がブラブレの世界に転移し、今度は民警としてガストレアと戦うお話。果たして彼は元の世界に帰れるのか……!?

以下注意事項。

- ・ 主人公は男、作者がゲームで使っていたキャラが元。
- ・ GEキャラは本編にはでて来ない。
- ・ 作者の趣味ネタ、パロネタ満載。

・ 話数表示は通し番号。本編の進展に直接関係ない回は、通し番号の次に（sub）と

明記。

・GE2RBには未対応↑超重要!!

以上のことをご確認の上、本編にお進み下さい。

目次

緋上悠梨という人物

1. プロローグ | 1

2. 邂逅 | 9

3. 衝撃 | 19

4. 緋上悠梨 | 24

蛭子影胤編

5. 動き出す世界 | 28

6. 晒される闇 | 47

7. 広がる傷 | 71

8. 崩れそうな心と暗黒物質 (ダーク

マター) | 82

9. 霊安室内の講義? | 99

10. 蜘蛛と蠍 | 113

11. 仮想空間の戦闘 | 132

12. 学校? なにそれ美味しいの?

155

13. 新たな力 | 181

14. 秋月奏 & 趙飛狼 | 204

15. 日常に潜む非日常 | 210

16. 影胤、再び: | 217

17. 転生者という存在 | 231

18 (sub)・夢の中で1『極東支部』

| 247

19. 突きつけられる現実 | 261

20. 力なき現状 | 284

2 1.	決意の刻	299
2 2.	作戦かい……し……？	315
2 3.	森林の戦闘	325

緋上悠梨という人物

1. プロローグ

『世界を拓く者』、つまりジュリウスの成れの果てから迫る触手はどんどん数を増している。向こうの偏食場パルスはどんどん強くなっていた。こちらも早くしなければならぬ。

(やっぱり止まってくれないか…)

僕、緋上悠梨はそう考えながら触手を切り裂いていく。背後にいる葦原ユノを守る為に。

ユノは既に「光のアリア」を唄い始めている。彼女をやらせる訳にはいかなかった。

『偏食場パルスを2つ確認…!』

『ブラッド側の終末捕食、来ます!!』

オペレーターの花ラン、ヒバリさんの声と共に、背後から凄まじい気配が立ち昇った。

『もう一つの終末捕食』が始まった。

「終末捕食を防ぐためには終末捕食で相殺するしかないね。ただし、僕が今考えているこの方法だと、ブラッドの皆とユノ君の犠牲は避けられないがね…」

作戦会議でのサカキ博士の言葉だ。勿論かなり悩んだ。自分達が死ぬのだ。簡単には決められない。

だが最後は「ジュリウスを助きたい」その一心で心がまとまったのだ。そして今ここに至る。

終末捕食が展開したところまで上手くいっていることには安心してる。しかしまだ気は抜けない。自分には最後に大切な仕事があるんだ。そう思い直し、気を引き締め直した。

その時、

「ユノさん!?!」

『ブラッド側の偏食場パルスが、弱まっていきます……』

驚くシエルの声。気付くとユノの歌が止まっていた。『世界を拓く者』の偏食場パル

スに押されている。

『人の時代が、終わってしまふのか…!』

(ここままで…なのか…!? また救えないのか!!)

ロミオやジュリウスのこと…守れなかった仲間のことを思い出し、サカキ博士の漏らした言葉に思わず歯ぎしりしたくなった。

しかし、再び通信が入る。

『待つて下さい!!これは…!?!』

フランの驚きの声と共にどこからともなく「光のアリア」が聴こえてきた…

—— side ユノ ——

どこからともなく聴こえてきた「光のアリア」。

「どうして…。」

なんで、こんなに歌声が…

『… ユノ、聞こえる?』

また通信が入った。マネージャーのサツキからだった。という事は、これはサツキが何らかの方法で…。

世界中から偏食場パルスが自分に集まってくる。

歌には、力がある。そのことを忘れていた。どうしたこんな簡単なことを忘れていたんだろう…。！

でも、もう忘れない

……もう、負けてなんかられない…!!

「光の声が呼んでいる

無くした日々の向こう側…」

再び歌い始める。1人で戦ってなんかいない。皆で戦っている。自分を中心にした偏食場パルスが強くなつていくのが見えた。

「光のエリア」を歌い終わると、ブラッドの現隊長、緋上悠梨が近づいてくるのが見えた。彼となら絶対うまくいく。そう信じて、お互いに手を伸ばす。

悠梨と手が触れ合った瞬間、彼が自身の血の力、『喚起』を発動させた。そしてその後

『終末捕食、来ます!!!』

フランの声と共に、再び、自分を中心に、偏食場パルスが増大した。

2つの終末捕食がぶつかり合う。風が吹きあれ、赤い光があちこちに走る。

そして、白い光に視界を奪われ……

l o o s i d e 悠梨 l o o

…目を開けると、ナナ、ギル、シエル、そしてユノの姿が見えた。周囲は真っ暗で、自分達の立っているところにだけ光が射し、花が咲いている。どこかは全く分からなかった。

ふと、誰かの近づいてくるのが見えた。その姿を認め、

「ジュリウス…」

思わず、そう漏らした。

ジュリウスと触れ合うことは出来ない。透明な壁が立ち塞がっていた。

「一緒に…一緒に帰ろうよ、ジュリウス！」

ナナがそういうが、ジュリウスは首を横にふった。彼曰く、特異点がこの場に1人残り、終末捕食を食い止めなければならぬという事だ。

「ここは俺の『持ち場』だ。だからお前たちにはお前たちの『持ち場』、つまり外だ。ここを任せたい」

そして、続ける。

「これは、命令じゃない。俺からの……願いだ。俺を許してくれるなら……俺は、ずっと一緒に前達と戦い続けたい……っ!!」

その言葉を聞いて、ナナとシエルがついに泣き崩れた。

ジュリウスはそのまま僕の方を向いて「…頼む!」と続けた。

「…ジュリウスがお願いだなんて、らしくないねえ」

涙は止まらない。だからわざと明るめに言っつけてやった。

「ふっ……熟知している」

ジュリウスも少し笑って返す。そのまま手を伸ばし、ジュリウスと壁越しに触れ合う。『喚起』を再び発動させ、ジュリウスの『血の力』を最大限まで呼び起こした。そうして、お互い手を離す。

「ありがとう……そろそろ、始まる」

そう言っつて、ジュリウスが闇に振り返った途端、黒い靄が発生して大小様々なアラガミへと変化した。感応種までいる

(あれだけの数を一人で……ジュリウス……お前は……)

「……お前達も自分の持ち場に戻るんだ、いいな?」

「…分かった、ジュリウス。向こうは任せておいてくれ」

最初に答えたのはギルだった。堪えきれない涙を落としながらも、毅然と振り向いて歩いて行った。

「……ギル……」

「…行こう、シエルちゃん……ジュリウスの言うとおりでよ…。一緒に、戦う仲間だから……ここで、立ち止まっちゃいけないって、そう思うんだ……」

「……シエル、行こう。ジュリウスの思いを無駄にしちゃいけないからさ……僕達も、出来ることをやるために、持ち場へ戻ろう……!」

ナナと一緒にシエルに声をかけた。言つててまた涙が出た。

(情けないなあ僕……最後までらいジュリウスを安心させなきや)

涙を拭いて立ち上がる。

ユノが横に並び、ジュリウスに告げる。

「ジュリウス……ご武運を……」

「……ああ、皆…俺を信じてくれて、ありがとう……!」

その言葉を聞いて、ナナとシエルが泣きながらも立ち去つて言った。それに続いてユノと共に踵を返す。

…もう、泣かない。ジュリウスは一緒に戦つてるんだ。寂しいことなんてないんだから。

最後にもう一度振り返ると、ジュリウスが歩き去るところだったので呼び止める。

「ジュリウス!! 必ず…必ず助けに行くから!! 待ってて!!」

大声でそう告げた。

ジュリウスは少しだけ振り向き、何かを告げた。そして左手を突き上げ去って行った。

その姿は、本当にカッコよかった。

世界が、また白に染まっていく……

2. 邂逅

l l l s i d e 悠梨 l l l

目が覚めると、顔と手に土の感触があった。

「……………ん？土!？」

驚きで意識が覚醒した。

「な、なんで僕は外で倒れてたの…!? いつ保管庫から投げ出されたって言うんだ…!!」
「だいたい、さっきまで神機兵保管庫で戦ってたからあるとしても鉄の冷たさが正しいはず。だけど、自分の五感がそれを否定する。」

まず、視覚。ここはどう見ても、森だ。森はもうないはず。植物は観賞用以外は、すべてアラガミに捕食されつくしているからだ。

(でも確か、サカキ博士の講義で、その植物を捕食したアラガミ達が植物の機能を理解して、光合成をして酸素を生みだしてる、って言ってたなあ…)

倒すはずのアラガミに、生きるために必要な酸素を作ってもらっているとは、何とも

皮肉だとは思わんかね？とはサカキ博士の談だ。でも倒さなければ人類が殺されるからやるしかないんだだけどね。

次に触覚。さつきから左腕や顔など、むき出しの部分の肌を風が撫でていく。神機兵保管庫は閉鎖空間だったから、風が吹くこと自体あり得ない。ラケル博士がクラーラーつけるとも思えない……とまたあほなことを考える。

「……完全に現実逃避だよな、こんなん考えちゃつてるし……」

その通りである。しかし現実を見据えないといけない。とりあえずみんなを探してみよう。そう思い、立ち上がる。

「おーい！ ナナー！！ ギルー！！ シエルー！！ ユノー！！ ジュリウスー！！ …… ジュリウスは流石にないか……」

またアホなことをやってる自分に苦笑し、気を入れ直す。

「さてと……。そういえば神機はどこだろ……？」

周りを見回すと背後の茂みに自分の神機の柄が見えた。

「あつたあつた、あー良かった。 ……ん、ちゃんと腕輪と接続もするね」

一通り銃、剣、装甲への変形も問題なく行えた。制御ユニット（ゴッドイーター）もついているが、

（強化パーツがないなあ……。制御ユニットについてただけでも御の字だけど、探してみよ

うかな)

神機とは、アラガミに対抗するための武器である。悠梨の神機は第三世代型だ。第二世代に引き続き、変形機構を持つ。ちなみに剣はガルドラ（バスターブレード、銃はシロガネ強襲極型（アサルト）、装甲は牙竜大甲（タワーシールド）だ。この相棒がなければ、僕は一般人より強い程度でしかない。近くにあつて本当に良かった。安堵しつつ神機を拾い上げ、歩き出そうとしたその時。

「……ん？何かの歩く音？」

ゴッドイーターの聴力でもって聞こえるレベルだから、まだ遠い、かな？見つからないようにやり過ぎたがいいかなこれは。そう少し考えたけど

「少しイライラしてるし……倒した方が頭スッキリしそうだし、やろうかな？あのアラガミには申し訳ないけどね」

うん、仕方ない、討伐予定外のアラガミが入ったって言えばいいよね。特別報酬ももらえる。そういつて戦うことにしてしまった。

……それがまさか、あんなことになるとはね……。

（よしフラグ予防線は貼ったぞ。これで大丈夫だ）

5分後

とりあえずその場に隠れた僕は、足音がかなり近くまできていると判断していた。

(そろそろ飛びかかるか…)

相手の体が目の前を通り過ぎようとした瞬間に飛び出し、ガルドラで胴を斬りつける

!

(よし、このまま……っ?!?!?)

返す剣で足を切ろうとしたが、そこであることに気づき、剣をとめ一旦退く。

(コイツ…ヴァジュラじゃない!!新しい墮天種か何かか!?)

近づく生物をヴァジュラと思っていた。なら一人でいける。そう思い襲撃したが結

果はなんとも予想外…!!

(でも、頭を割れば勝てる…:箬!)

どんなアラガミでも、頭を壊せば動きは落ちる。そう思い仕掛けた。謎のアラガミの前足の攻撃を二度よけ、あつけなく顔の前に到達し、頭部を一撃の元に粉碎した。

「…なんだ、弱いじゃん」

少し頭がスッキリしたので神機を置き、もう一度思案する。

(しかし本当にここはどこなんだろう…。全然知らない土地だもんね…)

——隙を、見せてしまった。背後に嫌な気配を感じ、振り向いた時には既に飛びかかってきていた。

「がはあっ!!」

(コア摘出忘れてた…!! 異常事態とは言え僕としたことが…!!)

今更後悔しても後の祭り。宙を舞い、地面に叩きつけられて意識を失った。

——side 影胤——

(…どうやら一人のようだね…。イニシエーターもいないようだ)

私こと蛭子影胤は東京エリアに向かっていた。その途中、未踏査領域の中で奇妙な少年を発見した。ガストレアが闊歩するこのような場所に一人で転がっている(訂正はしない)など、怪しいにもほどがある。観察のため、しばらく休憩をとるとした。娘で自分のイニシエーターである蛭子小比奈は自分の横でチョコを食べている。

そして少年は視界の中、何やらずっと一人で隠れている…。と思ったら突然飛び出してガストレアに襲いかかっていった。

「ふむ、あの大きさならステージ3…あの小さい少年が一人で立ち向かうとはね。それに、あれだけの大剣を振り回すとは…見た目によらない腕力がありそうだ」

なかなか興味をそそる少年だ。

(頭を一撃…動きも悪くないな)

しかし見てたら、油断したのか、何故か復活したガストレアに吹っ飛ばされピクリともしなくなっていた。少し焦って、指示を出す。

「小比奈、あそこのガストレアを好きだけ切り刻んできなさい」

「ホント!? やったー!!」

そういうと小比奈はチョコを懐にしまった後、二刀を構え、喜々として駆けていった。

(さて…少年を回収しに行くか)

そして悠梨が倒れているところに付き、生存を確認する。

(…まだ脈もすっかりしている。意識を失っているだけのようだね)

それから念の為に、気絶している少年のまぶたを右手で開く。死んでいないか確認するための行為だったが、その目を見たとき、仮面の下の顔が喜色に「歪んだ」のが分かった。

「これはこれは…男で、しかもここまで成長していい。珍しいで済む話ではない…

これは露見したら、とても面白いことになりそうだね…クククッ!」

この少年は、自分達と同じく——。そんな期待に、胸が膨らんでいく。それに先程の動きを見る限り、決して弱くもない。これは逸材かもしれない。

「パパー!! 終わったよー!!…… あれ? ねえパパ? そいつも斬っていいの!!」

という言葉と共に娘が帰ってきた。

「よしよし、でもこの子はダメだよ。近い将来、私たちの仲間になるかもしれないしね」

「うー… パパのケチ! それに仲間なんていらなない! パパと私だけいればいいもん!!」

なんとも可愛らしい事を言う娘だ。そう思ったが、殺させる訳にはいかない。

「とりあえず予定通り東京エリアに向かうとしよう。この少年は侵入したらどこかの道端に捨てていくから、それまで我慢しておくれ」

「… はーい、パパ」

しばらくは東京エリア内で泳がせて見る予定にして、移動することにする。そう決め、少年を担ぎ上げた。—— 思ったより軽い。

… そういえば彼の持ってた武器は…

(あつたが、あれは… 持てそうにないな…)

近くでみるとかなり大きいことが分かる。よくこんなものを振り回しているものだ。少年には悪いが、武器は諦めてもらおう。とても手に余る。そう決め、二人でその場を去ることにした。

——side 蓮太郎——

俺が、捨てられている少年を見つけたのは、まあ勾田高校の通学路だったから、というだけだ。

「……なんで道端に人が捨てられてんだよ……」

思わず呟く。少なくとも朝にはいなかった。ということはその後か……。

(……仕方ねえ、起こすか)

そう思つて起こそうとしたが、その少年の頭に大きなアザがあるのに気付いた。

(……なんだ？倒れた時に打ったのかコレ？にしちやでかいな……。それに、この腕輪……)

何かよくわからんが、さわんないほうがいいな、うん。これは董先生に見てもらった方がいいかもしれないと思ひ、少年をおぶひ、連れて行つた。

「董せんせい、いんだろ？出て来いよ」

知り合いの医師(？)、室戸董の研究室である霊安室に着いてそう声をかけたが、誰も

いない。そんなはずはないのだが……と思った矢先

「う”あ” おあ” あ” つつつつつ!!!」

「げっ!!!」

そんな声と共に、ゾンビが、カーテンの裾から出てきた。思わず少年を落としそうになるが何とかこらえる。……またいつものイタズラか……。

「董先生、相変わらずタチが悪い…… 心臓に良くないからやめてくれ、つて何度も頼んでんだろ」

「いやー、君の不幸顔を見てるといたずらせずにはいられなくてねえ」

「そんな理由が通用するかよ!! っつてそうじゃなくて頼みがあるんだよ」

やっと本題に入れる、これでもいつもよりマシだ。

「こいつを治療してやって欲しいんだ、代金はおいおい払う」

そういうながらベッドに少年を寝かす。死体のあつたベッドだが大丈夫だろう、多分。

「代金はいいとして、この子どこで誘拐してきたんだい? 蓮太郎君、誘拐は犯罪だよ?」

「んなこと分かってるわ!! 誘拐してねえよ決めつけんな!! ……拾ったんだよ、道端に落ちてて。んで頭のアザが酷かったから先生に見せにきたわけ」

「ふーん……ならさっさとそういうええ良かつたじゃないか……」

「アンタが散々妨害したんだろうがぁーっつっつっつ!!!」

キレた。全力でツッコむしかし声が大きすぎて少年を起こしてしまった。

「… あれ？僕はいった… ひいつ!？」

見回した時に視界に入ったのだろう、死体に驚いてベッドから落ちる。

「……先生……」

「私の部屋に生きてる物を連れ込む君が悪い」

「結局俺のせいだよ!!」

頭を抱えるが、それでも少年に話しかける。

「あー……ごめんな驚かせて……大丈夫か……?」

「あ、はい……なんとか……」

そう言つて俺の方を見たが

「なっ……!!?先生、これ……!!」

「……!!ほう、これはまた奇異な……」

俺と董先生の見たもの、それは少年の赤い「目」。

(こいつ、『呪われた子供たち』なのか……!?)

3. 衝撃

— side 悠梨 —

目を覚ましたらゾンビっぽいものが見えた。

「… ひいつ!？」

思わず後ずさりしたら『落ちた』。

(痛ったあ… ん?今、落ちた、よね?僕は何かから落ちたんだ?)

ゴツドイーターでなければもつと痛かったであろう痛みに耐えながらも、そのことに思い当たる。そもそもさつきまでは…

(ああ… 狼っぽい新種のアラガミと戦って、隙をつかれて吹っ飛ばされて…)

その後の記憶がない。それに倒れたのは森の中だったはずだ。しかし、周りを見回してみると、

(… 研究室… なのかな?)

そう思う有様の部屋であった。

目の前ではどこかの高校の制服を着た青年と、髪の長い、白衣の女性が言い争っている…。というか青年が一方的にイジられてる感じであった。思わず笑ってしまいそうになり慌てて目を逸らす。

「あー…。ごめんな驚かせて…。大丈夫か…?」

「あ、はい…。なんとかか…。」

決着がついたようで、青年がこちらに話しかけてきたので、顔を向けて答えた。が、
「なっ…。!?先生、これ…!!」

「…!!ほう、これはまた奇異な…。」

僕の顔を見た途端、驚いた様子を見せた。それを見て、僕がした反応はというと、
「えっ…。ぼ、ぼぼ僕の顔になんかついてますか!?はっ!まさか黒蛛病が!?いや、え?でも…。」

あまりのテンプレに青年がずっこけた。もちろんわざとだ。

しかし、そんなことを気にしてられない。

(黒蛛病になったとしたら間違いなく気を失ってる時に『赤い雨』にうたれたとしか…。いやでも顔まで回るのは末期だって…。そもそも僕は何日気を失ってたんだ…。!?)
「考え中に申し訳ないが、話を聞いてくれないかい?」

「…。あ、はい」

女性の発言で現実に戻ってきた。

「まあ彼も落ち着いたようだし、まずは自己紹介といこうじゃないか。」
 そう切り出した。

「私は室戸董。ご覧の通り医者だ。今は検死医をやっているよ」

「俺は里見蓮太郎。高校生で、天童民間警備会社所属の民警だ」

民警……？知らない単語だけどあとできこう。ひとまず自己紹介。

「僕はフェンリル極東支部、極致化技術開発局、通称『ブラッド』所属、隊長の緋上悠梨と言います。腕輪を見てもらえば分かる通り、ゴッドイーターです。……それで、」

「民警（ゴッドイーター）って、何ですか？（だ？）」

里見さんと声がハモった。

l l l s i d e 董 l l l

「……………え？」

「……………は？」

二人とも、相手が何を言ってるか分からない、といった顔だ。

「…先生、今の緋上の内容、知ってるか？」

「いや、全く知らないな。極東支部やらゴッドイーターやらは耳にしたこともないね」

「そうか、先生でも知らないか…。」

聞かれるだろうと思つてはいたが、知らない物は知らないのだ。むしろ知識欲が湧いてくる。

「悠梨で構いませんよ。それで民警つて…?」

「待て、一回整理しよう。悠梨君、だったね? 君はガs」

紅く―燃える―その眼差しに―♪

「… 蓮太郎君、君の着信音つて…。」

蓮太郎君の携帯からどこかで聞き覚えのある曲が流れてきた。

「き、木更さんだけだからな!!」

「… それ言い訳になつてなさそうな気が…。」

初対面の悠梨君にまで言われてしまう程の蓮太郎君の慌てぶりに、小さくため息をつく

「… どうしたんだよ木更さ… …ガストレアが!? ……分かった、すぐに向かう」

どうやらガストレアがモノリスを越えて侵入してきたようだ。

「先生! えーつと、悠梨を頼む!! 悠梨も後で俺にも事情を聞かせてくれよ!」

そう言い残し走り去っていった。

(… 面倒くさがりの癖に、悠梨君の事情を聞こうとするところが、面倒見のいい蓮太郎君らしいねえ)

難儀な性格だよ全く彼は。ふとそんなことを思ってしまった。

そこに悠梨君から再び質問が飛んできて、今度は大きなため息を董につかせた。

「あの、質問ばつかで申し訳ないんですが、ガストレアって…？」

… こつちもこつちで、面倒そうだ。

4. 緋上悠梨

名前… 緋上 悠梨（ひがみ ゆうり）

年齢… 16

誕生日… 2057年7月3日

性別… 男

身長… 164cm

体重… 55kg

武器… 第三世代型神機

刀身… ガルドラ（バスターブレード）

ルフス・カリギュラの素材から作られる赤く染まった大剣。破碎力に優れる。

悠梨はこれをソーマと同じレベルで振り回して戦っている。

銃身… シロガネ強襲極型（アサルト）

ギルが作り上げた感應派受容体を使用することで、クロガネ型を更に強化発展させた白銀の銃。

悠梨のメイン武器はガルドラなので、あくまで牽制・掃討用として使用している。

連射力に優れる。

装甲… 天竜大甲 極（タワーシールド）

グボロ・グボロ系統のアラガミの素材から作れる緋色の巨大盾。装備すると運動能力がアツプすると言われる。

容姿

ヘアスタイル…14番

フェイス…7番（レンに似ているやつ）

スキンカラー…普通の肌色

アクセサリ…60番（黒のゴーグル）

トップス…ジャンティシャーク（片方だけ長袖の白シャツの上に赤い半袖パーカー）

ボトムス…デコアタレット（大腿部に赤いラインの入った黒のパンツ）

白髪、赤目のカッコいいというよりはシヨタ顔。可愛い系。

身長が「少しだけ」小さいことを気にしており、しつこくネタにするとキレる。

名前が女の子っぽい、とからかわれたこともあるが、こちらは気にしていない。

字数足りないのであれこれ解説。

目を赤くした理由について

元々はガンダムの外伝、ブルーデイスティニーに出てくる「EXAMシステム」（使用時にツインアイが緑から赤になる）を意識したものだのですが、あとから「あれ、これ『子供たち』としても使えるな」と思ったんでそれをそのまま持つてきました。でも悠梨は『子供たち』じゃありません。当たり前ですけど。

神機について

今回選んだ神機ですが、テキトーながらも、選択した理由があります。

・ガルドラ：バスターの中で形が一番カッコいいと思うこと。物理属性特化だということ。

作者の好み的にも展開的にもバスターにしたかったんです…。

・天竜大甲 極：作者が一番使ってるから。以上。

シロガネ強襲極型：アサルトの中でもバランス配分のいい能力を持っていること。

あとアサルトを何故選んだかという点、「走り打ちが出来る」という理由からです。

シヨットガンだと距離が…。作者フォル・モーント以外使ってないですし、はい。

「GE2はプラストだろ！」って方もいらっしやるとは思いますが、メテオとか出ちゃやう

とバランスが……。上記の理由とあわせてご了承ください。

……。え？スナイパー？シエルに任せとけばいいや（ry

蛭子影胤編

5. 動き出す世界

— side 悠梨 —

あの後、ため息をついた室戸先生から、いろいろな説明をしてもらった。ガストレア
ウィルスという物が見つかったこと。それからなる『ガストレア』に追い詰められて
いること。バラニウムという鉱物だけがガストレアにダメージを与えられること。モ
ノリスのこと。日本には5つのエリアがあつて、ここはそのうちの1つ、東京エリアだ
ということ。etc.:

……うん、どつかで聞いたことある状況だね。

そう思わずにはいられなかった。

「さて、順番が逆になつてしまつたが、これまでのこと、というより、今話したことは全
て常識ともいえることだ。それを知らないとなれば、結論は一つしかない。」

室戸先生はそう言つて間を置き、

「… 悠梨君、君は、別の世界から来たんだろうな」

「つまり転生ですか」

「ああ。記憶喪失ということも考えたが、これまで話をしている最中、引つかかった所はなかったように見えたから除外させてもらったよ」

「なるほど…。」

転生かあ…。アナグラ（※極東支部の通称）にあつた昔の本とかに、そーいう設定の奴があつて読んだっけなあ。

まさか自分がその『転生』をするとは思つてもいなかつたけど!!空想の産物じゃなかつたのか…。

「… 割とあつさり受け入れたねえ。もう少し悩むもんだと思つたよ」

「いや驚いてますよ?まだパニックなんでどつかでヒステリー起こすかもしれません」

「… せめて起こす場所に気をつけるんだね…。」

室戸先生が呆れた様子を見せた。何で!?

閑話休題。

「コホン…。まあともかく今のこの世界はガストレアによつて滅びかけている。そのガストレアを倒すために戦っているのが、蓮太郎君たち『民警』というわけだ」

「民警… 何かの略称ですか？」

「民間警備会社、だね。東京エリアという国家権力から、民間に討伐依頼が下る形で成り立っているんだ。もちろんそこには競合もある。民間警備会社はいくつもあるからね」
「軍事を民営化したんですか…。なんていうか、不思議なシステムですね民警って」
「謳い文句はまさにそれだ。ある種の自衛、と考えればそうでもないさ」
なるほど、そういう考え方もできるのか。

「他にも色々あるが、とりあえず、今必要なことは話したよ。… 次は君の番だ」
室戸先生の目が光った。

「む、室戸先生？」

「どうしたね？」

「目が怖いです」

「人が知らない事を知りたいと思う事は自然なことじゃないか。さあ存分に話すといいで悠梨君」

「そ、そんな迫らなくなってきた方がいいじゃないですか！」

「ふふふ… 逃がさんよ…ッ」

「話します、話しますから落ち着いてえええええ!!」

再び閑話休d (ry

「えつと簡単に説明しますとですね。」

・ガストレアウイルス↓オラクル細胞。

・ガストレア↓アラガミ

・バラニウム↓偏食因子を組み込んだ神機

・モノリス↓アラガミ防壁

・民警↓フェンリル

「つとまあ、ここら辺をこう変えてもらえれば分かりやすいかと」

「フェンリル、とはなんだい？」

「僕達ゴッドイーターを統括し、アラガミを討伐している、事実上世界を掌握している組織です。元はただの生化学企業だったらしいですが、オラクル細胞を発見したことによって台頭しました。そのオラクル細胞からなる偏食因子を組み込むことで、僕達の使う武器の『神機』が作られ……」

……あれ。

「どうかしたかい？」

フリーズした僕に、室戸先生が声をかけてくる。

「……あの、室戸先生。里見さんが僕を運んで来た時、なんか他にでつかい武器持つてな

かったですか…?」

「いや、特別なものは何も。付け加えて言えば、君を拾ったところに何かあった、ということも特には言つてなかつたね」

「そういえば僕つてどこで拾われたんですか?」

「蓮太郎君の通学路らしいが」

じゃあ東京エリアの中には…神機はないつてことか。

これは不味いことになった。

「すいません先生。説明は後でします。藤沢つてどつちですか?」

「藤沢は確か西だからあつちだね。でもあそこは未踏査領域だ…。何をしに行くつもりだい?」

「神機を拾つてきます!!」

そう言つて部屋を出てこうとする。だけど室戸先生に止められる。

「待ちたまえ!本気か!?!かなりの距離があるぞ!」

「ゴツドイーターならまだましです!」

未踏査領域とか知らないし。神機を放置しとく方がよっぽど危ない。

静止を振り切つて駆け出そうとするが、「…。ったく!」と悪態をついた室戸先生に再び止められる。

「せめてこれを持って行くんだよ!!」

そう言つて渡されたのは一丁の拳銃と… サングラス？

「… 拳銃は分かりますけど、何故サングラスまで？」

「いいからつけて行くんだ。東京エリアの中にいる時は絶対外すんじゃないぞ、いいね？」

「わ、分かりました…」

肩を掴まれていて怖い。そのあまりの剣幕におされ頷く。

「すいません、また後で来ます!!」

そう室戸先生に言い残し、走り出した。

—— side 蓮太郎 ——

「… で、お前が今回の俺達の応援だつてえのか？」

「ああそうだよ、里見蓮太郎、民警だ。ライセンスもあんだよ」

木更さんからの連絡を受けて向かった先の現場にいた、目の前の多田島茂徳警部… だったか？その警部にライセンスを見せる。

「… けつ、こんな不幸面な高校生の力を借りなきゃいけないんぞ、世も末だな全く」

「よお」

「不幸関係ねえだろ!!。はん、アンタだつてヤクザが仏に見える程怖い顔してる癖によく言うぜ」

「警察にはこれくらいがちようどいいんだよ…!!」

「だつたら民警の顔に文句つけんじゃねえ…!!」

二人、睨み合う。

「警部！ 民警の方も遊んでないで早くして下さい!!」

「遊んでねえ!!!」

「すすすすいません!!」

しまった、思わず警部の部下に怒鳴ってしまった。

「… 行くか」

「… ああ」

流石に反省した。

とりあえず現場であるアパートに向かう。その間に連絡を入れておこう。

「… おう、延珠か?… ああ? 悪かった悪かった! あとで全部説明すつから! それよりも仕事だ。ガストレアが出た。ポイントは○○。片付いてるかもしれんが、とりあえず来てくれ」

伝えることを伝えて電話を切る。

「お前のイニシエーターか？」

「ああ。もう家に戻ってみたいだからよかつたぜ。まあ今回はステージイらしいから、手を借りるまでもないかもしれないねえな」

情報通りなら、今回のガストレアはそうそう苦労しないだろう。だが、

「…何？突入した奴がいるだ?!」

「は？」

警部の口からとんでもない発言が聞こえた。怒鳴られたのは、ドアの前にいる、突入隊の格好をした、警部の部下と思われる男だ。

「だ、だって民警に手柄を取られたくなかったんですよ!!あいつら現場を荒らしやがって…!」

「馬鹿野郎!!絶対にするなとあれほど言っただろうが!!」

… まあ後の祭りとしか…。生きてりや御の字、くらいだな。とりあえず、

「警部、どいてくれ。俺が行く」

矢面に立つのは、民警の俺だ。

警部達は外で待たせることにして、突入の準備をする。ドアに背をつけ、愛用のXD拳銃を抜く。

「… そういや警部。ここ、住人は？」

「男の1人暮らしたつてよ。寂しいもんだ」

「… そうか、了解」

最後の発言はいらない気がする。

一度深呼吸。指でカウントをする。

… 3、2、1、

「GOッ!!」

ドアを蹴破り突入する。だがガストレアはいない。それよりも、だ。

「なんだよ、これ…」

大量の血飛沫が飛び散っている。壁、床、天井関係なく。一体何があつたというのか。

(明らかに一人分の血じゃねえ…どうということだ)

いや、もしかしたらガストレアに殺された突入隊の血か？

「警b…」

「ほう… 君も民警かね？」

「ッ!？」

声に驚き、急いで振り向く。すると隣の部屋の窓際に、一人の男が立っていた。

… 白い仮面、シルクハットに赤い燕尾服。腰には二丁の拳銃を吊っている。ふざけ

ているとしか思えない格好だ。

「アンタも、ガストレアを追ってきた同業者なのか？」

一応声をかけてみるが、まともな答えが返ってくるとは鼻っから考えていないさ。

「それでもあるし、それでもないとも言える」

案の定分からなかった。

「… どういう意味だ？」

「クククツ… ガストレアを追ってきたのも目的ではある。それだけではないけどね…。それとあと一つ、はつきりしていることがある。それは」

そいつは一回言葉を切り、

「私が、その警官達を殺したということだ」

とんでもないことを言ってきた。ついでに見下ろすと、警官が、それも二人も床に転がっていた。恐らく殺されている。

(こいつ… ツ!!)

条件反射で体が動く。

天童式戦闘術二の型十六番 …

『隠禅・黒天風』ツ!!!

回し蹴りを放つ。が、

「ふむ… 中々いい動きだ、だが」

「グウツ!？」

「あの少年の方がまだいい動きをするね」

「これをおつさり受け止められ、その上腹に一発もらう。軽く放つたようにみえたが、思い一撃で、思わず膝をつく。」

「カハツ…」

「殺すには惜しい。それに他にやることもある。ここは引かせてもらおう… それと民警君、君の名前は何とこのかね?」

「…蓮太郎だ…」

「やつとのかつて答える。」

「そうか。では里見君、また会おう」

「待ちやがれ… てめえは何者だ…!？」

「私かい?… 私は、世界を滅ぼすものだ。誰にも私を止められない。では、今度こそ失礼するよ」

「それ、俺にそれ以上何もせず、窓から飛び降りて姿を消した。」

「チイツ… しかもまたつて…」

「取り逃がした…。それに、また、とはどういう意味なのだろうか。」

(あと、『あの少年』つてのも誰なんだ…?)

謎の男の発言は俺に多くの疑問を残していった。

「おい、民警!!大丈夫か…げっ!?こりやひでえ…」

するとそこに多田島警部が入ってきた。入り口に残しておいて正解だったな…。痛みもマシになってきたので立ち上がり、見栄を張る。

「ああ、なんとかか…な」

「そうか、んで、この血は?」

「多分アンタの部下だ。死体がそこに…うえっ…」

「ここで戻すな!戻すなら外いけ外!」

死体などまともに見たことはなかったので、吐き気が込み上げてきたが、なんとか堪えた。

さつきは仮面野郎を倒すことで頭が一杯になり、気にしてる余裕がなかったが…全身に穴が空いている。かなり酷い有様だ…

(うっ…また吐き気が…)

「ちっ、馬鹿野郎共が…」

警部が呻く。同時に俺も吐き気に呻く。まあやり切れないかもしれないが、動いてもらうしかない…。うおえ…。吐き気を無理やり飲み下す。

「警部！こつちきてください！」

そこへ、警部にお呼びがかかったのでついていく。場所はさつき仮面野郎がいた窓際だ。

「ん？なんだ、血痕か…？」

そう、そこには血痕があった。しかもベランダまでいって、そこで途切れている。

「だけどなんで血痕がこんなところにあるんだ？」

「ガイシヤがガストレアにここで襲われて、必死で飛び降りた、つてとこだろうな」

「やっぱそうなる……ん？」

そこでとある事実に思い当たる。

「このままでと一感染爆発《パンデミック》が起こっちゃう…！！」

感染源ガストレアもこの1人暮らしの男の死体も残っていない。そして、血痕。被害者はガストレアウイルスを注入されている可能性がある。

感染爆発一《パンデミック》が二ヶ所で起こったりしたら、東京エリアが終わりかねない。

驚きに、一気に吐き気も収まり、頭がフル回転し始める。

「やべえ…、それだけはやらせるか!!」

「分かってる！いくぞ民警！」

逃げたガストレアを探そうと部屋を出ようとしたその時、

ドオンツ!!

「おう!？」

「なんだ!？」

突然の爆発音。窓から外をみると、少し離れた地点から土煙が登っている。

「あそこか! いくぞ警部!」

「つたく!! お前ら、周辺住民をしつかり退避させとけよ!!」

「やっぱ仕事できるなこの人…。」

現場へ駆けつける前から見えていたが、蜘蛛型ガストレア…。情報通り、ステージI だな。

「ステージI、モデル・スパイダーのガストレアを確認! 交戦を開始する!!」

「蓮太郎!!」

交戦に入ろうとした俺の耳に少女の声が届く。

「おう延珠、着いてたか! さっさと片付けろ! おおお…」

「妾をほつといて何をしておったのだ!」

「だ、だから後で説明するって言っただろ…。げほつ」

俺のイニシエーターは、何故か腹に膝蹴りを入れて下さいました。なんでだチキシヨウ。さっきの仮面野郎にもらったダメージもぶり返し、吐きそうになる。

「なんで怒ってんだよお前…。」

「さっきも言ったとおり妾を放つたらかしたからだ。次にそのような事したら…。」

「したら?」

「『妾はついに蓮太郎と結婚したのだーっ!!』と叫びながら街を走り回って既成事実化する」

「やめろお前と董先生のせいだたださえ近所の人から変な目で見られてるのにこれ以上行ったら東京エリアにいられなくなる!!」

たださえ先生が延珠に変なこと吹き込むから苦労してるってのに!!

「お前からコントしてないでこいつを早く片付けてくれ!!」

「こもつともであると思う。だが、俺は痛む腹を抑えながら告げる。」

「多田島警部…、悪いがこれはコントじゃなくてマジで俺の社会生命がかかってた…。」

「てめえの社会生命なんてどうでもいいから片付けるぞ!!」

ひでえ…、ひでえよこの人…。沈む俺に構わず警部が拳銃を打つが、

「… やっぱ効かねえよなあ…」

「ああ、怒らせるだけだからやめとけ」

通常の銃弾のようで、すぐに傷が修復されてしまった。

「だから、バラニウム弾を使う」

X D拳銃を抜いて打つ。今度は傷が修復せず、確かなダメージになった。

「延珠、挟み撃ちにする。俺が注意を引くから、お前は後ろに回って蹴り飛ばしてとどめをさせ」

「分かったのだ」

瞬間、延珠の目が赤熱。能力を解放した証拠だ。

「そうか、そのガキが」

「藍原延珠、モデルラビットのイニシエーターだ。覚えておけ公僕め」

そう言った後、延珠はそのまま目で捉えられないスピードで壁を蹴ってガストレアの背後へ回る。それまでは…

「俺が相手だバケモン！」

X D拳銃を脚を狙って打つ。だが今度は軽くジャンプすることにより交わされてしまった。… というか

「こつちに向かって飛んできやがったアイツ…！」

巨体が迫ってくる。急いで警部を連れて退避。だがガストレアも早い。弾幕として闇雲に打った銃が何処かにあたったのか、ガストレアが怒りの声をあげて更につっこんできた。

(まだスピード上がるのかこいつ!!)

見た目に似合わず速い。避けられるか?!? そう思った次の瞬間、

ドゴオツ!!

そんな音と共にガストレアが横にすっ飛んでいった。何度もバウンドして…ピクリとも動かなくなつた。

「延珠か」

「全く、蓮太郎はすぐ油断する」

先程までガストレアがいた場所には、延珠が誇らしげな顔で立っていた。

延珠の話によると、このガストレアは延珠の目の前で男から変化したらしい。その直前に延珠が聞いた名前と、あの部屋の住人の名前が一致した。

「よくやった延珠、偉いぞ」

「おお、そうか! なら蓮太郎! 少ししやがむのだ」

「?」

とりあえず言われたとおりしやがむ。そこへ

延珠がキスをしてきた。

しかもマウスストウマウスツ…!

慌てて立ち上がる。

「お、おい延珠!」

「お疲れ様のキスなのだ! 妾は蓮太郎のフィアンセなのだから問題ないぞ!」

「そうじゃなくてだな…!!」

「何だもつとして欲しかったのか? しょうがないな蓮太郎は」

「頼むから話を聞いてくれ…!!」

口をちゅくとすぼめる延珠の頭を掴んで押しとどめる。とりあえず言い訳はしとこ
う。

「あー警部? 今のは…」

カシヤン

何故か警部が手錠をだした。

「……………その心は?」

「都青少年健全育成条例に真つ向から対立している超絶不幸面の高校生がいたから問答
無用で現行犯逮捕しておこうと思っとなあ」

「その条例まだ有効だったんだな!!しかも不幸面関係ねえ!!」
もうなんか精神的に疲れた。

「ところで蓮太郎、これを忘れてると思うのだが」

そんな俺に、延珠がそう言いながら一枚の広告をポケットから出して見せてきた。

「ん?… あつ、やべえもう時間ねえじゃねえか!!急ぐぞ延珠!!」

「了解なのだ!!」

「これは急がないと行けない。すぐに駆け出す。

「お、おい民警!どこ行くんだ!」

後ろから警部の声がしたから背中越しに答えてやる。

「もやしが一袋六円なんだよ!!」

「……もやし……」という呟きが風に乗って聞こえてきたが気にしない。

「このもやしを逃す訳にはいかねえんだよ…!!!

6. 晒される闇

蓮太郎が影胤と遭遇したその頃…

l l l s i d e 悠梨 l l l

神機を見つけるまでに1時間近くかかった。

… え? どうやって見つけたかって?

近くまでできたところで、アーティフィシャル CNS と意識をつなげ、ある程度の場所を掴みながら探してやっと見つけられた。

「リツカさんの言ってた『神機の意思』ってのがこんなので役にたつなんてね…」

普段神機を無くす、なんてことは絶対になかったから不安だったよ…。 まあ見つかって良かったよ僕の相棒!!

神機と腕輪を繋ぐ。さて動作は…。 うん、変形問題なし。ちゃんと使えるようだ。

他に変なところといえ、近くにアラガミ…。 じゃないや、ガストレアが砕け散ったようなカスが落ちてるけど、大丈夫だよ。

さて帰ろう。

何もなかったのでカット。

「よしモノリスが見えた」

何も問題なく、ガストレアにエンカウントもせずにモノリスまで戻ってこれた。

（えつとサンングラスはどこにしまったっけかなー……ん？）

室戸先生の忠告を思い出し、サンングラスを出そうとした時。

空から羽音が聞こえてきた。ガストレアだろう。そう思い、空を見上げる。

「……あれ、トンボかな？」

細長い胴体に、大きい複眼、4枚羽、間違いなくトンボだ。

よく分からないけど、モノリスの100m程手前をずっとウロウロしている。最後の最後でガストレアに出会ってしまった。

「んー、まあ一応倒しとこうか…」

多分東京エリアに入れちゃいけないんだろうし。ここで落としておくとしよう。

神機を変形させてシロガネ強襲極型（銃身）を出し、入ってるバレットを確認する。

「えつと、あ、無属性連射弾があるね」

無属性連射弾はOP（オラクルポイント。バレットを打つのに必要となる。アラガミを攻撃することで吸収している）を消費しないので、無限に打つことが出来る。その分

ダメージは小さいが、今ここにあるのはありがたかった。

「OP回収できないもんねえ……」

OPがなければ普通のバレットは打つことが出来ない。なので、このバレットがあつて本当に助かったと思う。

えつとあとは……

「……無幻弾（四属性）……」

とあるサイトに乗っていたバレットエディットを元に作ったバレットなんだけど、バースト1v3にして節約をつけると「無限に打てる」のでちよつと捻った名前……。を……つけた……んだ……。……ロミオ先輩に「中二病だー!!」って笑われたけど!

因みに四属性は『炎・氷・雷・神』ね。こっちはOP消費しないと打てない。

でもこれは、

「向こうで使つてたままだねこれ」

それでいいはずだが、ご都合主義だなあ……と思つてしまう。

軽く頬を叩いて気を引き締め、シロガネをガストレアに向ける。装填するのは連射弾だ。OPを使うのは勿体無い。

ガストレアに狙いをつけ、引き金を引く。

「……落ちろ、蚊トンボ!!!」

今言わなくていつ言うか!! と言わんばかりのドヤ顔をした自信がある。同時に、銃口から連射弾が放たれる。10発程打った。

「……………」

全部外れた。敵が動くのを計算に入れてなかった。

…ま、的が大きくないから仕方ない!!

自分で自分に言い訳をして軽いショックを振り払う。そうこうしている間に、ガストレアもこちらに気付いたのか、急降下してきた。

「うわっ、危ない!」

再度引き金を引く。今度は頭に着弾して、ガストレアが地面に叩きつけられた。

「……………ふっ、たわいも無い。鎧袖一触とはこのことだ」

格好つけて見るが、ギル辺りが見てたら「いや全然締まってねーからな」と突っ込まれそうな気がするよ。

キキイ…

(あ、まだ生きてるんだっけ)

ガストレアの鳴き声でしたので、そのことを思い出す。

室戸先生に借りた拳銃を抜いて、ガストレアに照準を定め、撃ち抜く。今度こそガストレアの生命活動を停止させた。

「やっぱバラニウム使われてた。護身用だねこれは」

室戸先生が進んで戦闘をするとは思えないからきつとそうだろう。後でお礼ちゃんと言わないと。

対ガストレア戦を経験出来たし。

さてと… どうしますかね。

サングラスかけて、と。

「よし、とりあえず室戸先生のところに戻ろう」

さてと… どうしますかね。

(完全に道に迷ったあああああ!!!)

いやマジでどうしようこれ!! 室戸先生に後で戻る、って言ったのに!! 道を聞いてないから分からないの当たり前じゃん!!

さっきは必死でどこ通ったかなんて覚えてないし!!

人生マジクソゲーだよもう… 色々ありすぎてブラッドの皆と会えない事を悲しむ暇もないよ…。

深くため息をつく。

その時。

「… ンでお前ら… 奴がエリアにい… よ!!」

「早く出てつてよ!!… のくせに!」

「… 悪魔め!!」

(?)

何かを罵っている声… かな? しかも大勢。

… ちよつと見に行つてみよう。野次馬根性ですが何か?

—————

声の発生源へ向かつて、僕がみたもの。それは…。

「出てけよ!!お前らなんか東京エリアにいるんじゃねえ!!」

「空気感染するんだろ!!早く死ねよ悪魔!」

(な… 何、これ…!?)

1人の女の子… 多分7, 8歳だろう… その子がたくさんの大人からリンチを受けている場面だった。

しかもそれを助けようとする人もいない。見ても完全に無視している。

… こんなのが許されるか!!

「何をしてるんですかアンタ達は?!」

すぐに体が動いた。神機をその場において飛び込む。

「な、だ、誰だお前!？」

「なんでそいつを守るんだよ!？」

「お前頭おかしいのか!?! そいつらは俺の家族を殺したガストレアなんだぞ!!」

「アンタ達の方がおかしいですよ!! 子供を大勢でリンチするなんて!! それに実際に殺したのはこの子じゃないでしょう!!」

「うるせえ!! そいつらはバケモンの仲間なんだ!!」

しまった、正論が逆効果だった! ますます大人達がヒートアップする。

「どこがおかしいって言うんだよ!?! そいつは『呪われた子供たち』なんだぞ!!」

「そうよ! 『赤目』なのよ!! 殺されて当たり前前の存在なのに、なんで守る必要があるのよ!?!」

(『呪われた子供たち』:!! 『赤目』!?)

大人達の言ってる意味が全くわからない。室戸先生から聞いていないことばかりだ。

ここで、気付く。

(この表情は…憎しみ?)

大人達が浮かべる表情が、一様にそうだった。

「この子が、アンタ達の家族を殺したっていうのか!?!」

一瞬、うつ、と言葉に詰まった様子を見せる人もいたが、全く堪えた様子のない奴が反論してくる。

「違う!!だが『赤目』はバケモノの仲間なんだぞ!!なんでそれがわかんねえんだよ!!」
全然わかんないのはこっちだ!!

でも、これだけは分かった。

(この世界では、赤目は忌避されている、ってことか。だから…)

だから、室戸先生はサングラスも渡してくれたのだろう。…拳銃のことも含めてお礼しなきゃなあ。途中で飛び出した僕が悪いんだし。

でも、それとこれとは、話は別だ。

「そもそもよってたかって子供をリンチするなんてこと!!人として恥ずかしくないんですか!」

またすぐに反論がくる。

「そいつらは『人』じゃなくて『ガストレア』だからな!!」

「そうだ!!ガストレアウィルスを持つてるんだぞ!!俺達に感染するかもしれないんだ!危険を野放ししておけるかよ!」

「人殺しなんだぞ、そいつらはッ」

周りの人も頷いている。その考えが当たり前のようなようだ。

「アンタ達って人は……!!」

「お、お兄さん……」

更に言い募ろうとする僕を止める声。…女の子だ。目は…赤かった。

「大丈夫!？」

「はい… 大丈夫です… いつものことなんで…」

「いつものこと!?!それにこの傷だって…」

「この傷も、すぐに治ります。私は『呪われた子供たち』ですから…」

また『呪われた子供たち』か!!

そう思う傍から、傷が治っていく。ゴッドイーターでもありえない治癒力だ。

「いいからそいつを守るのをやめろ! 大人しく渡せば、お前にまで手は出さない!」

「そいつらは、早く処分しなきゃいけないんだよっ!!」

… 処分? この子を? 罪もないのに?」

「いい加減どきやがれこいつ!! 殺さなきゃなんないんだよ!!」

プツン

「… アンタ達、それでも人ですか?」

恐ろしく冷たい声が出た。

僕は今、一般人にも感じ取れる程の殺気を出している。それにあてられたのだろう、

正面の数人が後ずさりした。それ以外の人も、殺気を感じ取ってはいるのか、顔を青ざめさせている。

「アンタ達も、ホントの死の恐怖は体験してるんじゃないのか!?! 生きたくても生きられない、自分が体験した最悪の状況に、なんで追い込む!?!」

「それは…!!」

「…モノリスがあるから、あれが侵入を防いでくれるからって安心しきっているのか!?!」

今度は反論を封殺した。

思い出すのは、アラガミに襲われた人々の苦しむ顔だ。皆、大怪我を負って、苦しんで死んでいった。アラガミ化した人もいただろう。

僕のいた世界のモノリスといえる『アラガミ防壁』は、モノリス程の決定的な対策となり得ていない。多数のオラクル細胞を配合してアラガミが寄り付かないように作られている。しかし、配合によつては、ある種のアラガミの好む味となるからだ。だから、向こうの世界は、この世界以上に死と隣り合わせ。いつアラガミが襲ってくるのか分からない。そんな恐怖に怯えて、人は生きていた。

『完全な守り』が出来てしまったせいで、安心しきった反動か。

「アンタ達のほうが、よっぽどおかしい!! そんなに人殺しが楽しいか!?!」

「お兄さん！もう、いいですから…!!」

怒り狂う僕を女の子がとめる。何故か、弱々しく笑っている。

(どうして…)

そんな顔をするの!?胸が締め付けられる。

…でも、これ以上やると女の子が悲しむだろう。

だから、

「ちよつとごめんね」

「え?きやつ!」

断りをいれて、女の子を抱き上げる。周りから悲鳴が聞こえたが気にしない。大方、僕がガストレアウイルスに感染したと思ったんだらうね。

そのまま、人垣に近づく。すると、僕の殺気のせいか、または女の子に近づくのが嫌なのか、人垣が割れて、道が出来た。その道をさっさと通り抜けて、神機を回収し、人達の前から姿を消した。

—————

「…ごめんね、怖がらせちゃったかな?」

ある程度距離をとった所で、女の子を下ろし謝罪する。

「あ、いえ、此方こそ、助けてくださって本当にありがとうございます…!」

女の子が頭を下げる。…というか、

「うわあああな、泣かないで！ね!？」

女の子が泣き始めていた。どうしたらいいか分からずパニックになる。

「ご、ごめんなさ…今ま、ですつと、怖くて、助けてもらっ、なんてなく、てっ…」

… ああ、そうだったのか。

とりあえず軽く頭を撫でてあげながら、少ししやがんで目線を合わせて、言葉を発する。

「うん、もう大丈夫だよ… ほら、だから泣かないで、ね?」

必死に言葉を絞り出す。

「…す、すいませ…もう、大丈夫、ですから…」

「無理しなくていいんだよ」

流石にここで見捨てると後で絶対嫌な気持ちになる。

「あの…」

「ん?どうしたの?」

「どうして… 私なんかを助けてくれたんですか?」

当たり前前の事を聞かれた。

「いや… あれを見逃せってほうが無理かな…」

… ただじーっと見られてる。… 今更だけどこの子かなり可愛いな。腰まである綺麗な黒髪に、キリツとした目。でもキツイイメージは全くなく、顔立ちはまるで日本人形のような可愛さだ。

… ここで考えることじゃないし、それに、

(建前つてばれてるね、うん)

正直に話さなきゃいけないか。

「よくある理由だけど、似たような体験をしたから放っておけなかった、かな…。」

「… 似てる、ですか？」

「うん、まあね」

でも、この子に話す訳にはいかない。信じてもらえらると思えないしね。

… そろそろお別れかな。落ち着いてきたみたいだし。

「ねえ、君の家はどこかな？」

「… 外周区です」

外周区？また知らない単語が…。

「えつと、どつち？」

「… あつちです」

モノリスの方を指差した。なるほど、だから外周区ね。

「じゃあ送って行ってあげるよ」

「……………」

今度は、無言で大きく首を横に振る女の子。否定？

「…嫌なの？」

聞いてみる。すると、女の子は僕の服の裾を軽くつまんで、

「…お兄さんと、一緒にいたいです」

「……………え」

…………さてと、どうしますかね（3回目）

l l l s i d e 蓮太郎 l l l

もやし特売、延珠と合わせて2袋手に入れた。

「あくよかった、なんとか間に合ったぜ」

「思い出させた妾に感謝するのだぞ、蓮太郎」

「はいはいありがとよ」

その他必要な食材を買い込み（と言ってもそんなに多くないが。家計は火の車だ）、スーパーを出す。

「遅いぞ蓮太郎!!もっと早く歩くのだ!!」

「俺はお前みたいに若くねーからゆっくり歩かせろ」

全く… 楽しそうだな延珠のやつ。一年前じゃ考えられなかった光景だ。少し笑みがこぼれる。

しばらく歩いたところで、延珠が突然立ち止まった。

「蓮太郎蓮太郎、すごい武器を持った奴がおるぞ。あれも民警かな?」

「あ?… うわ、でかいなあれ!バスターブレードってやつか?にしてもあの体格で振り回せるなんてすげえな…」

延珠が見つけたのは、巨大な剣を持った少年だった。隣にいる女の子はイニシエーターだろうか。

しかし凄い剣だ。ガン見してしまう。一体序列は如何程だろうか、あの白髪の人物は。

「…ん?白髪?」

そういえば… あの少年はどっかで見たことのある背丈に、どっかで見たことのある服装だ。

… 間違いねえ、こいつだ。

「おい、悠梨!」

その言葉に少年、悠梨が振り向く。同時に女の子は悠梨の背後に隠れた。

「あ、里見さん。終わったんですか？お疲れ様です」

「んー、終わったとは言い難いけどな。ところで、お前は先生のとこにいたんじゃないのか？」

「実は、これが見つからなくて…」

そう言つて、その巨大な剣を見せる。延珠がそれを見て「おーっ!!」と目を輝かせた。

「それは？」

「神機、と言います。僕達の武器ですよ」

神機… 初耳の言葉だ。

神機とやらを近くで見ると、刀身以外にも板状のパーツや銃身みたいなものがついている。剣以外にも使い道があるのか？

俺の奇異のこもった目線を察したのか、悠梨が口を開く。

「詳しくは、室戸先生のとこでまとめて説明、でいいですか？その代わり、室戸先生に話した分をこの後話しますので」

「分かった、それで構わん」

「助かります」

交渉成立。

「あとこれは興味本位なんだが。その剣つてどんぐらいの重さなんだ？」

「確かこの装備だと… 30〜40kgぐらいだったと思います」

「40kg?」

今度は延珠と声ハモる。今日多いハモるの。

いやしかし、40kgつてどうやって持ち上げてるんだ…。

「すごいのだ!! 妾にも持たせてくれぬか!」

延珠は使つてみたいと思つたのだろう、神機の柄と思われる部分に手を伸ばす。だが

「ツ!? 駄目ツ!!」

「え!」

悠梨が大声を出したかと思うと、大きくバックステップした。面食らう延珠と俺。

… その直後、悠梨の影にいた女の子もすぐに悠梨についていき、また悠梨の影に隠れた。なんだあれ可愛い。

(いや違う、そこじゃなくて)

… 悠梨が大声を出したのも驚いたが、バックステップした距離も俺に驚きをもたらした。

(ひとつ飛びで3mぐらい行きやがった… もしかしたらこれが、『ゴッドイーター』の力の一部か)

「危ないですよ!!死にたいんですか!!」

三たび、驚愕する。

「は!?!どういことだ悠梨!?!」

「他人の神機に触つてはいけない、つてことは常識じやな、いです…。ね…。」

悠梨の声がしりすぼみになる。その後、バツの悪そうな顔になる。

「… すいません、里見さん。言い過ぎました。君も、ごめんね」

「いいのだ!妾も許可なく触ろうとしたしな、すまなかつた」

延珠は基本的に聞き分けのいい子だから、すぐに和解できた。良かった。

「でも、改めてお願いします。この神機に僕以外が触れると、神機に『捕食』されます。そうしたら、死ぬか、アラガミ化するしかないです。もしアラガミ化した場合、責任は僕に発生するので、僕が介錯を務めなければなりません。…。少しでも知り合つた人を、殺したくはありません。なので絶対に触れないで下さい。お願いします…。」

「…ああ、分かつた」

悠梨が心優しい奴だつてこともな。分からなかつた捕食やらアラガミは後で聞くとしよう。

「悠梨、もう一つ聞くだぞ」

「この子、ですわね」

女の子の頭を撫でる、悠梨の言葉に頷く。

何故か、その女の子は俺達から顔を隠していたので、気になったのだ。… まあなんとなく予想はつくけどな。

「… 大人達にリンチされていたのを助けたんです」

その言葉で、理解する。

「そうか… やつぱり『呪われた子供たち』なんだな」

悠梨の肩が跳ねる。ビンゴだな。

途端、悠梨から殺気が溢れ出してきた。そのあまりの濃密さに気圧される。

「お、おい、悠梨」

「… 里見さん、『呪われた子供たち』ってなんなんですか!?! なんでこの子はあんな酷い目に遭わなきゃいけないんですか!?!」

… これは相当酷い現場を見たか。でなければ、ここまでの反応を示さないだろう。

「… 『呪われた子供たち』つつーのは、簡単に言えば、ガストレアウイルスを体内に宿した『人間』だ」

あえて、人間、の部分強調する。そう、彼女達は人間なんだ。

「人間、ですよ。そうですね…」

悠梨が繰り返す。なにか思うところがあるのか。

「里見さんみたいな考え方の人もいるんですね。安心しました」

「いや、俺もこいつと出会うまでは『そっち側』だったからな、人の事は言えねえよ」

「そうですか、その子も…」

「藍原延珠、蓮太郎のイニシエーターだ！よろしく頼むぞ」

「僕は緋上悠梨です。こちらこそよろしくね延珠ちゃん」

自己紹介した延珠の頭を撫でる。嬉しそうに見上げてきた。こんな可愛いんだぞ、こいつらがバケモンの訳があるかよ。

「ちよいと講釈気味になるが、聞いてくれ。『子供たち』の特徴は主に4つだ」

・人間を越える身体能力

・体内に宿すガストレアごとの特殊能力

・ガストレアと同じ『赤目』

・女兒にだけ発現する。男児は発現しない

「… つとまあ、こんなとこだな。俺と先生がお前を見て驚いた理由が分かったか？」

「よく分かりました。僕が男だから、だったんですね」

分かってもらえたようで何よりだ。当然だが延珠には分からなかったようで、

「妾には悠梨が何が分かったのか分からぬぞ？」

と首を傾げた。どうするか…。と悩んだが、

「里見さん、見せた方が早いです。…。延珠ちゃん、こういうことだよ」

止める間もなくサングラスを外し、その赤目を晒す。延珠と女の子が驚きでフリーズした。

俺はといえば、ヤバい！と思い急いで周りを見回す。偶然にも他に人はいなかった。ふう…。危ねえ。

「…。悠梨、もつと注意を払ってくれ。見られると不味い」

「一応周りは確認しましたが…。分かりました」

俺の心臓にも悪いしな。悠梨はサングラスを掛け直す

ここら辺でフリーズから延珠達が回復する。

「…。ど、どういふことなのだ悠梨！お主実は女なのか!？」

「その発想はなかった」

まあ確かに可愛い顔ではあるが…。って俺は何を考えてんだ!?!そっちの気はないぞ

!!

「え、延珠ちゃん僕は男だからね!？」

「むう、そうか」

次の発言が爆弾だった。

「名前も女つぼいし、身長も小さいから…。」

「延珠ちゃん？」

悠梨の声の温度が下がった。

「ど、どうしたのだ悠梨…？」

「あはは…、小さいって、面白いこと言うねえ。でも、身長は、あまり言わないで欲しいなあ…。」

笑ってるけど目が笑ってない!!悠梨怖え!!!

「わ、分かったのだ!!分かったから元に戻るのだ!!」

「うん、頼むね?」

悠梨の声が元に戻った。…、これはガチでネタにしないほうがよさそうだ。

俺と延珠は絶対に口にしないと硬く堅く心に誓った。

よし、仕切り直した。

「ごほん…、そろそろ行くか？」

「そうしましょう。…、君は、どうする？」

悠梨の問いに、女の子が頷いた。ついて行くということだろう。しかし悠梨の影に隠れて出てこようとしない。

「…、安心しろ、俺達は差別主義者じゃない。それにこいつだつてそうだしな」

「そうだぞ。それに妾は、蓮太郎のフィアンセだしな！」

「ふい、フィアンセ……？」

悠梨がありえない、といった目でみてくる。また一つ、新たな誤解がここに誕生した。

「違うからな、こいつの妄言だから真に受けるんじゃないぞ！」

「分かりました、里見さんはロリコンなんですな」

「全く理解してねえよコイツ!!」

頼むから勘弁してくれ！

しかし、こんなことがおかしかったのか、女の子がクスツと笑った。そのおかげか、空気が柔らかくなった感じがする。

「……ほら、帰るぞ。お前らもついてこい」

「了解です。……行く？」

4人で、連れ立って歩く。

(……あ、警部から報奨金もらい忘れてた)

7. 広がる傷

— side 悠梨 —

どこかに連絡し、言い合いになった里見さんが落ち込みながら電話を切った後。約束通り、室戸先生に話した分を里見さんと延珠ちゃんに話した。

興味半分、驚き半分と言った反応。特に延珠ちゃんは、毎回オーバーリアクションで、見えて楽しかった。

そうこうしてうちに目的地にいたっぽいね。日も暮れてきた。

「ここ、ここが天童民間警備会社だ！」

「…。そ、そうですか」

あえて何も言うまい。

1階がゲイバーで、2階がキャバクラで、4階が金貸し（多分闇金）だなんて気にしないよ、うん…!!

「…。こっちだ」

里見さんに続き、階段を3階まで登り、そのドアを開けて入る。

「戻ったぜ、木更さん」

「ただいまなのだ！」

「遅い！どこ行つてたのよ里見君?!… あら？お客さん？」

机を叩くバン！という音と女性の声があった。

奥を見ると、案の定女性が1人。あれが木更さん？だろうか。だが、

(すごい美人さんだなあ…)

少し見惚れる。と

「痛い痛い痛い!?!」

「[?..]」

女の子に脇腹を抓られた！しかも3人に見えない角度で。巧妙な…。

「え、えつと、すいません驚かせて。僕は緋上悠梨といいます」

「そう、私は天童木更。この天童民間警備会社の社長よ。とりあえず、そこにでも座つて」

握手をかわす。学生で社長か…。すごいな。お言葉に甘えてソファに座らせてもらう。神機はその脇に置いた。

「それで、貴方はサングラスを外さないの？あとその女の子は？」

早い。

「き、木更さん、それは後でよくないか？」

「いいえ、今聞いわ。仕事相手がそんなので信頼しろ、って方が無理よ。だいたいその武器も気になるし」

「いや仕事相手じゃないんだが…」

里見さんの話が耳に入っていないようだ。仕方ない。

一応蓮太郎さんを見る。すまない、と言いたそうな表情で頷いた。差別主義者ではない、ということだろう。

サングラスを外す。

「!!…なるほど、そういうことね」

「はい。だけど『子供たち』ではありませんので。生まれつきです」

「分かってるわ。男の『子供たち』がいたならもつと大ニュースになつてるに違いないわ」

それもそうだ。

「ただ、その女の子の様に、『子供たち』も生まれつき目が赤い、ってことを覚えておきなさい」

… あつ、なんか色々バレてる。それに赤目の言い訳考えないとなあ。

「分かりました、ありがとうございます」

「別にいいわよ。あと貴方の過去とかも別に詮索しないから」
「助かります」

いい人だな天童さん。

「…それで里見くん、ガストレア、倒したんでしょね？」

里見さんの顔が青ざめる。

「…か、感染源ガストレアは逃した、というか姿自体見てないが、感染してガストレア化したのを一人な！」

「ホント!?じゃあ報酬入ったのよね!？」

……里見さんがどう謝るのか、参考にさせてもらおうかな。

「…悪い、木更さん、報酬貰い忘れた」

ストレートに言ったあ!!

「なっ…!？」

「もやしが特売で、そっち行ったら忘れた、すまん!!」

「……こ、この、おバカー…ツツツ!!!」

あ、天童さんがキレた。

「しよ、しようがねえだろ!それにほら!もやしちゃんと二袋手に入れたし!!」

「私の分は!？」

「一人一袋だから二袋が限界だった」

「そんな……」

そこで崩れ落ちる天童さん。

「もうダメ、ビフテキ、食べたい……」

「俺だつて食いてえよ……」

さつきの訂正。木更さんはいいい人だけど残念だ。何がとは言わないが。

……僕もなんだか、アナグラのシェフであるムツミちゃんの料理が恋しくなってきた

よ……あれもう食べられないのかなあ……。

……とりあえず、僕はある意味すごいところに拾われたらしい。

「もう……これもどっかの誰かさんが甲斐性なしのおバカさんだから……」

「はいはいすいません」

「これもどっかの超絶不幸面の人が序列12万位とか情けないから……」

「木更さんも不幸面言うかよ!!」

不幸面ネタはそのうち言う方が礼儀かな？

ところで、だ。

「里見さん、序列つて？」

「ん？ああ、序列つてのは民警の強さの指数を表すやつだ」

「なるほど。12万位ほどのくらいですか？」

あ、里見さんが目を逸らした。

「……決して、高くはないな、うん」

…これ以上聞かない方がよさそうだ。

と、木更さんが突然動いて里見さんの側にいき、耳打ちする。流石におかしいと思っただろう。

「ちよつと、里見くん。あの子どうしたの？流石に序列まで知らないなんておかしいわよ。記憶喪失か何かなの？」

「あー、いや、そうじゃねえんだが…」

ごめんなさい、この距離だと僕達には耳打ちはあんまり意味ないんです。

「…天童さん、僕は別の世界から来た、所謂、転生者というやつです」

「!？」

あ、里見さんも知らなかったか。

「すいません、ゴッドイーターは一部の感覚も強化されるので、聞こえてました」

「それでか、なるほどな」

「ゴッドイーター…聞いたことないわね、確かに。それが貴方の役目…だったのね？」

「はい、そうです。ガストレアみたいなバケモノ、アラガミを倒していました」

「それで、武器が根本的に違うのね」

「その通りです」

「なるほどね…。ありがとう、でもこれ以上はいいわ。結局聞く形になってしまったけど」

「いいですよ、大丈夫です」

「これくらいならまだ応えない。…。うん、まだ大丈夫。」

「…。ところでよ、悠梨はこれからどうすんだ？」

里見さんが話題を変えてきた。質問の意味を掴みかねる。

「これから、ってどういうことですか？」

「お前住む場所ないだろ、当てはあるのか？ってことだ」

「……あ。」

「言われてみればそうですね。完全に根無し草なのか僕」

「気付いてなかったのかよ…。」

「すごい苦笑いされてる…。」

これも転生あるある、だよな。○Sみたいに全寮制だから問題ない、ってわけでもないしねえ。うーん、どうしようかな…。」

「あと、その子もね。どうするつもりなのかしら？」

天童さんも続く。∴ そうなのだ。ここまで全く喋らず。ほぼ空気と化していたけど、この子は僕以上に問題かもしれない。

「どうも外周区とかいうところから来たみたいでして∴。その、助けた後に一回は送って行こうかと聞いたんですが、『お兄さんの側に居たい』って言われ、どうしたもんかと考えながら彷徨ってたら里見さんと遭遇しました」

「完全に落ちてるじゃねーか（じゃない）！」

「へ？」

落ちてる、とはどういう意味だろうか？

「この子、唐変木の片鱗ありね∴。」

「それはともかく、やっぱ外周区か∴。」

「残念だけど、今の僕には養う金なんてないですしね∴。」

なんか言われた気もするが、突っ込んでたら話が進まないからスルーする。でも発言したことも事実だ。

「そんな!?!なんとかならぬのか悠梨?!」

延珠ちゃんがそういうが、無理なものは無理だ。

「僕、今ifcも持ってないからね∴。」

「悠梨、この世界の単位は円だ」

「… 僕、今一円も持っていないからね…」

「なんか、すごい、締まらない。」

「とにかく… 今は無理なんだ…。」

「うう…ぐす…。」

女の子が、また泣き出してしまった。僕のせいだ…。

結局、泣いてる女の子一人救えない、ただの非力な人間だよ…。ホント、嫌になるなあ。

「… すいません、里見さん。その子を外周区まで送り届けてもらえませんか？僕だと道が分からないので」

「… いいのか？」

「いいも何も、悔しい事に僕には何も出来ませんから、ね」

「そう言つて、部屋を出ようとする。」

「待て、悠梨!!どこ行くつもりだ!?!」

「室戸先生のところですよ。このサングラスと銃を返さなきゃならないので」

「落ち着け、もう暗い。だから明日にしとけ。だいたい、そっちへも行き方も分からないだろ?」

うっ… 全く持ってその通りだ。

「明日は土曜だから、俺も行く。だから明日にしろ」

「… 分かりました。でも、少しだけ、1人にして下さい。必ず戻ります。… なので、その子をお願ひします」

背後の鳴き声が一層大きくなったが、すべて無視してドアをくぐった。

ビルを出る。確かにもう夜だった。

… いい加減、頭の整理もしたかったのも事実だ。

だけど、それ以上に胸が疼く。

「… 結局悲しませることになっちゃ、意味ないだろ僕… !!」

自分に悪態をつく。

… 僕は当てもなく、疲れるまで歩き回った。

—— side 蓮太郎——

悠梨が本当に出て行ってしまい、女の子が一層激しく泣いている。

… どうすんだよ、これ…。

「ほ、ほら、泣き止むのだ！ … ! … !! … !! 駄目だ、止まらぬ!!!」

延珠も色々試していたようだが、効果は全くなさそうだな…。

このまま連れてくのは相当不憫だが、だからと言って、俺達に養える金があるわけでもない。

… お手上げだな。

「… 里見くん、延珠ちゃん。ちよつと聞いてくれない？」

だが、木更さんが俺と延珠を呼び寄せた。

「ああ、この状況を解決出来るなら何でもいいぜ…。」

本気でそう思っている。

…しかし、木更さんの出した案は、今出せる案で最良に思えた。俺が反対する理由はない。

力強く頷く。横で、延珠も頷いた。

「よし、作戦決定ね。…ねえ、貴女、少し私の話を聞いてくれないかしら？」

木更さんが早速話しかけた。

… うまく行くといいんだがな。

8. 崩れそうな心と暗黒物質（ダークマター）

l l l s i d e 悠梨——

当てもなく、街灯もまばらな夜道を歩く。サングラスは一応かけてきたので、赤目がバレルことはないだろう。

……神機を置いてきちやったけど、あれだけ言ったから大丈夫だと信じたい。

1人になることで、ようやく考えることが出来た。

「……ブラッドの皆、どうなったかなあ……」

終末捕食は止まったのだろうか。

ナナは、ギルは、シエルは、ユノは、生還したのだろうか。

極東支部の皆も、生き残ったのだろうか。

そして、

（ジュリウスは、まだ生きてるんだろうか……）

あの謎の空間に残ったジュリウス。あれだけのアラガミを相手にしていたんだ、生半可なことではない。

それに、ジュリウスに託されたんだ。

「任されたのに……守る、って約束したのに……」

今度こそ、皆を守ってみせる、って誓ったのに……!!

もう……それが出来ないかもしれない……。

皆にも、会えないかもしれない……。

その事実が、心を折らんと襲ってくる。

……ごめんね、皆。肝心な時に役に立たない隊長で……。

寂しさが募る。

歩みが更に重くなった。

—————

天童民間警備会社の入口まで戻ってきたのは、もう夜もふけてきた頃だった。

当然電気も消えている。誰もいないのだろう。月明かりもここは差さない分、余計暗く思える。

まあ公園とかで寝ようか……そう思った時、ドアの脇に張り紙があるのに気付いた。しかも僕宛だ。

『悠梨へ』

鍵は開けてあるから入ってくれていいぞ。

木更さんにも許可はとつてある。

寝るならソファークらいしかないが、使ってくれ。

あと冷蔵庫に少しだけ食えるもん入れといた。いいもんじゃないが、必要だったら食ってくれ』

「……里見さん……」

頬を一粒の雫が伝う。

この世界にきて、初めて、涙を流した。

なんで、今日出会ったばかりの僕にここまで気を使ってくれるのだろう。なんで、話を全部信じてくれたのだろう。なんで……なんで……

……でも、今はその優しさが本当にありがたい。今は、この優しさに甘えさせてもらおうとしよう。

……いつか、この分は、必ず返さないとね。

涙を拭う。寂しさが幾分か和らいでいた。

ぐうー……

「……あははっ」

なんとも現金なものだ。少し安心した途端、空腹が気になるとは。

(まあ、こっちに来てから何も食べてないし当然か……)

何日経っているかも分からないが。食べ物も、ありがたく貰っておこう。扉を開けて事務所に入る。電気は……すぐ寝るし、いいか。今は暗くしときたい気分だし。

「えっと、冷蔵庫は……」

あ、あつた。ドアを開けて中を見ると、サンドイッチとゼリーがあつた。

「……いただきます」

やつぱり、空腹は最高の調味料だね。あつという間に食べてしまった。

「ご馳走様でした。明日、ちゃんとお礼を言わないとね……ふわあ……」

あ、いけない、瞼が落ちてきた。

時間は……午前2時か。眠くなるよね、そりゃ。

ソファを拝借する。すぐに激しい眠気が襲ってきて、眠りに落ちることができた。

夢は、特に見なかったと思う。

—————

朝チユン (ry

物音が耳に入り、目が覚めた。

「ん……?」

「あ、起きたのね悠梨君」

他人の声がして咄嗟に身構えそうになる。見ると、奥のほうから天童さんが顔を出していた。

「おはようございます、天童さん。昨日は色々ありがとうございます」

「やったのはほとんど里見くんよ。お礼なら彼に言つてちょうだい」

「いえ、それでも、ここを提供してくださったのは天童さんですから」

「……そう、なら受け取つておくわ。あと」

天童さんは一回言葉を切り、

「私ね、私的な関係で天童つて呼ばれるのが嫌いなもの。だから悠梨君も、木更、つて呼んでちょうだい」

「え、でも……」

「わ・か・つ・た・わ・ね・?」

謎のプレッシャー。

「……はい、分かりました木更さん」

満足そうに頷き、引つ込む天童さん……もとい木更さん。一体何をしているのだろうか?

「何をしてるんですか?」

「貴方の朝食を作つてるのよ。もう少し待つてなさい」

「……わざわざそこまでしていただかなくても」

朝食までもらってしまっただらもうなんかホントに……

ズキッ！

「痛ッ!?!」

なんか突然頭痛が襲ってきた。なんだろう、何か大切な事を忘れているのに、それを思い出してはいけない気がする。

「そんなこと言わないの。ほら、出来たわよ……どうかしたの?」

「いえ、何でも。すいません、本当にありがとうございます」

頭痛をなんとか誤魔化す。

運ばれてきたのは、パンとスクランブルエッグだ。すごい美味しそうだ。

せっかかここままでしてもらったのを、拒否するのは逆に悪いだろう。

「いただきます!」

早速、スクランブルエッグを口にする。

ふむ……表面はドロドロ、中はザラザラ。甘くなく、しよっぱ過ぎる味わいが

……お?

……うん?

……え? マジ?

体が、動かない。

(なんで!?)

一体何が入ってるっていうんだ、このスクランブルエッグに!?

「ど、どう…….?口に合えばいいのだけど……」

すみません木更さん、それどころじゃないです。

なんだ!? 一体僕に何が起こってるんだ!?

そこで、ふと、気付く。

この縛られた感じ。

これは、まさか、

(まさか……ホールドトラップ……!?)

なんでこの世界にあるの!?

「き、きさ…….ら、さ……」

それだけを発するのが限界だった。

体が前のめりに倒れ、頭を打ち付けた。意識が遠のく。木更さんが何かを言っている

が、全く耳に入ってこない。

完全に落ちる直前、思い出してしまった。

(そうだ、あれはナナの……)

そこまで考えて気を失った。

—————

「おーい悠梨ー!!こつちだこつちー!!早く来いよー!!」

ロミオ先輩が川の向こうから僕を呼んでる。早く行かなきゃ。

「でも、どうやって渡ればいいんだろう?」

目の前に横たわる川は、泳ごうにもけっこう流れは早い。

さてと、どうしたものか。

その前に、ここでの一番の問題は……と。

……ロミオ先輩が、既に死んでる、ってことだよな。

(まずいッ……!!)

僕はロミオ先輩に背を向けて全力で走り始めた!!

—————

「僕は……僕は死なないっ!!」

飛び起きた。ソファの上だ。

「うおっ!」「きゃっ!」「おおっ!」

3人の驚く声が聞こえた。見ると、里見さんと延珠ちゃんが何時の間にか来ていた。そして何故か、木更さんが正座している。

「あ、おはようございます、里見さん、延珠ちゃん」

「おはようなのだ悠梨！」

「よう、悠梨。．．．じゃなくて!!お前大丈夫か!？」

大丈夫、とはどういうことだろうか？

「お前さつきまで呼吸してなかったんだぞ!!」

「えっ」

何で僕はそんな事になってたの!?

(確か木更さんが来て、呼び方の話をして．．．あれ)

その後の記憶がない。おかしいな．．．?そもそも何故寝てたのかすら分からない。

僕の疑問を汲み取ったのか、里見さんが告げてくる。

「お前記憶飛んでるな．．．?いいか?お前は木更さんが作った料理を食べてぶっ倒れたんだ」

．．．あ。

「．．．そうだ、なんかホールドトラップにかかったみたいになったんだ」

「どんなんだよ、それ．．．」

それ以外に形容の仕様ががない。

あと、「気絶する前に思い出した事」も思い出した。ナナが作った独自のレーシヨンの味見をいくつもさせられたことだ。スタミナが減ったり、ヴェノムが治ったり、なんかよくわかんない効果ばっかだったけど。

・・・それでも、気絶はしなかったけどね、うん。どうなってるんだ木更さんの料理。もはや兵器じゃない？ガストレアもホールドできたりして。

「ごめんなさい、悠梨君。まさかここまでなるなんて・・・」

「だ、大丈夫ですよ木更さん!! 気にしないで下さい!! 好意でやってくれたのは分かっていますから」

「そうだが、お前が死にかけて事には変わりはないんだぞ・・・いいのか?」

里見さんが聞いてくる。まあ当然の心配だろう。

「ホントに大丈夫ですよ。木更さんも、もう気にしないで下さい」

「うん・・・、ありがとう悠梨君」

「ま、本人達がいいならいいか。でも木更さん、しばらく料理作んなよ? 前より破壊力が増してr・・・」

「わ、分かったわよ !! 分かったからそれ以上言わないで!!」

今更止めても無駄だと思うのは僕だけかな?

閑話休題。

木更さんが立ち上がり、仕切り直す。話題がガストレアに移る。とりあえず黙って聞いていよう。

「んんっ……ところで里見君、あの後感染源ガストレアの目撃情報は聞いたかしら？」

「いや、何も聞いてないな」

「やっぱり。私もネットで調べてみたのだけど、全く目撃情報がないのよ」

「……流石におかしいな、一件もないなんてのは……まさかとは思うが、光学迷彩みたいなのは」

「そうだったら今頃、東京エリアは大混乱に陥ってるでしょうね」

「だよなあ……カメレオンみたいなのが出てないだけ幸いなこったな」

そんなものらしい。

「つとまあ、情報上があったら連絡いれてくれ。俺は悠梨を先生のところに連れてくわ。悠梨、延珠、行くぞ」

どうやら今度は僕が動く番だ。神機を持ち上げる。

「了解です。いつてきますね、木更さん」

「行ってくるぞ木更！」

「ええ、いつてらっしゃい」

木更さんに見送られ、事務所を出る。

……あ、

「やっぱいサングラスと拳銃……」

行く理由を忘れるとこだった。

—————

道中。

「里見さん、遅くなりましたが、昨日は色々ありがとうございました」

「ん？ああ、別に気にすんな。お前身寄りも何もねえんだしよ」

事実だ。苦笑いしてしまう。

「あの子は、どうになりましたか？」

「……ああ、しつかり連れてったよ」

「……お手間をおかけしました」

「いいって。まあちよつと大変だったけどな」

だよねえ……あんなに泣いてたもんなあ。あの子が無事に生き続けることを願う

ばかりだ。

「……ところで延珠ちゃん、さつきからなんでこつちをニヤニヤしながら見てるの？」

そうなのだ。なんか延珠ちゃんがすごい見てくる。

「んふふ、なんでもないぞ♪」

なんかすごい楽しそうだ。

「気になるなあ……」

「秘密なのだ♪」

「ええ……」

「そ、そういうやお前、何時の間に木更さんのこと下の名前で呼ぶようになったんだ？」

里見さんが割って入ってきた。明らかに不自然だが、話してくれなさそうだし、まあいいか。

「えつとですな、気を失う前にそうしろって言われたんです。『天童、って呼ばれるのが嫌だから』って言ってましたけど」

「あー、やつばそんなところだったか」

「やつば、というと？」

「俺と木更さんは、天童の家を出奔してきている。ある理由があつてな。……悪いがそれは伏せさせてくれ」

「別に気にしませんよ。でも、なんで里見さんは苗字が天童じゃないんですか？」

「俺は天童の生まれじゃないからな」

何やら複雑そう。

「……俺は所謂戦災孤児ってやつでな。両親をガストレアに殺されて、死にかけてた所を天童に拾われたんだ」

「……そうなんですか……」

「もう気にしてねえから大丈夫だ。……で、その俺を拾ったのが……つと、タイミングいいな。あれ見てみる」

そう言つて指したのは、電気屋の店先に置いてあるテレビだ。見てみると、

「うわ、白っ!?!」

「そつちかよ!……まあ白いけどよ」

建物も真つ白だったし、映つてる2人の服装も真つ白だったんだもん。つていうか女性の方は肌まで白い気が。

「どんだけ白好きなんだ……」

「いや違うからな。神聖なイメージ持たせてるんだよ」

なるほどそういうことか。……だけど、女の人は美しいなあ……木更さんも相当だと思ふが、その上を行く美貌だ。

「痛えっ!?!」

「?」

なんか里見さんが延珠ちゃんに足を踏まれていた。

「……蓮太郎がみとれてる……!」

「ねえから!!つかさつきと足をどける!!マジで痛え!!」

延珠ちゃんはやつと足をどかした。まだむくれてるっぽいけど。

「痛つつう……んで、さっきの続きな。座ってる女性がこの東京エリアの最高権力者、聖天子様だ。んで、横にいるのがその補佐官にして、俺を拾った人物、天童菊ノ \boxtimes だ」

「えっ、天童ってことは?」

「そう、天童のトップで木更さんのじーさんだな。俺も世話になった」

なんと2人とも国家の重要人物だった。しかしそれ以上に、

「里見さんの経歴すごいですね……」

「まあな。あそこにいる間に天童式戦闘術も学べたし、それはな。……政治の勉強は

めんど臭かったが」

「元政治家の卵ですか」

「今の蓮太郎にそんなそぶりは全くないぞ」

「当たり前だ、なってたまるかあんなもん」

なればいいのに。蓮太郎さんなら似合……わないか。というより想像できない。今のほうがあつてそう。

「今度その戦闘術見せて下さいね」

「分かったよ、あんま派手じゃないけどな。つか、俺より木更さんの方がすげえよ。戦い方は違うが、天童式抜刀術皆伝だからな」

「あの人が!？」

人は見かけによらないなあ……。

「木更さんが戦ったりはしないんですか？」

「ああ、あの人腎臓を患っててな……長時間は厳しいな」

そうだったのか。まあ外見で判断は出来ないしね。

「んじゃ、そろそろいくか」

蓮太郎さんの言葉に頷く。まあ聖天子様やらと関わり合いになることはないだろうし、演説聞いてもしようがない。

また、歩き出す

「……悠梨、もうひとつ。なんで俺だけ呼び方が苗字なんだ？」

「え、最初からの流れですし、まだいいとも言われてなかったの」

「別に俺も蓮太郎でいいって」

「了解です、蓮太郎さん。……あ、やっぱり蓮さんでもいいですか？なんか長いんで」

「理由がぬるつとしてんな！別にいいけど」

「よかったー。んじや改めてお願いします、蓮さん」

「……こんなやり取りも、あつたりなかつたり。」

9. 霊安室内の講義?

l l l s i d e 悠梨 l l l

勾田大学付属病院。そこが室戸先生の拠点らしい。

僕達3人は病院についてから、無駄に急な階段を伝って地下へと降りて行った。薄暗くなつてきて怖い。

そしてとある部屋の前で蓮さんが足を止めた。部屋の名前を見る。

「……………れ、霊安室……………」

いや、これホントに霊安室なの? ドアに悪魔の顔がついてるよ? どういう趣向なのこれ? 霊安室っぽくないよ?

「せんせー、いんだろ? 入るぞ」

しかし、蓮さんが躊躇わずに扉を開けて中へ入ったので、僕もそれに続く。

次の瞬間

ビュン!!

何かが目の前を通り過ぎていった。

……人間の腕だった。

「うわあああああああああああ!!!」

病院内ということも忘れて、蓮さんと悲鳴を上げる。

続いて、

「ふひひ、いい悲鳴だったよ2人とも」

そんな言葉と共に何かが暗がりから現れた！

「うわああああ今度は髪の毛の長い幽霊!!!」

「マジで!? って先生じゃねーか! ビビらせんなよ……」

「えっ、なんでわざわざそんなところに……」

「私の意図しない所で騙される君たちが悪い」

はあ? という顔をして、室戸先生は僕達の反撃? を一発で封殺して下さいましたチクシヨ。

(ん? 2人?)

なんで2人?

考えていると、延珠ちゃんがちょうど扉をくぐったのが見えた。

「延珠ちゃんを驚かすわけにはいかないだろう? 入ってこないよう電波を送っておいた

のや」

「いやそれメールじゃねえのか」

「そうとも言うね。念力と言うよりは現実的だろう?」

「そういう問題でもないんだが」

「ちなみにその腕は精密な模型だぞ」

「……俺達は模型にビビってたのかよ……」

謎のやり取りする2人を尻目に、延珠ちゃんに話しかける。

「僕にくらい教えてくれたっていいのに……」

「董からのメールに『悠梨君も脅かしたいから絶対に言うんじゃないぞ』って書いてあつ

たからな」

「……………」

酷い差別だ。今度は嵌められないよう気をつけないと。

っていうかさつききのニヤニヤ笑いはこれを知ってたから?……いやでも、それだと蓮

さんが割って入った理由が……うーん、なんなんだろ?

「悠梨君?どうかしたかい?」

「いえ、少し考え事を」

まあ分からない物を考えても仕方ない。

そろそろ本題に入るか。

「あの、董先生。これ、ありがとうございます」

「ん？ああ、サングラスはあげるよ。どうせ私には不要なものだ」

……ありがとうございます。

「ありがとうございます」

「報酬はその情報で構わんよ」

そう言って、視線を向けてきたのは勿論神機だ。

「分かってますって。ちゃんと話しますよ」

元々そのつもりでできたのだ。話さないで帰るわけではない。

拳銃を机にしまい、室戸先生がこちらに向き直る。蓮さんと延珠ちゃんも座った……

よし、いいかな。

「んじや、すこし長くなりますけど、説明させてもらいます。これは『神機』という対アラガミ用の特殊武器です。ポイントとしては……

・オラクル細胞で作られた「、人為的に調整されたアラガミ」と言える武器。

・アラガミのオラクル細胞を『喰い破る』（切ってるように見えるが）ことで結合を断ち切る。

・それぞれの神機に組み込まれた『偏食因子』が適合する人にしか扱えない。その他

の人が使った場合、最悪死ぬ。

・神機使いには腕輪から偏食因子が投与されていて、腕輪と神機をつなげて初めて神機が使用可能になる。腕輪は一度つけると一生外すことは出来ない。

……こんなところですかね。何か質問はありますか？

「悠梨、そのいろんなパーツは何に使うんだ？」

蓮さんが聞いてくる。

「これですか？これはですね……」

ガキョン、と音がして神機が変形し白銀の『シロガネ銃火極型』が出る。

「こうなるんです」

「……変形とかありますかよ……」

「これだけじゃないですよー」

ガキョン。今度は緋色の巨大盾、『天龍大甲・極』を出す。

「盾もかよ！オールラウンダーじゃねえか……」

「まあ単独ミツシヨンとかもありますから」

接触禁忌種への単独討伐とか……大型アラガミの同時を1人でとか……泣きそうだった。

三度ガキョン。真紅の大剣『ガルドラ』を出した。

「おおおお……かつこいいのだ!! 蓮太郎!! 妾も神機ほしいぞ!!」

「無理言うな。現代の技術で作れるもんか」

うん、まあ無理だろうねえ……。

次に室戸先生が聞いてくる。

「君の体には、そのオラクル細胞が入っているんだね?」

「そうですよ。それのおかげで身体能力が劇的にアップしています」

「なるほどね……ということは、君達はほとんど延珠ちゃん達と一緒だな」

気付かれた。

「……ええ、その通りです」

当然、延珠ちゃんが反応してくる。

「悠梨、どういうことだ!」

「……体内に本来いてはならない物がある、つてことかな……」

ちよつと言ひ方悪いけど、これが正しい。延珠ちゃんも理解したようで、

「じゃ、じゃあ……妾達と同じ境遇とかは……」

……来たか。

「まあ、ないと言えば嘘になるね。『バケモノの力を取り込んだ奴ら』みたいなことは、

あと、僕達は命をかけてる分、給料とかも抜群に良い、所謂特権階級だったりするから、

それを言われることもあるよ」

「……悠梨、お前も苦労してんだな……」

「あはは……でも、上からみたいになっちゃうけど、守ったことで『ありがとう』って言うてくれる人も沢山いるから。やったことは絶対に無駄じゃない、つて思える。これは当たり前前の事だけどね」

「……………」

「僕達ゴッドイーターは、『人類最後の砦』。皆が安心して暮らせる世界を作るためのね。それまでは、何であつても負けられないよ」

最後は受け売りだけどね。でもホントにそう思つてる。

しばらくして、蓮さんが口を開く。

「延珠、今の、どうだ？」

「……すごい。妾も、いつか言えるようになるのかな……」

一瞬どういう意味か掴みかねる。だが、なんとなく言いたいことは分かった。

「延珠ちゃん、無理して理解しようとしても駄目だよ。これは、あくまで僕が戦う理由。延珠ちゃんは、自分が戦う理由を、自分で見つけなきゃいけない」

「でもっ……」

「……自分で見つけないと、強くなれないよ？」

「!?」

「戦いだってそうでしょ？最初は誰かの真似でも、段々と自分のスタイルが出来ていつて、それがある程度以上にいけば、強くなる。∴戦う理由を見つけるのも、それと同じだと、僕は思ってる」

僕のスタイルはほぼ剣での斬り込みだったけど。

「……うむ、そうか、分かった。もっと探してみる」

「うん、それがいいよ」

柄にもないことをやった気がするが、まあいいか。

「さて、次も大丈夫かい？」

「……はい、大丈夫です」

室戸先生がそう言ってきた。心構えはしておく。

『子供たち』は体内浸食率が50%を越えるとガストレア化する。……さて悠梨君、君は……」

「確率は、ありますよ」

あえて室戸先生の言葉を遮った。はつきりと言葉にされるのは、なんか……嫌だった。ジュリウスのことから、立ち直ってなんかいない。これはそうそう治らなそうだ。

「体内浸食率とかはありませんが、偏食因子を抑制する薬は毎日投与されました。投与がしばらくなくなったり、腕輪が破壊されたりした場合……神機使いは、アラガミ化します」

「……悠梨君、あえて聞こう。……君は、どうなんだい？」

室戸先生は、これも気付くか。目を逸らしてた事実なんだけどねえ。

「……正直、いつアラガミ化するかわかりません。転生特典とかでそういう危険がなくなつてないと、つて感じですね」

室戸先生は「ふむ……」と言つて考え込んでしまった。蓮さんと延珠ちゃんは何も言えないから沈黙している。

……最後は明るく言つたつもりだったけど……やばい、空気が暗い!!どうしよう!!
(……!! そうだ!!まだあれが!!)

「じゃ、じゃあここでとつておきを!!」

「いや、これ以上驚く要素ないと思うんだが……」

(蓮さん、それフラグですよー)

神機を刀身に戻し、半身で構えて態勢を低くし、引いた右手で神機をまつすぐ構える。
と、

神機の柄から、黒い『顎』が現れた。

「「(え)!!」」

「ね?驚いたでしょ?」

そのまま僕が一步前に出ると同時に、『顎』は噛みつくような動きをしてまた格納された。

「今のは『捕食形態(プレデターフォーム)』と言って、文字通り、アラガミを『喰いちぎり』ます。そうすることで、『バーストモード』になって一定時間身体能力がUPします」

「まだ能力上がるのかよ……反則級だな」

「いやでも、こつちの世界で使う訳にもいかないでしょう?ガストレア捕食したらどうなるやらで」

「まあ確かにそうか」

「使わないに越したことはなさそうだね」

「分かってますよ」

うん、やる気は起こすまい。

「だいたいこんなところですかね……」

「まだあるなら、俺はパスするぞ。頭がパンクしそうだ」

「おや、君の貧相な記憶力ではもう限界かい?」

「貧相で悪かったな!」

2人とも軽口を叩いている感じだ。少しでも空気を軽くしようとしてくれているの
だろう。

「でもいいのかね? まだ悠梨君に何かあったとして、それを聞かなくても」

「ん? 別にいいだろ。そんな聞かなくても悠梨は悠梨だしな」

「蓮さん……」

……ちよつと感動した。

「蓮太郎君がクサすぎる。明日は槍でも降るんじゃないかい?」

「そんなにかよ!!」

台無しだー!!!

—————

「それで悠梨君、君は今後どうするんだい?」

見事にシリアスをぶつ壊して下さった室戸先生が聞いてきた。

「それなんですけど……蓮さんおん」

「断る」

「まだ何も言っていないですよ!?!」

いくらなんでも早すぎる!!

「どうせガストレア討伐に加えてくれ、だろ？ わざわざ危険に足を踏み入れる必要はねえよ」

「完全に読まれてた!!」

地味に悔しい！でも引き下がる訳にはいかないんだ……!!

「いやでも、僕が蓮さん達に出来ることって言ったたらそれくらいで……」

「だから返す必要はねえ、って言ってるんだろ？」

「ほ、僕の生活費の為に……」

「バイトなりなんなりもあるぞ」

「イライラが溜まってるからガストレアぶっ飛ばしたいです」

「それが本音か。危ないからマジでやめとけアホ」

……蓮さん1人に完全論破された。どうしよう……。

「……バイトするって言っても、何をしたら……」

「探すのは勿論手伝ってやるからよ」

「……でも実際、今の僕には、戦う以外の生き方が分からないんですよ……」

「……!!」

あれ、蓮さんが動揺してる。苦し紛れの一言だったけど、これで畳み掛けるか……!!
「戦うことが、生きる証、までは言わないですけどね。これが、今までで1番向いてた生

き方だったんです。勿論それだけじゃないですけどね……」

「……………さして、どうだ？」

「つああもう分かったよ！次出たら連れてく!!それでいいか!？」

「蓮さんありがとう!!」

勝った。いえーい。

「……………甘いねえ、蓮太郎君」

室戸先生がなんか呟いたけど無視だ無視♪

あ、でも僕はバトルジャンキーじゃないからね！そこんところよろしく!!

よし、次の出現が楽しみだなあ……………

紅く燃えるーその眼差しにー♪

……………うん、すつごいデジャヴ。しかも昨日あったね。やっぱり蓮さんの携帯の音だ。電話にでる。

「……………木更さんか?どうし……………マジかよ、タイミングがいいやら悪いやら……………。……………あ
あいや、こつちの話だ。すぐ向かう」

お、これは……………

「悠梨、早速ガストレアが出やがった。行くんだろ？」

キターーーーーー!!!

「勿論です!!よし延珠ちゃん、行こう!!」

「分かったのだ!!」

「んじゃ先生行つて来ます!」

「元氣だねえ……。気をつけて行くんだよ」

室戸先生に見送られながら、延珠ちゃんと走つて行く。サングラスもちやんとつけた。た。

……後ろから蓮さんが「お前ら場所聞いてないだろおお!!」と走ってくるのもいとをかし。冗談です。

あ、現場はそんな遠くなかったです。

10. 蜘蛛と蠍

——side 蓮太郎——

悠梨の扱い方がマジで分からん。

……それはさておき、とりあえず現場に到着した。

(ま、礼儀だし、一応現場責任者には顔見せとくか……って、おいマジかよ……)

明らかに見覚えのある顔が……あ、向こうも気付いた。露骨にニヤツとしてやがる。しかもこつち来やがった！

……分かつてると思うが、多田島警部だ。

「よう、超絶不幸面の民警。昨日はタダ働きお疲れさん。ん？どうした昨日より更に不幸面になってんぞ？なんか嫌なことでもあったか？」

「どうも超絶強面の警部殿。アンタから金巻き上げそこねて社長に怒られたせいでよ。今日はしっかり払ってもらおうかな」

「もう一日くらいタダ働きたってバチは当たらねえぞ？」

「絶対にお断りだ……!!」

2人、睨み合う。

しかし、悠梨が爆弾を落とした。

「仲良いですね2人とも」

「どこがだよ!?!」

いい人には違いねえけど、ありえねえよ!!どこからそうなった!?

「喧嘩するほど仲がいい、って言うじゃないですか」

「今回はそれが適用されねえからな!!」

「息ピッタリなのに」

ぬおああああ、なんかドンドン墓穴を掘ってる気が……!!

「……警部、一時休戦しようぜ」

「……しゃーねえ。んで、そのサングラスかけたガキは？」

「俺達の手伝いみたいなものだ。民警志望と思っててくれ」

「どうも、緋上悠梨です。まだ登録してないので、イニシエーターはいません。つていうか僕、16歳ですからね？」

「16にや見えねえなあ……。ホントにその武器振り回せんのか？」

警部が神機を見やる。

……正直なところ、俺もまだ半信半疑なところがあるから、今回で悠梨の強さを見るつもりだ。

「……んで警部。目標は？」

「例のクモ型ガストレアの、あれは子だな。感染源はまた消えやがった」

「やっぱあの気色悪いクモか。早めに感染源も撃破しねえとな……」

そんなことをボヤきつつ、悠梨に話しかける。

「悠梨、今回の目標はあのクモ型ガストレアだ。突進と糸を吐く攻撃しかしてこないから、よく見て躲せば楽に勝てる。分かったな？」

「了解しました。……あと一つお願いが」

「なんだ？」

悠梨が小声になる。

「合図を出しますから、最後は蓮さんにとどめをお願いします」

「……あー、そうか」

悠梨の神機にバラニウムが含まれてないから、当然か。

「別にこれ渡してもいいんだぞ？」

そういつてXD拳銃を引き抜こうとするが、悠梨に止められた。

「いいですよ！それに武器は魂ですから、簡単にかりる訳にはいきません」

「まあ……お前がそう言うならいいか。死ぬんじゃねえぞ」

「悠梨がんばるのだ!!」

「じゃ、いつて来ます」

そういつて、悠梨はガストレアの前に立つ。神機は真紅の大剣を展開させている。

(……さて、どう攻める?)

ゴツドイーターの戦闘術、見せてもらおう。

「緋上悠梨、目標を駆逐する!!」

……なんだそりゃ?

「あいつ、色んな意味で大丈夫なのか……?」

「……………大丈夫だ、多分……………」

警部の問いに、自信を持って答えられなかった。

l l l s i d e 悠梨 l l l

「緋上悠梨、目標を駆逐する!!」

キシャアアアア!!!

ガストレアの不快な鳴き声が耳朶を打つ。敵も戦闘態勢に入ったようだ。僕の足元に向けてガストレアが糸を放つ。だが。

(遅い!!)

余裕で見切れるスピードだ。左前方にステップしてあっさり躲す。

そこへもう一発飛ばしてきたので、今度はジャンプすることで回避。

しかし、それは読まれていたのか、飛び上がったって更に追撃をしかけてくる。

(空中なら確実に捕まえられると踏んだか……)

しかし、僕は——

(ゴッドイーターだ!!)

突進してくるガストレアにむかい、ガルドラを突き刺す。

空中じゃ方向展開出来ないから簡単だ。

硬い感触に続き、肉の手応え。ガストレアの突進の勢いがほとんど殺される。

突き刺さったガストレアを思いつき蹴ってガルドラを引き抜き、その反動でバク転

しながら態勢を整え、着地。

(今度はこっちの番だ!!)

ガストレアに突っ込む。しかいには頭を貫かれたガストレアがいるが、まだ生きているうえ、再生が始まっている。

(……めんどくさい再生力だなこれ……)

だが、ガストレアが態勢を立て直す頃にはもう目の前だ。

「……沈めっ!!」

ガストレアの胴の下を駆け抜けざま、ガルドラを横薙ぎ一閃。狙ったのは……脚だ。

通り抜けた直後、背後で倒れる音。振り向くと、予想通り左脚全てと、右脚の後ろ二本を切り飛ばされたガストレアが地に伏せている。

(まだ終わりじゃないよー)

今度は真上に飛び上がる。ガルドラを上段に構えー

「はああああっっっ!!」

一気に振り下ろす!!

ズン!!と音がして真つ二つになったガストレアが地面に沈んだ。

でも、これでもまだ終わってない。

「蓮さん!!」

「了解!!」

再生させないよう、すぐに蓮さんに合図を送る。僕が飛び退いた直後、拳銃からの発砲が突き刺さってとどめとなった。

—————

「……お疲れ様です！」

「おう、お疲れさん」

「悠梨、すごいではないか!!速すぎるぞ!!」

「ありがとね延珠ちゃん」

うん、まあ……コイツ弱かった。

警部も近づいて来る。

「やるじゃねえかガキ。よっぽどどつかの高校生より強いんじゃないか？」

「俺もそう思ってたとこなんだからやめてくれ……」

「流石にそれはないですって！」

あっさり終わったからか、空気が軽いね。

でも、まだガストレアとの戦闘に慣れてないから。強いとかは絶対じゃない。

「んじゃ、民警諸君お疲れさん。後は俺ら警察で片付けるから帰ってくれていいぞ」

警部がそんなことを言ってきた。ありがたい。

「じゃあお言葉にあm」

「そうは行かねえぞ警部。今回はきっちり報奨金払ってもらうからな」

「ちっ……気付いてたか」

「……アンタのこといい人だと思ってたんだが、評価下げていいか？」

酷い!!警察に騙された!!

「蓮さんこの警察う〜!!」

「そんなんで泣きそうになるな!! ……ともかく、事後処理は俺が行くから、2人とも帰ってていいぞ」

……本当かな?

「今度は大丈夫ですよね?ね?」

「おい、悠梨が疑心暗鬼に陥ってるんだが」

「警察の管轄じゃねえから、そっちで対応しろや」

「だろうと思ったよ! ……ともかく、今度は大丈夫だからな。事務所に戻ってろ」

「……分かりました。じゃあ先に失礼します。延珠ちゃん行こー?」

「ちよつと待つのだ」

そう言つて、蓮さんに近付く。そして突然抱きつき、飛び上がってキスした。

「早く帰ってくるのだぞ蓮太郎」

「しゃがめ、つて言われなかったから油断してたっ……!!」

「二ヒヒツ、では先に戻っているぞ」

今度は僕に近付き、手を引つ張つてきた。

「行くぞ悠梨」

「うんー！」

さー帰ろう!!

—————side 蓮太郎—————

ちきしょう延珠の奴、またキスしやがって……

カシャン

(まさか)

……案の定手首には手錠が。

「……その心は？」

「変態は早期に捕まえておくべきだろう？」

「昨日より直接的になってやがる!! さっさと取ってくれ、冤罪だ!!」

「知るか。それはそうと、あのガキやけに強いな……。訓練積んでもあそこまで行くか？」

放してくれなそうだ……。仕方ない。

「ん、まあちよつとな……。色々あつたつぽい」

「そうか……。面倒見るなら見るでちゃんとやってやれよ? まあ厳しかったら勾田署まで

来りや、少しくらい預ってやるよ」

「最終手段として、一応確保させてもらうぜ。ありがとよ、警部」

「忘れたか？警察だぞ俺は？」

「ああ、そういやそうだったな……」

今度は顔を見合わせ、ニヤツと笑い合う。

やっぱいい人だこの人は。

「……ところで、いつになったら手錠取ってくれるんだよ？」

「ちっ、しゃーねえな……おい！誰か手錠の鍵持ってねえか？」

「アンタ持ってないのかよ!!」

「一応持ってるが」

「じゃあそれ使えや!!」

やっぱいい人かどうか分からん!!

——side 悠梨——

「延珠ちゃんと蓮さんって仲いいんだねえ」

延珠ちゃんと歩きながら会話する。

「妾は蓮太郎のフィアンセだからな！仲がいいのは当たり前だぞ」

「そっかー。早く結婚出来る年齢になるといいね」

「それなのだ問題は。あと6年も待てないぞ」

「いや流石に法律でしょ……？」

「そんなものは愛の前には関係ない!!」

「捕まっちゃうから守ろうね……？」

「むう……早く年月過ぎろー!!!」

延珠ちゃんがうがああああ、つてなつてて実に可愛らしい。

「……それはそうと悠梨、なんであんなに早く勝てたのだ？」

「ん？さっきのガストレア？」

「そうだ。ステージ1とは言っても、外殻は硬いうえ、まともに戦うのは初めてであろう

？」

ん……まあ硬い感触もあつた気がするけど。

「準備万端で戦うのは確かに今回が初めてだね。遭遇戦は2回やったけど」

目を覚ました時に1回、神機を回収した後に1回ずつね。

「……3回目か。だが、それでもあれだけ慣れた動きの理由が分からぬぞ」
ちやんと説明しなきゃダメか。

「あのガストレアが弱くて、僕が戦闘慣れしてる、つてのも勿論あるよ。けど、一番の理由は……」

「理由は……!?!」

「あのガストレアが『ボルグ・カムラン』の下位互換に感じたから、かな」

「ボルグ・カムラン?」

延珠ちゃんが首を傾げる。

「カムランは、サソリ型の大型アラガミだね。6本の脚は全て胴体の横についていて、更に、胴体は接地していない」

「ついでにいうと、あのクモは前にしか糸を吐けないだろうから、針で全方位を攻撃出来るカムランの、正に下位互換って訳だ。」

「……これだけで分かる?」

ちよつといじわるな質問かな。

「う、むう……つまり、さつき悠梨がやったような、潜り抜けながらの攻撃が出来た、というところか?」

……おお。

「延珠ちゃん大正解。カムランは胴体の下がガラ空きだから、そこで脚を切れる。だからそれをそのまま持つてくれば、苦戦する相手でもない、つてこと」

「一瞬でそこまで考えていたのか……!!すごいぞ悠梨!!」

「いやいや、ガストレアに対しては延珠ちゃん達の方が経験多いでしょ」

「む、そうか。ならば延珠先輩と呼んでもいいのだぞ?」

「遠慮しとくよ」

「即答された!!」

ガビーンと効果音がしそうなくらいショックを受ける延珠ちゃん。

「延珠ちゃん先輩に見えないしねえ。というかぶつちやけ妹っぽいよね」

「くそう……身長欲しいのだ……!」

「……僕も欲しいよ……」

今度は僕の心にもダメメージが。クツソ身長小さくたつて……!!

沈みながら歩いてたら気付いたら事務所前についてた。

階段を登つて4階まで登り、ドアを開けると、昨日と同じ席に木更さんが座っていた。

「……あら、お帰りなさい。どう?間に合った?」

「僕達で撃破しましたよ」

「悠梨がほとんど1人でやったから、妾達はとどめ以外にすることがなくて楽だったぞ」

それを聞いた木更さんが驚いた顔をする。

「悠梨君が戦ったの!？」

「まあだって、やれることあるならやりたいじゃないですか」

「……里見君は止めなかったの？」

「止められましたけど泣き落とししました」

「……本ツ当、里見君ってば甘いんだから……」

額に手をあてて溜め息をつく木更さん。

「で、その里見君は？」

「事後処理で現場に残ってます。今回はちゃんと報奨金貰ってきますよ。……きつと」

「……今日も貰ってこなかったらどうしようかしらねえあの子……!」

やばい木更さんが鬼の表情になりかけてる。

「き、木更さん落ち着いて!!紅茶でも入れますからどうですか!？」

「……ごめんなさい。取り乱したわ。ところで紅茶?淹れられるの？」

「ある人直伝なんで、絶対大丈夫ですよ」

勿論「僕を殴ってくれ!!」って言ってきたから、3回殴った人だ。

「妾も欲しいのだ!」

「みんなの分淹れてくるから大丈夫だよ」

やったー!!と喜ぶ延珠ちゃん。期待値が高くて怖いなあ……。

「んじや淹れてきますんで、台所かりますね」

—————

紅茶を淹れてる間に、早くも蓮さんが帰ってきたみたいだ。

「今日こそちゃんと報奨金貰ってきたんでしょうね?」

木更さん、ドスが効いてます怖い。

「きよ、今日はちゃんと貰って来たぞ!!ほらこれだ!!」

蓮さんがビビりながら袋を見せる。今日はちゃんとあるみたいだ。

……木更さんを更に刺激しなくて良かった……。

(つと、そろそろかな)

紅茶をついで、盆に乗せ持っていく。

「紅茶入りましたよ」

「……お前紅茶淹れられたのか」

「ええ、まあ。ある人直伝でして」

皆して意外そうにされると、なんだかなあ……。

「とりあえず、どうぞどうぞ」

「いただきます……あら、美味しい……」

「……うめえなこれ……」

「こんな美味しい紅茶初めて飲んだかもしれぬ……」

やった大成功!!

紅茶の美味しさも万国共通だったよエミール!!

「……悠梨、俺にも淹れ方教えてくれ。負けてられん」

「別にいいですが、最後の意味は？」

「料理人として知っておきたい、ってことだ」

「蓮太郎はシェフだからな。昨日のもやしも美味しくいただいたぞ」

「あ、じゃあ代わりに今度ご馳走になってもいいですか？」

「それくらいならいいぜ」

よっしや美味しいご飯♪

「さ、里見君私も……」

……木更さんも参加するようだ。

「ならまとめて来てくれ。つかアンタ普段飯はどうしてるんだ……？」

実は僕も気になった。

「……パンの耳とかパンの耳とかパンの耳とか……」

「……お、おう」

「……あ、飽きないんですか?」

「味付けすれば大丈夫よ!!」

……なんていうか、寂しい台所事情だった……。

—————

「んんっ……でね、悠梨君」

「なんですか?」

仕切り直しをした木更さんだが、さっきの報奨金が入った袋に手を入れ、

「これは貴方の分よ」

と言いながらお金を渡してきた……っ!?

「え!?!いや、なんですか!?!」

「だって貴方が撃破したんでしょう?なら相応の礼を持って応じるのが筋よ」

「いやでも……」

「いいから、受け取りなさい。だいたい貴方、無一文なんでしょう?」

うっ……その通りだ。その通りだけど……。

助けを求めて蓮さんを見るが、

「悠梨、紅茶おかわり」

なんでこのタイミングで!?つぐけども!!

いやまて、今のは木更さんの決定に反対はない、ってことか……？だとしたら、助けを求める意味はないか……。

延珠ちゃん……はいいか。

味方は0。

「すみません……ありがたく貰っておきます」

「それでいいのよ。はい、一部だけど」

お金を受け取る

「ホントに何とお礼を言ったらいいか……」

「大丈夫だ、って言ってるじゃない」

「あんま気にし過ぎんな。あと俺からも1つ言う事がある」

「な、なんですか？」

「身構えんなくて。さつき帰ってくる途中で俺のパトロンに連絡したんだが……」

「……未織に、何か頼んだの？」

あれ、また木更さんから鬼の気配が……。

蓮さんが呆れた表情をしながら補足をつける。

「……木更さんと司馬未織……俺のパトロンなんだが、こいつらが犬猿の仲って奴でな

……」

「あー……」

うん、仕方ないな。

「木更さん、今回は結局未織の力を借りるのは一部だから落ち着いてくれ」

「……分かったわよ」

「ふう……んで、未織にお前の名前を伏せた上で、そいつの武器とかなんとかならぬか、つて聞いたら『ちょうど広告塔を探してる企業がある』つて言われてな」

「そこから支援を受けたらどうか？つてことですか？」

「まあそういうことだ。バラニウム弾とかはそーいう所から供給してもらわねえと不味いしな」

「……そうですね……。分かりました。受けてみます」

「よし、んじや後で未織に連絡しとくわ」

「お願いします」

さてどんな会社なんだろうな……。。

「それじゃ、今日はこのまま依頼がなければ夕方には解散でいいわね？」

「まあ大丈夫だろ」

結局そのあと依頼はこないまま一日が終わった。

11. 仮想空間の戦闘

蓮太郎さんからパトロンをつける話をもらったのが土曜日で、今日は5日後の木曜日。

さて……

(どうしてこうなった)

もうそれ以外感想はない。

状況説明。

今着てるのは、いつもの赤い半袖パーカーと黒のスラックスじゃなく、蓮さんが普段着てる『あの』制服。

そして目の前にある空間には、40人程の僕と同世代の男女。男子は僕と同じ格好だ。その中には蓮さんもいる。啞然としてるけど。

蓮さんと『もう1人の知り合い』のニヤニヤした表情以外の、全ての目が好奇の視線でこちらを見ていてすごい居心地が悪い。

……もう予想がついてると思うけど、ここは勾田高校2年のとある教室。転校生として教壇の前に立っている。

「え、えつと……緋上悠梨です。気軽に悠梨、つて呼んで下さい。これからよろしくお願
いします」

「はい、じゃああの席に……」

「分かりました」

担任に指定された廊下側の一番後ろの席。蓮さんの席は窓際の列だから少し遠いな
……心細い。

着席して、改めて思う。

(ホントに、どうしてこうなった……)

4日前の出来事を思い返す。

—————

パトロンの話をした翌日、日曜日。

蓮太郎さんから「車が迎えに来るらしいから午後1時に事務所の前で待ってる」と言
われたから待ってた。

この道はあまり交通量が少ないのだろうか、全然通らない。あ、一台目が来
た。——けど普通に通り過ぎて行った。

しばらく待っている。

(暇だなあ……ん?)

通算3台目の車が来た。

(あれ、リムジンってやつかな?)

長い。なんだあれ。あんなのほんとにあつたんだ。……あるえー僕の前で止まったよ!え、まさかこれに乗れと?

戸惑つてる僕の前で窓が開く。その奥には1人の着物を着た女性が座っていた。

……美人さんだなあ……。

少し僕の顔を見ていた女性が口を開く。

「……白い髪にサングラス、赤い半袖パーカー……君が悠梨君やね?」

「あ、はい、そうです。じゃあ貴方が未織さんですか?」

「せやで。司馬未織。一応司馬重工の社長令嬢つてことになつとる」

……うわあ、すごいVIPなんだろうなあ……。

ところで、蓮さんの知り合いつて美人とか可愛い系ばつかじやない?

……え?どうでもいい? ……ごめんなさい。

「まあとりあえず乗りたい。話は移動しつつさせてもらおうわ」

「あ、あの……」

「ん?どうかしたかえ?」

階段裏から神機を持つてくる。

「これ乗つけてもいいですか……?」

「……まあ床に寝かしとき」

—————

というわけでリムジンの中。広い。落ち着かない。装甲車が懐かしい。

「んで、悠梨君。君の素姓は一通り里見ちゃんから聞いたとる。君の知らんところで聞いてしもうて申し訳ないけん、堪忍してや」

「あー、まあ大丈夫ですよ。でも漏らすのは最低限でお願いしますね?」

「勿論や。君がトライアルを受ける先の担当の子にしか話したらん」

「あ、うん、まあ、大丈夫、です」

ちよつと微妙だけど。

「因みに、うちと相手先については聞いたとるん?」

「いえ、全く」

「んじや説明せなあかん……。うちの会社こと『司馬重工』は、自分で言うのもなんやけど、世界に名だたる企業や。日本でも勿論トップ。里見ちゃんみたいなのも他にもいるで」

ふむふむ……。

「んで今回、君が受ける会社は『秋月エレクトロニクス』ゆうところや。略称は『AE』。

以前は電気工業の会社やったけど、ガストレア大戦以降、兵器開発に力を入れて、うちに続く国内シェア2位の会社やね」

エレクトロニクスは電気工業時代の名残か。それにしても、

「詳しいんですね？」

「その社長令嬢と高校、学年も同じやからなあ。立場が似とることもあるから、結構仲いいんやよ」

なるほど、それか。

「因みに里見ちゃんも同じ学年やで。それと、うちが生徒会長やつとるんや」

「未織さん万能人間ですか」

「いやんそんな褒めんといて〜」

頬に手を当てて体をブンブン振る未織さん。そこまで褒めてはいない気が……。

それにしても蓮さんの学校か……ちよつと興味あるな。

「ま、冗談はさておき……今ウチらが向こうとるのは、司馬重工の本社ビルや。そこで、君の戦闘データをとる。で、それを元にAEで審査が行われて、合格したら晴れてパトロン獲得、という風な流れになるから覚えときい」

「了解です。……でもビルの中にそんなデータとれるところなんてあるんですか？」

「それは見てからのお・た・の・し・み♪にしとき。……ほら、見えたで」

未織さんが扇子を向けた窓の外、巨大なビルが見えた。

「でっかい……」

「戦争で儲かつとるから、微妙やけどね」

そう言つて苦笑する。

入り口の警備員は完全顔パスだった。流石だ。

「こつちやで」

車を降りてビルに向かう未織さん。神機をもつてついていく。

なんか神機兵のデザインみたいな鎧をつけた人がたくさんいる……警備員かな？

途中で社員っぽいスーツの人が、未織さんに「人が来てる」みたいな事を告げて、すぐにフェードアウトした。

エレベーターで地下へ降りると、通路があり、そこに1人の女性が寄りかかってスマホを触っていた。あの人が未織さんの来客かな？

「アンタにしては、早いんちやう？」

やっぱり来客みたいだ。

「ボクが早く来ちゃ悪いって？うちの広告塔にふさわしい奴がいる、っていうから期待してんだよ」

「普段出かけない癖によう言うわ……」

口調が男の子っぽい上にボクっ娘か……。つと、視線が僕の方を向いた。なんかジロジロ見られてる……。

つていうかまたしても綺麗、というかかつこいい人だ。

茶髪のショートで、ウルフヘアとでも言えればいいかな？ そんな感じに髪をセットしている。目は大きく、意思の強い感じ。全体的に活発な印象を持つ。でも身長は僕より一回り小さい。160cmあるかないかくらいだ。

そんな人を見つめてくるから、無駄にドギマギしてしまう。

「ふーん……君が悠梨君かあ……。……へーえ……。……あいたつ」

「こら奏、そんなジロジロ見たら失礼やで。あとさっさと自己紹介せえ」

未織さんが扇子で奏さんの頭を叩いて止めてくれた。た、助かった……。

「はいはい……。あ、君のことは聞いてるから自己紹介しなくていいよ」

あ、それは助かる、かな？ まあいいや。

「ボクは秋月 奏（あきづき かなで）。奏って呼んで。んで、秋月エレクトロニクスの

……お助け要因みたいなもんかな？」

「社長令嬢やろ」

「あ、この人があの……」

「ん〜それ言われんのあんま好きじゃないんだよ……。ボクに似合ってるないし」

「立場フルに活用していろいろしとるんやないの？」

「兵器の設計とかなら未織もやってんじゃん。それを言われてもなー」

「え、2人ともそんなの出来るんですか!？」

「そんなの学生がやれることなの……？」

「それなりに採用されるで。あとウチが独自に作ったもんやと、延珠ちゃんのバラニウムしこんだ靴とかもそうや」

「……全然気付かなかった……」

「なんだろう、ホントにこの人達のハイスペックぶりは。」

「いろいろ驚愕してる僕を他所に、「ほないくで」と未織さんが言い、2人がまた歩き出したので、慌ててついていく。」

「少し進んだところのドアの前で未織さんが止まり、ロックを解除する。続けて入る。モニター室かなにかのようで、色んな計器があった。」

「これに名前を登録してや。終わったらこっちに来てな」

「登録を済ませ、未織さんが立っているドアに向かう。」

「ロックを解除してもらい、入った部屋は……」

「……なに、この部屋……」

とにかく真っ白。どこを見ても真っ白。距離感が全く掴めない。「やっぱこの部屋、落ち着かないなあ……」

奏さんがそう漏らす。以前に使ったことがあるみたいだ。

目の前に青いワンピースをきた女の子と、時計をつけた白うさぎが現れて、追いかけてっここをしている。

(あ、不思議の国のアリスがモチーフかな?……データ、だよな?)

そう思えるほどの再現度だ。

少し待っているとアリス達がふっと消え、上空から機械音声而降ってくる。どうやらアリスはロード待機中のアレっぽい。

『初めまして、緋上悠梨。よろしくお願ひしますね』

「よ、よろしくお願ひします」

思わず返事してしまう。あ、奏さんが笑ってる。そんなにウケたのかな?

「あっはは!!悠梨君つてば機械音声なのに!!面白〜い」
うわなんか恥ずい。

「まあ初めて使う人だとたまにおるから気にせんでええで」

「あ、はい……」

よし、気にしない気にしない……。

「とりあえずこのパットを全身に装着頼むわ」

そう言って渡される幾つものパット。それを言われるがまま装着していると、
「んじや、ウチらはさっきのモニター室に移るから、合図があったら戦闘開始してな。
奏」

「はいはい今行きますよ、つと。んじや悠梨君頑張れっ!!」

「いや、戦うって……」

ボタン。

無情にもドアが閉まる。

(いや、何と戦えってんだ……)

考え込む僕。……パットをつけ終えたが、合図も特に来ない。

その時。

『ステージ【廃墟の街】起動しますー』

機械音声に続き……部屋が、作り変えられた。

「な……!?!」

ボロくなったビルや、家が出来てくる。亀裂の入った道も敷かれた。

気付けば、廃墟に取り残されたかのような状況に、僕は置かれていた。太陽が照りつけて暑い。

「一体どうなってるの!？」

続いて、僕の頭上から、未織さんの声が降ってくる。

『んっふふー、驚いたやろ? これこそ司馬重工最新テクノロジーを駆使して作り上げた【モーシヨンリアリティ・プリズム・バトルシミュレータ ver9.00】や!! 直径1kmの仮想訓練室。視覚は勿論、触覚、聴覚、痛覚まで完全再現しとるんやで。仕組みは当然企業秘密や♪』

それを聞いて、ビルの壁を触ってみる。確かに、コンクリートの感触が伝わってくる。
(なんて技術力だ……)

司馬重工……恐ろしい子!!

『今回はその街に5人の敵兵が潜んどる。そいつらを君の神機で全員殺したら終了や』

「え、いや殺すつて……」

『安心せえ。敵兵も全部バーチャルや。今の痛覚レベルで実際に人が死ぬことはないで』

(……痛覚レベルが上がると、人死に出ることがあるのか……)

戦慄する。というかそもそも、

「僕、対人戦をしたことないんですけど!？」

『あら、そうなん? でも、初見の敵に対応するのも戦士として必要やろ? ま、頑張りい』

鬼だっ!!

『んじゃ、そろそろ始め……あ、ちよつ、奏、何するん……』

……あれ、未織さんの声が途絶えた。しかし、すぐに奏さんの声が降ってくる。

『あー、あー、悠梨君、聞こえてる?』

「聞こえてますよ」

『よし。それじゃ悠梨君。——ボクが君を推薦するに足る、と思えるだけの力を見せ
てくれよ?』

「言われなくてもそのつもりですよ!」

『よし、じゃあ楽しみしてるぞ、少年♪』

そう言つて、奏さんはよけたらしい。いや少年で……。

再び未織さんの声が降ってくる。

『あーもう、奏つたら乱暴なんやから……。んじゃ、邪魔が入つてしまつたが、今度こそ
行くで』

『Mission start!!』

始まったみたいだ。

——

とりあえず、側のビル壁の残骸に身を隠し、戦略を練る。

(1 km 四方に敵は5人……敵がペアで動いてない限り、1対多になることないね………ツ!!)

ザリツ……ザリツ……。

地面をする音。敵が近づいているようだ。

壁から顔を出す。

(いた……)

50 m程先に、刀を構えた兵士。銃持ってないが、隠しているかもしれない。

(銃で撃ってしまおう)

神機を変形させ、シロガネを出す。バレットは連射弾を選択。

敵をしつかりエイムし、

(……ごめんね、でも負けられないから)

引き金を引く。

決して音が小さい訳ではないので、発射した音で気付かれたようだ。が、振り向いた瞬間に腹に着弾。空洞を作り、死へ誘う。

(よし、残り4人!!)

とりあえず移動しないと。今の音で気付いた人もいるだろうし。

走って移動する。しかし、

パ。パ。パ。パツ!!

走っている側面に銃撃。即座に大甲を展開。防ぎきる。

マシンガンタイプなので一発が軽く、ノックバックは発生しなかった。

(どこだった……!?)

再び銃声。今度は左にステップすることで回避。今の攻撃で敵の位置が判明。すぐさま突進する。

まだ本気じゃないが、それでも僕の動きが早いとため、敵が焦って銃撃してくるが、狙いが甘い。右に左にステップし、簡単に回避。

マシンガンだけあって手数が多い……!!でも、

カシャン!

(……きた、弾切れ!!)

この瞬間を待っていたんだ!! 敵までそんなに距離はない。一気に仕掛けようとする。

だが、敵が懐に手を伸ばして何かを取り出す。

(……手榴弾か……!!)

不味い!!

敵がピンを抜く。しかしそれを投げることは叶わなかった。

ピンを抜くと同時に敵に到達。ガルドラを展開し横薙ぎに振るい、敵を上下に両断。その勢いを利用し一回転して、敵の手から手榴弾を遠くに蹴飛ばす。ここまで一秒。

すぐさま大甲を展開して、右手で支えつつその影に隠れ、目をつむり、左手は耳をふさぐ。ここまで更に一秒。

バガアアアアン!!!

展開した直後、手榴弾が爆発。近くの建物が崩れたか、破片が正面から飛んでくるが、大甲を展開したので無傷だ。

破片がぶつかる音が止むのを待つて、大甲を格納。

(光を遮断するためだったけど、予想外の役立ち形だったな……………ん?)

右耳が、全く聞こえない。

(くっそ、抑える方法がなかったとはいえ、戦闘に支障がでるな……………)

とにかく、ここからも早く移動しないと。

……欲を言えば、先程の兵士から残りの手榴弾を頂きたかったが、爆風で吹っ飛んだようでどこにも見当たらなかった。仕方なく場を離脱する。

またしばらく走ると、今度は広場のような場所に出た。

(まずいなあ……………狙撃兵がいたら絶好のポイントだ)

早く抜けるに限る。

だが、ここでも銃撃。慌ててバックステップ。左側面からだったのでなんとか音に反応できた。

射撃された方を見ると、今度は敵が身を晒してきた。

(余裕の現れかな……?)

アサルトライフル? つばいものと、腰にナイフを持っている。取り回しが良さそうだから、ガルドラで戦闘するには分が悪いと判断。近接戦は除外する。

再びシロガネを展開し、射撃戦を開始。

「乱れ撃つぜえ!!!」

敵もライフルを構え、撃ってくる。お互い、回避しながら撃ち合う。

当たらない。お互いに、当たらない。

……ふと、その動きに違和感覚える。

(……まるで僕をこの広場から出さないようにしているかのような……何が目的だ?)

殺す気がないようにも見える……。

刹那、背後から殺気。

急いで右に飛び退くが僅かに間に合わず、左の二の腕を銃撃がかかる。

(後方にもう1人……!?)

確認するのは不可能だ。気を抜くと打たれる。

今の銃撃で、少し肉を持ってかれたようで二の腕が痛む。

(最初に1対多にはならないよねー、とか思ってたバカはこのどいつだー!?)
もちろん僕です。

しかし、これはまずい。右耳がやられてる状態だと音が聞こえにくい。

(さっさと目の前の敵を倒して狙撃兵をなんとかしないと!!)

だが、簡単にそうさせてくれるはずもなく、むしろさつきから、攻撃より回避してるほうが多いくらいだ。後方からの射撃も殺気を感じてなんとかよけているが、ジリ貧になるのは目に見えている。

「ああもうめんどくさい!!」

なので、逃げ回る敵の背後をとるために疾駆。敵は背後を取られないようにしようとするが、ゴッドイーターの脚力に普通の人間が勝てるはずもなく、呆気なく抜き去り、あえて、敵の目前に立つ

(これで、簡単に狙撃は出来ないだろ!!)

それを理解しているのか、敵が下がろうとする。

「させるかっ!!」

下がろうとする向かって神機を投げる。ゴッドイーターの膂力を持って投げられた

神機は、かなりのスピードでもって、相手に突き刺さる。反応する間も与えられず、敵は絶命。

だけどもまだ危険な状況だ。それを分かっているから、僕は投げた神機に追従する。敵が刺さった神機をそのまま持ち上げる。直後、兵士の死体に着弾。

(……距離をとった瞬間に撃つてくると思ったけど、やつぱり!! あと仮想敵だけど死体を冒流してごめんなさい!!)

一応謝つとく。

神機を一振るいして死体と血を落としたあと、射撃があつた方角へ向かつて全力で走る。普通のスピードで走つてたらただの的だ。

(どこだ、どこにいる……?!?)

どこから撃たれたのか分からない以上、止まるわけにもいかない。

それに敵も移動してるはずだ。同じ場所に留まる愚はしないはずだ。早く見つけないと逃げられてしまう。

その時、前方100m程に見える崩れかけのビルから、1人の男が出てくるのが見えた。肩には……狙撃銃。

「お前かあつ!!!」

声が聞こえたのか、狙撃兵が慌てて銃をセット。腹這いになり撃つてくる。

……だけど、そんな射角制限ある銃じゃ勝てないよ!!
射撃をジャンプすることで回避。

これで敵は最悪でも膝立ちにならないと僕を打てない。

(それだけあれば十分!!)

クモ型ガストレアにやったように、上段からガルドラを振り下ろし、銃身を破壊。返す刀で狙撃兵の首を切り落とした。

(……ラスト1人!!)

—————

さて、その最後の1人が見つからない。

(どこだろ……んん?)

ガサ……ガサ……

動く音だ音に気付き隠れる。

(いやでも、あれ何の音?)

ガサ……ガサ……

まずい、こつちきてる。

顔を少しだけだして確認すると、

(……さつき会社の周りを警護してた人の格好だあれ)

例の神機兵みたいな鎧をつけた人がいた。

(まだ距離はある……射撃でカタをつけよう)

シロガネに変形させ、連射弾をセット。敵の前に躍り出て撃つ

「終わりだよ……ッ!？」

弾かれた。剥き出しの顔を狙ったが、腕をクロスさせることで防がれた。

「嘘ん!？」

あ、やばい走ってくる。逃げないと!!ひとまず逃走にうつる。

(えーとえーとどうしようどうしよう……!!)

逃げてる間に、無我夢中でバレットを変える。無幻弾のどれかだけど、どれをいれたか分からない。

「えーいままよ!!」

止まって撃つ。敵はよけもせず着弾。弾かれそう……、というか弾かれたが、

「あれ?」

なんか敵が動かない。

というか必死に動かそうとしてるが、全く動かないようだ。

(チャンス!!)

間合いをつめ、動けない敵の、これまた首を切り落とす。

(これで……5人か……)

『Mission Complete!!』

機械音声が流れてきて、廃墟が消える。やった終わりだ……。

最後の敵が動かなくなった理由はなんだろう……? とりあえずバレットを確認してみると、

「……………あー……」

すごい納得した。

『お疲れ様、悠梨君。とりあえずモニター室に来てな』

「分かりました」

—————

モニター室に入って時計を見ると、さつきから15分程度しか経っていないかった。1時間近く戦ってた気もするけど……。

「いやー悠梨君すごいわー。というかえげつないわ」

「そうだねー。でも、これなら戦闘力としては十分いける筈」

やった、これはなんとかなるかもしれない。

「……………ところで、最後の敵のことなんやけど」

「あー、っていうか、あれそもそもなんですか?」

すごい潰したくなるんだけどあの鎧みたいなの。

「あれはうちの会社で開発された外骨格（エクサ・スケルトン）っていう装備なんやけど……あんな不調は今まで起こったことがないんよ。なんかしたん？」

「多分これですね」

神機を指す。

「神機がどうかしたん？」

「神機、というよりはバレットですね」

僕が無我夢中で装填したのは『無幻弾・雷』だった。だから電気で麻痺ったか外骨格自体が壊れたかのどっちかだと思うんだよね。

そのことを告げると未織さんは考え込んだ。

「……まあ、確かに耐熱、耐冷にはしたけど、電気は予想外やったなあ……」

「司馬重工としてこのままにしとく気はないっしょ？」

「勿論、設計を変えてみるわ」

「さっすがー」

奏さんがすごい茶化してるんだけど大丈夫なんだろうか……。

「あの、とりあえずこれでデータ取りは終わりですか？」

「……残念、まだ終わってないよ」

「え」

あ、なんか奏さんが黒い笑みを……。

「え、つて悠梨君さ、その神機のことを知られていいの？」

「……あー」

確かにまずい、というか僕が知られたくない。

「んじゃ、もう一回頼むよ少年♪」

「武器はそこにある倉庫のやつ自由に使ってええから」

……この2人息ピツタリだな……。

兎にも角にも、僕のデータ取りはまだ終わってないらしい。

12. 学校?なにそれ美味しいの?

l-l-l side 奏 l-l-l

「……んで、奏。あの子どうなん?」

……悠梨君が審査を通るかどうか? ってことかな。

「まあ……これなら十分通るでしょ。はつきり言つて、ゴッドイーターの力は想像以上だね」

そう言つてるそばから、悠梨君が敵をなぎ払う様子がモニターに映し出されている。未織から聞いた話では、今回のステージは『リヴァイヴ・コースター』といつて、遮蔽物が何も無い戦場でエネミー10人が常に動き回りながら攻撃してくる、少し難易度が高めのステージということだ。

悠梨君は、『スチエツキン・APS』というハンドガンと小太刀1本を持ち、短剣を4本、腰に吊っていた。

神機を持たないことで身が軽くなったのか、動きのキレが増している。回避の合間に、近付いてきた敵には小太刀で、遠くの敵にはスチエツキンで一体ずつ確実に仕留め

ていた。

(これでも提出するデータの為に力を抑えてる、って言うんだから恐ろしいよ……) 動きが全く鈍る様子もない。演舞みたいな動きだ。

回避回避射撃回避斬りつけ回避射撃投剣回避回避トマトトマト……。

「ちよい待ち!!今あの子何処からトマト出したん!?!」

「食べ物を防御に使うとかどういう発想……!?!」

啞然とするしかない。

今の間に2人は倒していたと思うが、そんなことがどうでもよくなる出来事だった。

(これこのまま提出して大丈夫かな……?)

……ま、まあ、うちの重役達を信じよう。それとボクのプレゼン次第だ。

そうこうしている内に、悠梨君が最後の敵に肉薄、一刀両断し、『Mission C

omplete!!』の機械音声が流れてきた。

……トマトを除けば動きは十分だからきつと受かるだろう。

「そうや……。奏、ちよつと耳かしい」

「ん?何や?」

なんか未織に呼ばれた。

「……………なるほど、それはいいね」

「やろ? やつてみい。その後はウチが何とかしたるから」

「了解!!」

超即興同盟成立♪内容は秘密だよ。

—————

とりあえず悠梨君がモニター室に戻ってきた。

「どうもお疲れ様でした。……言い忘れましたけど、神機触ってないですよね?」

「里見ちゃんにかなり念押しされたから触つとらんよ。持てないんじやしゃーないわ。——それと」

ペシン

「痛い!?!」

「食べ物粗末にしたらあかんやろ?」

未織が扇子で悠梨君の頭を叩いた。まあ言った内容には同意するけど……あれ鉄扇だから絶対痛いだろうね。

……え? ボクも最初に扇子で叩かれてたって?……あれはもう慣れたんだよ……。

……慣れって、怖いね。

「んで……でもそもあのトマトどうやって持ち込んだん?」

あ、それはボクも気になってた事だ。

「え？あれ試合が始まったと同時にポケットが重くなつて、それをまさぐつたらトマトが入つてたんですけど……VRマシンの機能じゃないんですか？」

「……そんな機能は搭載してへんで……」

やばい、笑いがこみ上げてきた。

「ど、どーすんの未織これっ……トマト出てくるんじやしようがないよ……プフツ」

「盛大に笑えばええやないか」

許可が出たので、大爆笑してやった。未織はボクを見てため息をつく。

「……もうええ。近いうちにアップデートすることにしたわ」

「すいません僕のせい……」

「少し前倒しになっただけや。気にすることあらへん」

「そだよー悠梨君が気にすることないよ……いひひっ」

「そろそろ笑うのやめへん!？」

仕方ないそろそろやめようか。

「ごめんつてば未織。ーーとりあえず、悠梨君お疲れ様。後はこつちでなんとかする

よ」

「あ、はいお願いします!」

「任された!」

うーん、頑張らないとね。

「とりあえず、今日やることはこれで終わりや。……送るなら車を出させるで?」
未織が発した内容に悠梨君が考え込むそぶりを見せる。

「うーんどうしよう……」

……あ、いいこと思いついた♪

「ねえ未織。悠梨君はボクの車に乗つけてくよ。それが1番効率いいしょ?」

「まあ、確かにそうやけど……どないする?」

「あ、僕は……」

期待の視線を悠梨君に送ってあげる。

「……奏さんの車に載せてもらおうと思います」

「よしきた頼まれた!!」

「……変なことするんじゃないで?」

未織に疑いの目を向けられる。失礼な、ボクをなんだと思ってるんだよう。

「分かってる分かっている。んじや未織、あれ頼んだっ」

「あれっ」

ガシッ

悠梨君が何かを言う前に左手を掴んで引っ張って行く。

「あ、み、未織さん、ありがとうございますございましたああああ……」
あら偉いねえ、未織にまで挨拶しちやつて。

「気を付けてな」という未織の声が最後に聞こえてきた。

——side 悠梨——

未織さんの鉄扇がめっちゃ痛かった。あれを「あいたつ」で済ませる奏さん、何者な
んだらうか？

……というわけで今度は奏さんの車の中。リムジンじゃなかったけど、それでも高級
車っぽかった。

……装甲車が懐かしい（2回目）。

「あ、あの奏さん……」

「ん？どした？」

「ホントにありがとうございます、僕のパトロンになるのに手を上げてくれて」

「まだ決まっていんだからそんなのいいよ。……でも、そうだねえ……」

……あれ、突然ニヤツとしたぞ？

「うん、これだ。パトロンの命令には服従するんだよ？」

「明らかに今思いついた感が!!」

「実際に今思いついたんだけどねー」

「やっぱり!! っていうかどうしてそうなるんですか!？」

命令って言葉が怖い。特務とか特務とか特務とか……ガタガタ。

「えー普通じゃない? 武器なきや戦えないでしょ? それともパトロンいらなの?」

……

「……か、完全命令遵守は勘弁して下さいっ!!」

パトロンは必要。だからある程度で抑えてもらおうように頼むしかない。

「あはは、冗談冗談!!……って、何をそんなに震えてるの?」

「ちよつとトラウマっぽいものが……」

「……ごめん。でもとりあえず、敬語とさん付けやめてよ。ボクも悠梨、って呼ぶから

や」

「それこそパトロンには敬語とかつけるべきじゃ……」

「今度から同級生になるのに、敬語のうえに『さん』付けじゃ違和感ありまくりでしょ?」

……うん? 今すごいありえない事聞いた気がするんだけど……。

「あの、奏さん」

「敬語、『さん』付け禁止」

うう……。

「えつと、奏、今なんていったの……？」

「悠梨は今度から同級生になる、つて言った」

……聞き間違いじゃなかった。

「……どうしてそんなことに？」

「さつき未織にいい交換条件として聞いた」

曰く、学校に通うことを支援の条件とするとか……。

「……僕学校行ったことないんだけど……」

「向こうの世界でどうしてたの？」

「学校とかそういうのはなくて、物心ついた頃から、極東支部の資材搬入とかを手伝って稼いでた」

そのおかげで、リンドウさんとかサクヤさん、リツカさんとかの極東支部に長くいた人とは、元々顔見知りだったりしたんだよね。特にリツカさんとは、搬入の合間にしょっちゅう話してた。

「そっかー……いろいろ大変だねそつちの世界も……。でも、いざつて時にはボクが教えてあげるからさ。何事も経験だよ。どう？」

……退路が絶たれた。

「……分かった、いくよ」

「よしよし。……あ、未織? 悠梨の編入手続きよろしく。勿論ボクと同じクラスでね。……うん? OK、言っとくよ」

……途中から未織さんに電話してた。すでに出来てた話っぽい。

奏が、というかA Eがパトロンになろうがならまいが、学校にいく羽目になるなこれは……。

電話を切った奏が僕に話しかける。

「今未織から追加で注文が来て、里見君には編入すること喋っちゃダメだつてさ」

「え、なんで……」

「そのほうが楽しい、つてさ」

……蓮さんって相当ないじられキャラだなあ……。

「ていうか、蓮さんと知り合いなの?」

「……蓮さんって里見君のこと? クラスメイトだよ。……そうだ! 追加命令。このこと、里見君に聞かないようにね」

「奏がクラスメイトだ、つてこと? ……その方が楽しいから?」

「勿論♪面白い反応見せてくれるといいな」

蓮さんいじられキャラすぎるでしょ。それに、

(……僕に隠し通せるかな……?)

兎にも角にも、楽しみだけど、やっぱ少し怖いなあ。学校……どんなところだろう? 「あ、そうだ悠梨。合否判定をすぐ伝えたいから、携帯の番号教えてよ」

そう言つて奏がスマホを取り出す。が、

「……僕携帯持つてないんだけど……」

「……えっ」

いやね、向こうの世界で登録したのなんて持つてないし、こつち来てからも登録する時間は勿論、時間もなかったしね。

「そっか、じゃあそれもだね。うーん……課題が山積みだなあ。因みに家は?」

「会社のソファ寝泊まりしてるけど」

蓮さんに家に来てもいいと言われたけど、そこまでしてもらうわけにはいかないのだから必死で断つた。

「……それもなんとかしないとね」

改めて自分の置かれた状況が如何にめんどくさいか実感した。奏にも苦笑いされてるし。

……つと、話してたら事務所の前についたみたいだ。車を降りる。

「ありがとね、送ってもらっちゃつて。」

「別にいいよー。んじゃ後日、また合否判定で連絡させてもらうよ。じゃーねー……」
ドアが閉まる。

「あ、ちよ……」

……行っちゃった。

「連絡するってどこにする気なんだろう……」

会社にくると思うところ、そうしよう。

—————

翌日。月曜日。

天童民間警備会社宛に荷物が届いた。送り主の覧をみると

「秋月エレクトロニクス……」

十中八九、奏だ。

箱を開けてみると、一台のスマホが入っていた。

学校から帰ってきてきてそれをみた蓮さんが、最新型だと言って羨ましがってた。ホントにもらっちゃっていいのこれ？

とりあえず蓮さん、木更さん、延珠ちゃんの連絡先ゲット。

蓮さんは、AEは知ってたけど、奏の話題は出てこなかった。

—————

さらにその2日後、水曜日。

夕方。知らないメアドからメールが届いていた。

……恐る恐る開けてみると――

奏からだった。無事に審査を通つたらしい。蓮さん、木更さん、延珠ちゃん、それぞれ皆が祝つてくれて嬉しかった。

後なぜか、明日の早朝に車を回すから会社まで来い、と書いてあつた。なんだろう……？

というか何故僕のメアドを知っている……？

そして今日も蓮さんは奏について何も言及しなかつた。

――

また翌日。木曜日。

蓮さん達には昨日、朝からいないと告げてあるので、僕がいなくても気にしないはずだ。

(さて、何の用だろう……)

朝6時。事務所の目の前に4日前に乗つた車が止まつて、それに乗り込んでAE本社へ向かつた。地味AE本社は初見。司馬重工ほどでないにしろ、でかい。

着くと、そこにいた奏から制服が渡された。

(蓮さんがいつも着てるやつだ……)

これに袖を通すのかと思うと、なんか不思議な気分だ。

更衣室を借りて、腕輪に引つ掛けながらもなんとか制服を着る。

更衣室を出ると、奏が目の前壁に寄りかかっていた。

「おー似合ってる似合ってる。髪の毛の白さと制服の黒さが対照的でいいね」

「あ、ありがと……」

少し、照れ臭い。

「あ、あとサングラスも外して」

「え」

「サングラスで学校行く気?」

どうやらそれはTPOに反するみたいだ。

「でも目はどうすれば……」

「とりあえず、これ」

僕に向かって何かの箱が投げられた。キャッチしてパッケージを見る。

「……カラーコンタクト(黒)……?」

「むしろそれ以外対策出来ないから、それつけといて。度は入ってないやつだから」

……他にないなら仕方ない。

初めてコンタクトをつけたので、少し手間取った。これで全部かな。

「うん、だいたい隠せたね。……よし、じゃ行こっか」

そしてA E本社からまた2人で車に乗って、勾田高校へと向かった。

え？道中？奏の連絡先登録しただけで、別段なんかあったわけじゃない。どっちにしろすぐついた。

車を降りるが、周囲に他の生徒はいない。まあまだ早朝……というか7時過ぎだからかな？

僕は職員室に行かなくや行けないらしく、(勿論場所が分からないから)奏に連れてってもらった。職員室前で別れてそこから1人で動いてたから、奏がどうしたかは分からない。

そして教師に連れられて教室に入って、啞然とする蓮さんと、このクラスにいた『もう1人の知り合い』こと、秋月奏を見たのだった。

回想終了。

—————

というわけで前回の冒頭シーン。

担任の話が終わったところで、蓮さんが席を立ててこつちに来た。まあ当然だよな。

「……ちよつとこい悠梨」

教室がざわめいた。何でだろう？

立つて歩こうとしたところで、蓮さんに首根っこを掴まれ、廊下に連れ出される。

「あ、蓮さん、逃げません、逃げませんから首離してっ……」

地味に痛い!!

というわけで廊下に連れ出された。

……たくさんの人がドアのところから僕達を覗いていてすごい怖い。ガン見やめてー。

その視線を気にした風もなく、蓮さんが単刀直入に聞いてくる。

「なんでここにいるんだよお前……」

予想通りの質問がくる。

「えつとそれは」

「……パトロンとの契約で、学校へ登校することになったんだよ」

理由を話そうとした僕の背後から声がした。

「……お前は……」

……あれ？

「……あ、秋月だったか……？」

僕の後ろにいたのは、何を隠そう秋月奏その人だった。いや隠してないけど。奏は一回嘆息した。

「……2年になつて1ヶ月立つのにクラスメイトの顔をちゃんと把握してないとか驚いたよ……」

「悪かったな覚えてなくて」

(演技じゃなかったんだ……)

本気で覚えてなかった様子の子の蓮さん。

蓮さんもしかしてクラスだとぼっち……？と口にしかけたが、何と堪えた。

「……そうだ、思い出した。秋月奏、A Eの社長令嬢だったな。……つつーことはお前が悠梨のパートロンか」

「正解♪」

「……なら、学校に来させるのも未織の入れ知恵だろそれ」

「どうしてそう思う？」

「未織が時々お前の話をしてたからな、俺に対してやつてることを話してもおかしくはない。……もつとも、お前が同じクラスなのは知らなかったけどな」

「そこまで読めるとか、里見君つて案外頭の回転早いね」

……どうもお互いに相手のことはよく知らないみたい。

やっぱさっきの聞いちゃおう。

「ねえ奏。蓮さんっていつも教室でどうしてるの?」

「あ、待てそれ聞く……」

「基本、ぼっちかな」

「やめろ馬鹿!!」

蓮さんが制止する前に奏が言い切る。やっぱりそうだった……。

「なにやっつてんですか……」

「いいんだよ別に……!」

蓮さんが目を逸らす。せめてこっちを見て言っただけ欲しい。

「皆蓮さんの優しいところ知らないだけなんだ……そうだ! 僕が皆の誤解を解いてきますよっ」

「本気でやめろ馬鹿!!」

あれ、なんか止められた。蓮さんに肩を掴まれる。

「いいか!?!絶対に余計なことをするんじゃないぞ!!分かったな!?!」

「え、なんで駄目」

「分・か・つ・た・な!?!」

「……分かりました」

仕方ない。表向きはやめておこう。

(……裏でバレないようにやるならいいよね！)

よし、奏にも協力してもらおうとしよう。

しかし、それを伝える前に奏が口を開く。

「さて、里見君はもういいかな？ じゃあこれから転校生への恒例、質も……」

キーンコーンカーンコーン

「……と思ったけど授業だね……」

なるほど、この鐘の音は授業開始の合図か。覗いてたクラスの人達も席に戻ったのか、教室のドアのところから姿が消えている。

「俺はサボってもいいんだが」

「蓮さん、受けないは無しですよ。僕が辛いんで」

「……めんどくせえ」

蓮さんがため息をついて教室に消えた。

僕と奏も続いて入る。……なんか皆すごいそわそわしてた。何なんだろう？

「ねえ奏、なんで皆そわそわしてるの？」

「恒例タイムがなかったからだよ」

「そもそもその恒例タイム、ってやつが何か分からないんだけど？」

奏の目が光って、ニヤツと笑う。

「そっかー。じゃあ次の休み時間まで楽しみにしときなよ」

「え、ちよ……」

あ、席に行つちやつた……。

仕方なく自分の席についておとなしく授業を受ける。

………数学とかいう科目。ちんぷんかんぷんだった。早速奏を頼ることになりそうだ。

—————

キーンコーンカーンコーン……

「「ありがとうございます」」

「あ、ありがとうございます……?」

なんとか皆に合わせて一時間目終了の挨拶をした直後。

「転校生への恒例、質問タイム!!」

「うわあっ!!?」

奏の声が響いたと思ったら、僕の机に皆が一気に雪崩れ込んできた!!

何なの一体!?

そして、集まったクラスメイトから矢継ぎ早に浴びせられる質問。

(恒例タイムってこれのことなの?)

それにしても人が多い!

(こ、これを捌ききれと……?)

無理ゲーだ。人垣の隙間から、助けを求めようと周りを見る。

——蓮さんは我関せずと言った様子で机に突っ伏している。

——奏はニヤニヤとこつちを遠巻きに見ている。

(……どつちも助けてくれなそうだ……)

仕方ない、頑張ろう…… (諦め)。

—— (クラスメイトの質問と悠梨の受け答えは割愛) ——

放課後。

奏が「悠梨を借りてくよっ」と蓮さんに告げて僕を連れ出した。今度は歩きだ。

「いやー、それにしてもすごい人の数だったね」

「……もう疲れたよ……」

昼休みになると、なんか他クラスからも人が来てたみたいで、廊下が人で埋まつた。

さつきも奏がいなかったら教室を抜け出せなかったかもしれない。

「なんで僕なんかを見にくるんだ……?」

「まあ転校生ってのはそんなもんだよ。それに悠梨って、結構顔整ってるしね。女子の

間では『可愛い系の男子転校生が来た!!』って持ちきりだったよ」

うそーん。

「……そんな馬鹿な」

「本当だよ? 実際、ボクに『知り合いなら紹介してよ!』って言って来た子が、クラス内外問わず何人かいるしね」

「……マジで?」

「マジだよ。さて、そこんとこ悠梨としてはどうなの?」

ああ、また奏がニヤニヤしながらこつちを見てる……。イタズラを思いついた時の顔なんだなこれ。この顔してたら気を付けよう……。

「とりあえず、交友は増やしたいから友達としてなら、いいかなあ……」

「おや、彼女は?」

「いないし、作る気も今はないよ」

っていうか作れる気がしない。

「新しいイケメンがこれじゃつまんないな」

「いや、そこまで頭が追いついてないから無理」

これは一応本音だ。やることとかの道筋はついたけど、それでもまだこの状況に納得していない自分がある。まあ他にも理由はあるけど。

「そればかりは焦ったって意味ないもんね……うーん……」
「まあゆっくり慣らしてくよ」

なんやかんや言つて、真剣に奏が考えてくれてるみたいで、なんか嬉しい。

「何嬉しそうな顔してるの？」

あ、顔に出てたか。一応話題逸らしとこう。

「何でもないよ。ところどころ向かつてるの？」

「ん？もうちよい歩いたところ」

もうちよつとかかるっぽい。

—————

多分学校から歩いて15分程度。

「着いた着いた、そこだよ」

奏の指差した方を見る。見ると一軒のマンション。

「あれは？」

「A Eの社員寮」

そんなどこに何の用だろうか？

ロック式の入り口の自動ドアに、奏がパスワードを打ち込んで開けた。エントランスを通つてエレベーターに乗る……と思いきや、奏が管理所にいる壮年の女性に声をかけ

た。

「おばちゃん! 鍵受け取りにきたよ!!」

「はいはい803号室ね。その子がアレかい?」

「あ、どうもはじめまして……」

「そうそう! これからよろしくしてあげてよ。悠梨、こっちだよー」

会話についていけない……。事務所のおばさんへの挨拶もそこそこに連れてかれる。

今度はエレベーターに乗り、奏が8階のボタンを押す。ちなみに15階建てだった。

8階につく。左右に通路が別れていて、奏は右に進んだ。右側に部屋が並んでいて、

803号室の前で立ち止まる。

「はいこれ」

奏が鍵を手渡して来た。カードタイプだ。僕に開けさせるのか。

カードを通して、解錠しドアを開ける。

「さ、入った入った!」

奏に背後から押された。

「靴! 靴!!」

「おお、ごめんごめん」

今度は靴を脱いで上がる。

まあ普通の部屋だ。テレビとかエアコンとか冷蔵庫とかベットの設備は整ってるね。……で、だ。

「この部屋を僕に見せてなんか意味があるの？」

「ここまでできて分からない？」

「いやごめん、全然わかんない」

「……意外に鈍いね、君……」

奏が小さくため息をついたあと、告げる。

「……いいい？ここは君の住む部屋だよ」

……うん？今すぐいありえない事聞いた気がするんだけど……。

「えっと、奏、今なんていったの……？」

「悠梨はこれからこの部屋に住む、って言った」

……聞き間違いじゃなかった。というかこのやりとり、デジャヴ。

「……どうしてそんなことに？」

「父さんにちよつとおねだりしたんだよ。ちよろいちよろい」

AEの社長さん、ご愁傷様です……。

ってそうじゃない。

「僕の部屋が用意された理由だよ」

「だって悠梨、会社の事務所のソファで寝泊まりしてる、って言ったでしょ? 流石にそのまま、って訳にはいかないと思ったからさ」

え、えー……そこまでしてもらうともうなんだか……。

「ILDKのリビング8畳、洋室6畳、お風呂付き。文句ないしょ?」

「全然ない!!十分すぎるくらいだよ……」

「そっかそっか。なら良かった」

凄いいい笑顔をされてる。可愛い。違う。

確かに部屋は欲しかったけど……でもここまでしてもらうわけにも……。

……。

「……有難く借りさせていただきます」

最終的に誘惑が勝った。

「よしよし。んじゃ、後で夕飯作って持ってくるから、部屋を魔改造してていいよー」

「いやしないから」

さつきも言ったけど、そもそも何も持ってないから模様替え(断じて魔改造ではない)は出来ない。

奏を玄関まで送ってく。

「んじゃ後でねー」

そう言つて奏は右側に姿を消した。

(ん? 右側……?)

そつちはエレベーターとは反対側のはずだけど?

疑問に思つて顔をのぞかせると、隣の部屋(802号室?)に奏が入つて行くのが見えた。

「隣!」

「につひひー。その部屋が空いてるのは知つてたから、これも父さんに頼んじやつた♪」
奏に甘すぎやしませんか社長……?」

(……知らない人が隣よりは何万倍も増しか、うん)

13. 新たな力

l l l s i d e 悠梨 l l l

翌日。金曜の朝。

昨日夕飯を持ってくるついでに奏が置いていったサンドイッチを美味しくいただいたあと、制服に着替える。時間は……7時半か。15分歩けば学校に着くみたいだけど、

(ま、早めに出るに越したことはないよね)

そう考え、部屋をでることにする。

晴れか。うん、5月だから気温もちょうどいいや。

玄関を閉めて、隣の部屋 l l l 802号室の部屋に向かう。

これも昨日の夕食時に決まった事だが、道を覚えるまで奏と一緒に登校してくれることになった。

ブザーを押す。インターホンからすぐに応答がきた。

『今出ます』

「え？」

奏の声じゃ、ない……だと？

戸惑う僕の目の前でドアが開く。

がちゃん

中から延珠ちゃんと同じくらしいの身長のも、黒髪の子が出て来た。

「えっと……緋上悠梨さん、ですよね？」

「あ、はいそうです」

「奏ですよ？ すいません、奏は5分前に起きたばかりで……奏、緋上さんもう来たよ

？」

「……ええ!? もう!? 早いよ悠梨!!」

部屋の奥から奏の音が聞こえてきた。すごいドタバタしてる。

「あと20分待つて〜!!」

「……奏に20分後にもう一回来るって伝えといてくれますか？」

「分かりました」

それだけ言つて、ドアを閉じた。

(……結局、あの子は誰だったんだろう……?)

—————

15分後。

ピンポーン

「お？」

チャイムが鳴った。少し慌てて鞆を持ち、靴を履いてドアを開ける。

「こつちから行く前に来たとか、早かったねー。おはよ、奏」

「悠梨おはよー。そりや急いだよ……」

予想通り奏とさつきの子がいた。

「ねえ、奏。その子は？」

「えつとね……うちの居そうらぐふつ」

奏のお腹に女の子の手刀がっ!?

「毎回それ言うのいい加減やめてよ……。すいません、お見苦しいところをお見せしてしまつて。私は趙飛狼（テウ・フェイラン）と申します。奏のインシエーターです」

「へーそうなの……」

衝撃の事実。

「奏も民警だったの!？」

「……緋上さんに言つてなかったのね。どうりで私を見ても反応しなかつたはず」

「い、いや、隠してたほうが後で面白いかなーって!!」

「どういう言い訳!？」

全く理解出来なかった。

「ま、まあそれより遅刻しないように早く行こうよ!!」

(誤魔化す気だな……)

でも、ここで聞き出してる時間がないのも事実だ。行くとしよう。

「んじやラン、行ってきまーす!!」

「あ、えーと、行ってきます」

「行ってらっしゃい。全く、朝から騒がしいんだから……」

飛狼ちゃんが奏のお母さんに見えたよ。

後で奏から聞き出した話(何故かまだ勿体ぶってなかなか話そうとしなかった)によると、飛狼ちゃんはモデル・アルマジロのインシエーターで、2人の序列は8900位らしい。

元は3万位ちよつとだったらしいが、『モルフォ蝶事件』とやらを解決して一気に序列が上がった、と言っていた。

目立ったガストレアを討伐すると序列があがるみたいだね。

――
その先2週間、特に問題は起こらなかった。

2、3回ガストレアの討伐に出向いたけど、前に司馬重工で借りた銃（スチエツキンというらしい）と同型のをA Eに提供してもらっていたので、それで蓮さん達と一緒にちよいちよいつと解決した。

神機は、奏と蓮さんから「目立たないように、使わないほうがいい」と言われたのであるべく使わないことにしている。見慣れない武器は目立つ、か……なるほど。

そしてとある平日。ついに異変が起きた。

――

『緊急職員会議を開きます。教員は全員職員室に集まって下さい』

そんな放送が開始直後に流れた昼休み。

お昼を食べるグループみたいなのがあるらしく、誘われてそこに入ってからなんかずっとそこで食べてる。

蓮さんも誘おうとしたんだけど、「俺に関わんな」とでも言いたげな顔で睨まれて断念。蓮さん溶け込ませ計画はなかなか上手く行ってません。

さて、昼食を食べながらの話題はさっきの放送のこと……ではなかった。

「……おい、あれ見ろよ」

「マジかよあれ」

「ん?……どしたの?」

偶然窓の外を見た男子が何かを発見したらしい。

「校門のところ。あれリムジンだろ」

「あー、ホントだ」

確かに門の所に止まっている。リムジンときて思いつくのは一つしかない。

「未織さん関係かな?」

「あーありえるかもな」

未織さんが毎日リムジンで登下校してるから、この学校ではそう珍しいのでもないんだけど……。

「なんでこの時間に来てんだ?」

「実は会長とは関係ないとかか?」

「未織さんの来客だったりして」

僕の考察を述べるが、すぐに否定された。

「会長関係であろうがなからうが、この時間にいるのはやっぱり珍しいけどな………つて悠梨、お前、まさか司馬会長と知り合いなのか!」

あれ？そこに反応する？

「うん、まあ……」

「なんだと!? おい悠梨、紹介してくれよ!!」

「え？」

「待て、それは俺にしろ！」

「いやいや俺にだな……」

「お前ら抜け駆けは許さねえぞ!! 悠梨、これに会長のメアドを……」

「二てめえが抜け駆けしてんじゃねえか!!」

あれ、なんか変なスイッチ踏んじやつた？ 未織さんと関係あると問題あるのかな？

「よう悠梨、なんで知り合いなんだ？」

「て、転入する時に挨拶に行つて、そこからみたいなの……」

一応言い訳はしとく。

「ほうほう、なら俺も転入すれば司馬会長とお近づきになれるのか、なら……」

「それ実行したらタダのアホだぞお前」

「ああ。それにそんなことしなくても簡単にお近づきになれる方法があるだろ？——」

「こいつがいるじゃないか？」

僕の方を指差されたので、後ろに誰がいるか確認してみる。

壁だった。

「「お前だ、アホ悠梨!!」」

「ええ、僕!?そしてアホとは失礼な!!」

「だったらテンプレの反応すんじゃねえ!!」

「テンプレとか知らないから!! それとなんで皆して僕の机を囲んでるの!?!」

そう、いつの間にか僕の机は名もなき男子達によつて囲まれていた。

包囲網から1人の男子が進み出てくる。……助けかな?

「……美少女は皆で共有するもんだろ、なあ皆?」

「「そうだそうだー!!」」

「というわけで緋上悠梨に司馬会長とのコネクトを要求する!!」

「「要求する!!」」

違う、リーダーだった。男子達の圧力が半端ない。

「え、えーつと……」

紅くー燃えるーその眼差しにー♪

「「……………」」

クラスが一斉に静かになり、音の発信源——蓮さんに顔を向ける。しかも木更さん専用着メロという……。

「ちっ……なんだよ木更さん」

今は人が少ない教室の後ろのドア付近に逃げて通話を始める蓮さん。小声なので皆には聞こえてないだろうけど、僕には少し聞こえる。

(……ボウエイシヨウ?……招集?なんの話だろう……?)

どうやらこつちの世界特有の単語みたい……

ガシツ

「え?」

肩を掴まれた。……さっきの男子達だ。

「さあ悠梨、里見など置いといて話をしようじゃないか」

(しまった!逃げるチャンスだったのに!!)

「お、落ちて着こうよ皆!ね!」

「我々は落ち着いている。なあ皆?」

周囲は無言で頷きを返す。

「目が怖いんだよ!!何をそんな必死なの!」

「知ったことか。逃げられると思うなよ……!」

「う、うわあああ……」

ピシヤッ

「遅いわよお馬鹿！」

「うおッ!？」

ドアが勢いよく開けられる。第三者の乱入によって驚愕に包まれる教室。ドアから飛び退く蓮さん。そして、聞き覚えどころかほぼ毎日聞いている声。

「え!?!木更さん!？」

別の学校の制服を着た木更さんが、入り口に立っていた。

……1つ学んだ。1人だけ制服が違うと、かなり浮くんだね……。

その浮いてる木更さんが僕の声に反応してクラス内を見回す。

「あら? 悠梨君の声が……」

「ここですここです」

男子達をかき分けて脱出し、木更さんの前にでる。

……木更さんが僕を見つけられなかったのは、僕が小さいからじゃなくて周りが身長高いから木更さんから見えなかっただけなんだ。きつとそうに違いない……ッ!!

密かに心に大ダメージを負った。

「……そう言えば同じクラスだ、って言ってたわね。じゃあ社長命令よ。里見君を持つ

てくから、後をなんとかしておいて頂戴」

「おい、持つてく、つてなんだ俺は物じゃねえぞ」

「……つまり、……えっと、早退？」

「ガン無視しやがったな悠梨……」

そう、早退だ。確かそういう扱いだったと思う。

「ええ。担任にそう言っておいてくれると嬉しいわ」

「ま、待て、俺はまだ同意してなぐえっ」

「文句言わずに来なさい」

ネクタイを引つ張られる蓮さん。苦しそう……。どつちにしろ助け(られ)ないけど。

「俺の意見は!？」

「そんなの聞くとと思うの?」

「人権とかねえのかよ!」

「報酬をもらい忘れる無能社員にはないわよ。さあ仕事よ、里見君。しっかり稼ぎなさいー」

「いー」

「まだそれ言うか!!ちよ、悠梨ヘルプうううう……!!」

蓮さんの断末魔が聞こえるが……

(すいません無理です)

今木更さんを止めたら後が怖そう。

(……蓮さん、ご無事で……)

僕達の敵である神に祈るしかないね、うん。

見事に教室に取り残される僕。

「……おい、悠梨」

さっきの男子達の1人が話しかけてきた。

「何も聞かないで欲しいんだけど……」

「さっきの女子は誰だ!？」

「聞かないで欲しい、って言ったよね!？」

僕の願望は一瞬で打ち砕かれた。

今のを皮切りに、ざわめきが教室に広がる。

「あの子、美和女の制服だったよね」

「どっかのお嬢様なのかなー」

「社長命令って、俺たちと同じくらいで社長とかありえるの?」

「美人だったなあ……」

「お前が釣り合うわけないだろ」

「なんだと!？」

「収集がつかない!!」

「簡単に収集をつける方法があるぞ」

「え!?!何それ教えて!?!」

すかさず飛びつく。

「お前がさっきの女子の情報を公開すれば済む話」

「個人情報っていう概念はないの!?!」

頼った僕が馬鹿だった!!

「だが、皆興味がある様子みたいだぞ?」

「え?.....うつ」

すごい視線が集まってきて、思わずたじろいでしまった。

.....ええい、ままよ!

「.....うちの会社の社長で、蓮さんの幼馴染みたいな人。これ以上は言わない!!」

「.....本当に社長だったのか.....」

僕も最初は驚いたけどね。

「.....さて、悠梨。お前に一つ言っておく。

「え?何?」

どうせいい情報じゃないんだろ.....。期待はしないが一応聞いておく。

「「爆発しやがれこの野郎!!」」

「なんで!？」

予想の斜め上が来た!!

「司馬会長と知り合いだということに留まらず、あの美人社長の部下という……許せるか!!」

「それに転校してきた時も、秋月と元から顔見知りみたいな雰囲気だったし、おまけに一緒に帰ってることもあるじゃねえか!!」

「ん?ボク?」

「奏には関係ないから!!」

ぐるっと顔を向けてきたこのシーン初登場の奏を追い払う。

「あーもう……奏つてば……」

「ほら、名前で呼び捨て!!やっぱ仲いいじゃんかよ!!」

「ええ……」

これロミ才先輩みたいな感じ……要するに嫉妬か。

(……めんどくさっ!!)

「……もしかしたら、里見と一緒に住んでいるあの小学生とも知り合いか?」

もしかしなくても延珠ちゃんだ。……というかさ。

「延珠ちゃんが存在ってばれてたんだ!!」

「ほうほう……延珠ちゃんというのか……」

しまった、ロリコンにいらぬ情報を与えてしまった。

「……で、なんで蓮さんが女の子と一緒に住んでる、って知ってるの?」

「新年度が始まってから、その子が帰りに『蓮太郎、妾達の愛の巢に帰るのだ!!』って言うって教室に入ってきて、里見がすぐに連れ出す? 連れ去る? っていうことが2、3回あつてよ。それからクラス内に『里見蓮太郎は幼女と同棲している』って噂が広まったんだよ」

……容易に想像出来るね、その光景。

(しかも噂じゃなくて事実だし)

否定が出来ないので……はい。

人生諦めが肝心だよね!!

「……今の証言より、緋上悠梨はあの女兒とも関係あると判明!!」

「諸君……彼をどうする?」

「え、どうするって」

「「私刑(リンチ)!! 私刑!!」」

「さあ悠梨、1人1人殴らせろ」

「謹んで辞退する!!」

「いやカラオケだろ」

「ポケ○ンの続き……」

（誰一人としてそのまま帰る気はないんだね……）

僕が悶えている間にそんなことを話しながら、名もなき男子達は全員散らばっていった。

図らずも助かったよ……。

「悠梨、お前も一緒にゲーセン行くか？」

さっきの困った男子の一人が誘いをくれた。切り替えの早さに内心驚くが、表情に出すのは堪えた。

「ごめん、今日は予定があるから、また今度でいい？」

「そっかしゃーねーな。分かったよ、また今度な」

ゲーセンとやらの興味はあるんだけどね……。

—————

というわけで下校のち予定……と言っても、家に帰ったわけじゃない。今日は奏とAの本社にきた。

（これも寄り道になるのかな……？）

Aホなことを考えてる僕に、奏の声がかかる。

「さて、じゃあ悠梨、今から適合試験を始めるよ」

「その言い方やめて。ゴッドイーターになった時のトラウマが、トラウマがががが」

「ほう、それ詳しく」

「悪いが、断る!!」

「ちっ……」

舌打ちしたよこの娘!!

まあそれはさておき……テストと言っても、僕のじゃない。

『神機』のテストだ。

「んじゃとりあえずこのバラニウムを取り込んでもらうわけだけど……」

奏がそう言って並べたのは、拳程度の大きさの、真つ黒な岩石。

……そう、神機にバラニウムを取り込んで、対ガストレア用の武器にするためのテストだ。

しかし奏は疑問をぶつけてくる。

「どうやって取り込むのさ?」

「まあまあ見ててって」

僕はそれだけ言って、神機を後ろ溜めに構え——捕食形態(プレデターフォーム)に変形させた。

「……!! なるほどね……」

納得してもらえたようだ。

僕が考えたのは至って単純。神機にバラニウムを捕食させれば、その力を受けられるんじゃないか、って考えた。そしてそれを実行に移している。

「……いけッ」

神機を繰り出す。

バキボキ

神機がバラニウムの岩石を呑み込み、破碎する。

「……あんまない音じゃないね」

「これならまだマシンなほうだよ。アラガミを捕食した時はグチャ、って音がすることも……」

「やめて想像出来ないけどしたくない!!」

甲殻があるボルグ・カムランとかはいい音する時もあるんだけど。

……グボロ・グボロとか捕食した時の音は、SAN値が少し削られそうな気持ち悪い音がする。

閑話休題。

少し待っている。すると

「おお……」

神機が、全体的に黒くなり始めた。

真紅の大剣が、白銀の銃が、緋色の大甲が、黒に侵食されていく。

そして、神機が全て黒に染まった。

「……これはこれで格好いいね」

漆黒の神機……なかなかいい。

「黒がいいとか、悠梨は中二病の気があるね」

「チューニビヨウ？」

「いやなんでも」

はぐらかされた。チューニビヨウ……病気かな？

「んで、調子はどう？」

「えっと、神機は正常に作動してるから、コアも生きてると思う。腕輪と接続もしてる

し。でも、バラニウムは実践で使ってみないとほんとにも……」

「んじや、第一段階クリアってとこだね」

無言で頷き、同意する。

「これが僕の、新たなる武器だ。」

「……あ、そうだ」

「どしたの?」

奏が何か思い出したようだ。

「腕輪で思い出したんだけどさ、その腕輪はどうやって言い逃れしたの?」

「言い逃れって言い方悪いね……。一応、病気ってことにしといた」

筋肉が萎縮する病気の最新の治療法で、常に薬を投与して進行を抑える為に腕輪をつけてる、って設定だ。

「へー。うまくいったの?」

「……………ま、まあ、うん…………」

「悠梨、ボクの方見て言わないと説得力ないよ」

思わず目を逸らしてしまった。

事実を上手くはぐらかし、且つ違和感持たれない理由を作るのは面倒だった。

最終的には、ごり押しで何とか納得させた。

あれは大変だった……。

Wanna know why
y 〽️
Wanna know your
fantas

「……マヨマヨファンタジー？」

「ちがーう!!!」

過去を思い出して気が遠くなっていた僕を着メロが現実に戻す。
そしてマヨマヨファンタジーでは決してない!!

奏に突っ込みをいれた後、電話に出る。相手は蓮さんだ。

「どうしました蓮さん？」

『いいか、悠梨。これからいう事を落ち着いて聞いてくれ』

やけに切羽詰まった声色だ。

「……ボウエイシヨウとかいう所で、何かあったんですね？」

『何で知って……お前なら教室で聞こえてもおかしくないか』

「すいません少し聞こえてました。クラスメイトには話してないんで

『ならいい。……本題に入るぞ。実は』

賭くけろプライド、死ぬくまで狼く♪

「……ちよつと待ってくださいね蓮さん。……アツカリーン？」

「違う!!狼だから!!! ……父さん?どうしたの?」

奏の着メロに空耳でボケた。よし、仕返しはしたぞ。

「すみません蓮さん。続きをどうぞ」

『……俺シリアス入ってたと思うんだが……』

「仕返ししたただけなんで気にしないで下さい」

『分かったよ……。で、だ。東京エリアが滅ぶかもしれない』

「なるほど……。すみません蓮さん、もう一回お願いします」

脳が理解を拒否した。

『……いいか？東京エリアが滅ぶかもしれないって言ったんだ』

「……………え？」

聞き間違いではなかった。

……どうやらこの世界に来て1ヶ月で、僕は居場所を失いかねない事態に巻き込まれたらしい。

14・秋月奏&趙飛狼

秋月奏&趙飛狼

まず奏。

名前……秋月 奏（あきづき かなで）

年齢……16歳

誕生日……3／2

性別……女

身長……158cm

体重……奏「聞いたら殺すよ☆」

スリーサイズ……（血をかぶっていて読めない）

使用武器……ライフル系全般。

容姿

身長は悠梨より少し低い程度。茶髪のショートをツンツンするようにセットしている。(参考キャラは『ベン・トー』のウルフヘアというキャラ)

解説

秋月家料理担当にして秋月エレクトロニクス(略称AE)の社長令嬢。ボクっ娘。悠梨、蓮太郎と同じクラス。また、今は別クラスだが、一年の時に同じクラスに編成されたことで出会った未織とは、立場が似ていることもあって親友。延珠、木更とは面識がない(延珠の存在はクラスメイト同様把握している)。

飛狼とは1年3ヶ月前からペアを組んでいる(奏は中3の2月、14歳、飛狼は8歳の時)

AEの社長である父親に乞うて、社員寮で飛狼と2人暮らしをしている。料理担当。それ以外の家事はズボラ。全て飛狼にお任せ。どのぐらい出来ないかというと、

奏。パパ「ランちゃんと一緒に済まないと暮らせないでしょ?」

奏「おっしやる通りです……」

こんなやり取りがあつたレベル。元々奏は2人で住むつもりだったけど、親から強制されるとは思っていなかつた模様。

戦闘スタイル

遠距離狙撃型であるティナと対になる中距離火力重視型。そのうち「弾幕は火力だぜ」とか言いそう。使う銃は使用時によって変えている。時には軽いライフルを使用し移動砲台になり、時には超重量ライフルを持った固定砲台となる（重いライフルの持ち運びはラン、もしくはA Eの部隊が行う）

なおその武器は奏と悠梨の住んでるマンシヨンの地下に秘密裏におかれており、そのマンシヨンに住むA Eの戦闘員はそこから武器を持ち出して戦闘に行く。

続いてラン。

名前……趙 飛狼（テウ フェイラン）

因子……モデル・アルマジロ

年齢……10歳（第一世代）

誕生日……4／14

性別……女

身長……138cm

体重……飛狼「教えません」

スリーサイズ……（作者の首が手刀で落とされたため書き込み不能）

使用武器……長槍

容姿

黒髪のセミロングで、もみあげだけを伸ばしている。黒目（イメージは「魔法課高校の劣等生」の北山雫です）

解説

奏のイニシエーターで、中国人。一緒の部屋に住んでいる。洗濯、掃除担当。通称はラン。

本人がめんどくさいと思っているため、学校には行っていない。「漢字は読めるので問題ない」とは本人談。中国人故か？その言葉通り、普通の本はちゃんと読める。理系科目はきつと壊滅的。

前述の通り、奏とは1年3ヶ月前に出会った。奏の両親が差別主義者でなかったこともあり、簡単に受け入れてもらえた。また、家事も一通りこなせるということで、奏の母からは大層気に入られている（料理のみ奏のほうが上手い）。

戦闘スタイル

体術（特に手刀）と、長槍を用いた近距離攻撃がメインだが、自分から突っ込むということはあまりない。

その理由は『奏の守護』。

大火力の奏が射撃に専念するために、近づいてくる敵の撃退、もしくは撃破が基本。また近づかれた時にはアルマジロ因子の能力『皮膚の硬化』によつて防御も可能。そのため、奏の周囲3メートルから離れることはあまりない。

奏がメインアタッカー、飛狼がサブアタッカー、という民警では珍しい組み合わせである。まあ伊熊将監というちよつと別の前例がいるけど。

飛狼の過去

両親は共に親や旧友をガストレアに喰われた『奪われた世代』。飛狼を産んで赤目と分かった時はすぐに捨てようと考えたが、

『ガストレアと戦わせて共倒れにさせた方がいい』と考えてしばらくは養育することにする。2歳になったところから、飛狼に様々な武術を習わせ、一番芽の出た槍術を最終的にやらせた。この間、偽りの愛情に飛狼が気付くことはなかった。

そして6歳の誕生日を少し過ぎた頃、夜になって眠った飛狼をIISO上海支部の前に愛用の槍と共に捨てた。朝起きて捨てられたことに絶望するが、保護してくれたI I

SOの職員が優しい人物だったため、人間不信に陥らずに済んだ。
その後体術を習いながら相性のいいペアの組み合わせを待ち、約2年後、プロモーター登録をした奏と出会った。

秋月奏&趙飛狼ペア 序列8900位

「何やってんだお前らああああああ!!!」

僕と延珠ちゃん氣勢よく手を突っ込んだせいで鍋から盛大にこぼれたお湯を見て、僕達のすることを横目で眺めていた蓮さんが突っ込む。

「こ、氷っ!!氷はどこ!?!」

「出してないのかよ!!ちゃんと準備しとけ!!」

パニックになつて僕達の代わりに氷を持ってきてくれた。すぐに手を差し込む。

「ああ、気持ちいい(のだ)……」

氷の冷たさが手に染みるよ……。

僕のこの手が真っ赤に茹で上がった……いえ、何でもないです。

「……で、その奇行に至った理由は?三行で答えろ」

こめかみを抑えた蓮さんに聞かれる。まあ当然か。でも三行とは鬼畜な。

えっと……

「授業でやった

盟神探湯(くがたち)を

やってみました」

「そうなのだ

盟神探湯なのだ

蓮太郎!!」

「そうか分からん。そして延珠はほとんど俳句だろそれ」

「えー。日本史の授業でやったじゃないですか」

「今日のか？寝てたから知らねえな」

あー……通りで指名されても反応が無かった筈だよ。

(※盟神探湯とは、古代の裁判方法の1つで、沸騰したお湯の中に囚人の手を入れて、火傷したら有罪、しなかったら無罪とする儀式ですby作者)

作者解説ありがとー。まあ今回は60度位でやったから火傷はしないけど。

「ていうか蓮さん、大丈夫なんですか？そんなに授業サボってて」

「生物以外訳分かんねーからいいんだよ。お前だつて似たようなもんだろ」

「失礼な。僕は国語と生物が高いんですよ」

「その生物を教えてやってんのは誰だよ？俺は生物は毎回満点だぞ。平均ちよい越える程度のお前のと比べても無駄だろ」

「生物以外からつきしじやないですか。多くの教科がバランス良くできたほうがいいんですよ」

「ふん、甘いな。1教科のほうが……」

「私からしたらどっちもどっちよ」

「う”っ!!」

いつの間にか事務所に戻ってきた木更さんに直視したくない現実を目の前に晒されてしまった。僕と蓮さんの心に大ダメージ!

「……つか、木更さんいつからいたんだよ?」

『『ていうか、蓮さん』の辺りからいたわよ。それに何よ?このこぼれた水。早く吹きなさいよ』

ゴッドファイ〇ガーは見られてなかったようだ。延珠ちゃんも2人で急いで床を拭く。そんな僕達を眺めながら、ソファアに座った蓮さんが呟く。

「……しっかし、東京エリア壊滅が迫っているとは思えない状況だな……」

「そうね……」

「実感なさすぎですよ」

「本当に滅ぶのか、蓮太郎?」

「ステージVが来たらな」

昨日の電話の後、事務所に戻って聞いた説明で初めて耳にした単語、『ステージV』。とてつもなく巨大で、バラニウムの影響を受けないらしい。

これが東京エリアに召喚されるかもしれない。関係者は蜂の巣をつついたように

なっているそうだと。

「バラニウムが効かないとか、そんなのどうやって倒せって言うんですか」

「序列1位に聞きや分かるだろ」

「誰か知らないんですけど」

「俺も詳しくは知らん」

本末転倒だ。フラツとステージVを一体倒した序列1位……どんなペアなんだろう
か。

因みに奏は今日学校を休んだ。A E内で何かやってるのかもしれない。

「とりあえず、すぐに政府主導による『七星の遺産』の回収作戦が始まるでしょうから、
いつでも動けるように準備しとくよ。決して蛭子影胤に遅れをとらないように!!」

「了解!」

蛭子影胤、この人が『七星の遺産』を使ってステージVを召喚しようとしているらしい。
何としてもとめないと……!!

……話が突然変わるけどさ。

「蓮さん、コンビニってなんですか?」

「お前コンビニ今まで使ってたのか……」

なんか呆れられた!

「仕方ないじゃないですか、分からないんですから」

クラスメイトに帰りに寄ろうと誘われたんだけど、コンビニが何か分からなかったの
で断ってしまった。

「はいはい。んじや帰りに皆で寄ってくか?」

そう言つて蓮さんが皆を見るが、木更さんが手をあげた。

「里見君、せっかくだけど、私今からあそこ行つてくるから。気にしないでいいわよ」

「……そうか、分かった」

(あそこ?)

あそことはどこか聞きたいところだけど……蓮さんから『絶対に聞くなオーラ』出て
るからやめとこう。

「それじゃ、行つてくるわね」

「おう、行つてら」

木更さんがドアを閉める

「んじや、俺らはまた依頼来なかつたらそのまま終わりな。んで帰りにコンビニ寄る、
と。よし寝よ」

「決めるの早!?!」

「zzzz……」

寝るのまで早かった。

「……日本史やろうか」

延珠ちゃんが蓮さんの横でなんとか添い寝しようとしているのを視界の端に捉えつつ、僕は日本史の道具を机に広げた。

16. 影胤、再び…

l l l s i d e 悠梨 l l l

夜。約束通り事務所からの帰り道にコンビニに寄った。

「コンビニすごいですね!!」

「俺には今更だが……」

蓮さんが僕の右手をちらつと見て、

「買いきじやね?」

「………そんなことないですよ……」

「最初の間な。自覚あんなら自重すりや良かったものを」

「じゃ、じゃあお布施つてことで!」

「こいつ廃課金厨の匂いすぞ……!!」

「ハイカキンチュウ……何か分からないですけど、次は買いきまないよう気をつけます」

そう、僕の右手には膨らんだビニール袋。そこにはクッキーやグミなどお菓子の山が

!!

……買い過ぎました。興奮してて気付いたらこんなことに……。

仕方ないじゃん！クッキーとか見ると、誤射姫ことカノンさんの作ってくれたプラス
トクツキーとか思い出しちゃうんだから!!

(カノンさんのお菓子美味しかったな……)

それでも1500円は使い過ぎた感がめっちゃするから、さつき言ったとおり自重し
よう。

まあコンビニ、スーパーよりも多いので便利なんだね。

ちなみに延珠ちゃんは今もう少し悩むらしく、後で追いつくから大丈夫との旨を言っ
たので、置いてきた。延珠ちゃんなら不審者からでも簡単に逃げられるだろうしね。

というわけで、今は車一台分くらいの狭い道で蓮さんと二人つきり……きやー怖ー

い(棒)

「……今なんかすげー悪寒がしたんだが、何なんだ……?」

「……キ、キノセイジヤナイデスカー?」

「なんで棒読m「ほう、気付かれていたとは」……は?」
にゆっ

僕と蓮さんの間から、白い顔が生えてきた。

「っ!?!」

蓮さんは後ろに、僕は左にとっさに飛ぶ。

……さて、思い出していたきたい。道の狭さを。加えて、ゴツドイーターの脚力で飛ぶ。更に背後にはコンクリートの塀。

………後は、分かるね？

「げふっ」

背後のコンクリートの塀にぶつかった僕の完成。

そのまま崩れ落ちる。

「……………」

蓮さんと白い顔の人がこっちをガン見しているのがわかる。

(…………いや、白い顔じゃなくて仮面かこれ)

今更そこに気づくが、それよりも恥ずかしすぎるのでこちらを見ないで欲しいなーっ
……!!

願いが通じたのか、ふたりとも同時に僕から目を話して向き合う。

「か、影胤!?!」

「……………や、やあ里見くん。昨日ぶりだね」

どうやら無かったことにされたっぽい。……………ん？

「影胤……つてまさか！」

「ほう、情報はすでに出回っているようだね。そうさ、私こそ世界の破滅を目論む者、蛭子影胤。覚えておいてくれたまえ、里見君のイニシエーターよ」

この人があの……という驚きはひとまず置いて、と。

「……僕イニシエーターじゃないんですけど」

「おや？身長が小さいからてつきりそうかと……」

ブチツ

頭の中で何かが切れる音が聞こえたきがした。

「小さい言うなっ!!」

立ち上がりざまにスチエツキンを腰からドロウ。

「待て悠梨！そいつに銃は」

「待たない!!」

早撃ちで3発撃つ。距離は3m程、まず回避は出来ない筈だ。

だが、

「ヒヒッ、無駄無駄」

「えっ!?!」

影胤さんの周囲を青白い燐光……まるでヴァジュラの放電（もしくはGNフィールド

でも可)のようなものが影胤さんの周囲に展開して、銃弾をはじき返してしまった。

放電した瞬間にステツプで突っ込んで、見事に吹っ飛ばされた記憶が蘇る。これも懐かし……………い……………なあ……………。

(嘘だ、こんなので郷愁の念に駆られるとか……………っ!!)

出来れば思い出さたくない記憶だった。もつと楽しい思い出の方が……………いやそれどころじゃない。頭を降ってどうでもいい考えを追い出す。

「驚いたかい? 斥力フィールドだよ。この『イマジナリー・ギミック』は、ステージIVの攻撃を受け止める。そうそう破れはしない」

『『イマジナリー・ギミック』……………?』

ステージIVと言ったら、通常のガストレアの最高到達点。その攻撃を止められるとか……………どういう構造してんだこれ。

「貴方、人間なんですか?」

「人間だとも。ただこれを発生させるために内臓のほとんどを取り出してバラニウムの機械に詰め替える手術を行っているがね」

「機械、ですか……………?」

「改めて名乗ろう。陸上自衛隊東部方面隊第七七七機械化特殊部隊、『新人類想像計画』

蛭子影胤。これが私の元の肩書きさ。肝臓を病で失ってね、その代わりに斥力発生装置を入れてある」

「……『新人類想像計画』……?」

また分らない単語が出てきた。

「蓮さん!!『新人類想像計画』ってなんですか!?!」

とりあえず面倒事は蓮さんのところに移動ついでにパスする。

「……訳分からねえだろ?だから撃つの待ってって言ったのよ……それで、だ。『新人類創造計画』っつーのは……」

・ガストレア戦争時に、ガストレアに対抗するために生み出された『機械化兵士計画』の一つ

・体内に機械を埋め込んで、それによって脅威的な攻撃力・防御力を生み出し、ガストレアの殲滅を図った。

・手術成功率の低さ、莫大なコストに加え、自然発生する『呪われた子供達』の能力の高さが判明したため、すぐに廃止された。

「……こんなもんだ。今まで都市伝説と言われてたくらいだがな」

「なるほど……。……詳しいですね?」

「しまった」とでも言いたげな顔をする。

「こ、これくらい裏サイトいきやすぐ出て来るっての！ ……それで影胤、何の用だ？
戦うなら場所を変えるぞ」

「まあ話を聞きたまえ。今日は君に話があつてきた。……だがそつちの子にも用ができた」

「僕に、ですか？」

僕なんかになんだろう…？

「とりあえず結論から話そう。……君達、私の仲間にならないかね？」

……え？

ーーside蓮太郎ーー

「……君達、私の仲間にならないかね？」

随分とふざけたことを抜かしやがる。

「おい、何の冗談だ影胤？」

「私は至って本気さ。実は、里見君を一目見た時から何故か気に入ってしまったね。仲間
間に引き入れられたら思つた次第だ」

「あつ、」（「〇〇」）ホモオ……痛ッ!？」

余計なことを口走った悠梨の頭を殴っておく。多分影胤にも聞こえていただろうが、知ったことか。

……仮面の下の表情が、少しはドン引きしててくれるといいんだけど。

「……里見君、私が言うのもなんだが、その子の頭は大丈夫かね？」

「奇遇だな。俺も常日頃から不安に思ってたところだ」

良かった、ここは影胤が普通の感性を持っていて。

「あはは、冗談でs「ちよつと黙ってる悠梨」せめて最後まで言わせて下さいよ!!」

俺は事実を述べただけなんだが。

再度影胤に意識を集中させる。

「俺がそつちに着くと思うか？」

「さあ？だが、もし仲間になればすべての面で優遇されることを保証しよう。金も女も、

君の思い通りのままになる。聞けば、君は経済的にあまり裕福な暮らしをしてないそう

じゃないか」

「悠梨が来てからは少しマシになってるけどな」

そうだ。悠梨が来てから依頼の達成率が前より少しあがってきた。

おかげで生活がわずかに上向いている。

「だが、依然厳しいのは変わらないのだろうか？」

「お前に何がわかる、と言いたいところだが……否定出来ねえな……」
痛いところをついてきやがる。

「だろうと思つたよ……。これは前金だ」

影胤が指を鳴らす。すると、どこからともなくアタツシケースが現れた。それをこちらに向かつて滑らせてくる。目の前で止まって蓋が空いたそれの中には、

「おおう……」

俺達がこのまま働いてもまずお目にできないくらいのお金が入っていた。

「これでは不満かね？」

「……いや、前金としては十分だ」

「なら……」

「だが、そつちにつく気はねえ!!」

ケースの蓋を閉めてから影胤に蹴り返す。それと悠梨、蹴った瞬間に小さい声で「あつ」とか言うんじゃねえ。

「……わざわざ蓋を閉めるとは律儀なことだ」

「金が飛び散つたら勿体無いだろうが」

「貧乏くさいことを言う。そして、君は間違いを犯した。私についてこないことだ」

「悪かつたな、儲かつてなくてよ。ついでに、最初に出会つた時にお前を殺さなかつたの

が一番の間違いだ」

「ヒヒツ、それは残念だったね。……小比奈」

右首筋に冷たい感触。動く間もなかった。

「動かないで。首、落ちちやう」

少し視線をさげる。先程の場所に黒い刀身が突きつけられていた。その向きと声のした方向からして、背後に影胤のイニシエーター、蛭子小比奈がいる。少しでも体を動かせば、即座に俺の首は胴体から切り離されるだろう。

(……無理に動かない方がいいか)

「さて、里見君は決裂した。次は君だ」

やっぱりか！

「悠梨、気をつけろよ……」

小声で念を押す。

「分かってますよ。それよりも、なんであの人が僕に用があるかですよ……!」

「ああ、ちゃんと聞き出せよ……!!」

「全部筒抜けになっているが……いいのかい？」

「……………」

小声とはなんだったのか。

「まあ説明はするからいいんだけどね。実は、君をどこかで見た記憶があると思つてたのだが……悠梨君だったか？」

「緋上悠梨ですよ」

「ふむ。じゃあ里見君とお揃いで緋上君でいこう。それで、何故知っているかだが……私は、未踏査領域で君を見ているんだ」

なに？

「……いつですか？僕は貴方を見てませんよ？」

「一ヶ月程前だったかな？そして、君が私を見ていないということは間違いなく事実だ」
「……つまり、えーと？」

「悠梨が混乱するからさっさと話を進めてやれ」

「……実は、先程の発言には誤りがあつてね。正しく言うと、私は未踏査領域で悠梨君を『拾つた』んだ」

「拾つたあ!？」

声が裏返つた。人間に使う動詞じゃないだろ、おい!!

「え、え!？」

「思い出したまえ。君は未踏査領域で狼型のステージⅢのガストレアと交戦していたらう？」

「……………あ」

思い当たる節があるのか。

「思い出したようだね。それを偶然見ていたのさ。そしてそれに吹っ飛ばされて気絶した悠梨君を拾って、東京エリア内に捨て置いたというわけだ」

「……………なるほど。そしてそれを俺が見つけた訳か」

「恐ろしい偶然もあるものだね」

全くもってその通りだ。

もし、影胤がそのまま悠梨を持ち帰っていたら、今頃悠梨は俺達の敵として対峙していたのかもしれない……………そうなっていなくて本当に良かった。

そして、もう一つ。

「何故僕を捨てていったんですか？」

そう、問題はそれだ。

捨てて行った事自体は影胤に感謝していいかもしれない。正直、戦う時のスイッチ入った悠梨は敵に回すと厄介だろうからな。

だが、悠梨を捨てていったメリットが分からん。

「こいつアホだからそこでそのまま連れていっても多分洗脳出来たぞ」

「私もそう思っていたところだよ。だがここまでの阿呆な行動見てると、連れてかなく

「て良かったと思わなくもない」

「2人してアホアホ連呼しないで下さい……」

普段の行いを振り返ってから言え。

「阿呆な事はさておき……緋上君がほつといたらどうなるかを見たくてね」

はっ。

「ああ、安心したまえ。ストーカーしていたわけではない。今、偶然出会うまで忘れていたぐらいだからね」

「僕なんかどうでもいいんですね……」

Orzとなる悠梨。仕方ないので俺が話を進める。

「どうなる、つてのはどういう意味だ？」

「この世界に対して、緋上君がどういう反応をするか、ということだね」

……どうも話が見えない。

「ぼかしてないでさっさと説明しやがれ」

「やれやれ、せっかちだね。……悠梨君が気絶してる間に、死んでいないかどうか確認するために目を開かせてもらったんだが……」

「……っ!?!」

動揺で体を動かしてしまった。首筋が少し切れたが、それを気にしてる余裕はない。

(目を開かせただと……)

それはつまり……

「悠梨君。君は……赤目だろうか？」

……今一番知られてはいけない奴に、悠梨の秘密がバレていた、ということだ。

(……嘘だろおい、勘弁してくれよ)

17. 転生者という存在

——side 蓮太郎——

「……何言つてんだ？悠梨が赤目？馬鹿も休み休み言え。そもそも悠梨は男だぞ」
声が裏返らなかつただけマシだと思う。それくらい動揺していた。

「私も目を疑ったよ。まさか男で赤目がいるとは予想外もいいところだ」
「だから赤目じゃ……」

「しかしどう見ても第一世代の小比奈達よりも明らかに3、4は年上に見えるからね」
「……………ん？悠梨？」

「もつと年上!!」みたいな悠梨からの突っ込みがあるかと思つたから黙つていたんだが
……………。

見ると目を見開いたまま固まっている。

(……………これは)

「返事がない、唯の屍のようだ」

「俺の思考を読むな!!つか影胤そういうポケ出来たのか!？」

「一度使つてみたくてねえ」

ヒヒヒツ、つと笑う影胤。マジでビビった……。

だが、今ので動揺が吹っ飛んだから感謝すべきなのか？

「……お前なら、その言葉を使えそうな場面とか、たくさんあつたんじゃねえのか？ この前も大瀬フューチャーの社長がお前に殺された筈だ。不敬は分かっているが、その時に使おうと思えば……」

この前、というのは、俺達民警が聖居に集められて、『七星の遺産』回収の依頼を受けさせられたことがあった。その時に影胤が現れて場を引つ掻き回し、あげく『七星の遺産』は自分がもらう。どちらが早く手に入れられるか勝負しよう」などと言い出した。

その時に影胤が置き土産として置いていった箱の中に、先程の『大瀬フューチャーコーポレーション』の社長の首が入っていた、という事があった。

俺はそのことを指摘したのだが、返ってきたのは……。

「基本暗殺みたいにやるから、聞いてくれる人がいないからね」

「イニシエーターがいるだろ」

「君はネタを説明するのが苦行ではないのかい？」

「……………。……悠梨は16歳な」

「なるほど、覚えておこう」

思わず何も言えなくなったあげく、話を逸らすという情けない結果になった。

……話を戻す。

確かに、さつき影胤が言ったとおり悠梨の年齢で『子供たち』だ、ということはある得ない。何故なら、ガストレア大戦があったのが10年前。その時期に『呪われた子供たち』が突如として生まれるようになったからだ。そのことを今まで完全に忘れていた。

つまり16歳の悠梨が『子供たち』であるはずがない。年齢の要素だけで悠梨の諸問題が解決するかもしれない……。

(これは……いけるんじゃない)

「だが」

希望を持った俺に影胤の言葉が待ったをかける。

「私は一つの仮説を作ってみた」

「仮説？」

「緋上君がどうして赤目で、そして未踏査領域に1人でいたか、ということについてだ」
……ふむ。

一応俺はその理由を知っているが、事情全く知らない第三者がこのことをどう考察するか気になることがあった。危なくなったら介入することとして……。

「なるほど、聞いてやろうじゃねえか」

「一応礼を言っておこう。……まず前者だが、実は緋上君はガストレアウイルス持ちだ、ということにする」

「さつきアンタがそれを否定しただろ？」

「仮定と言ったはずだ。最後まで聞きたまえ。……ガストレアが現れたのは確かに10年前だ。そして『子供たち』が生まれ出したのも10年前。だが、誰もガストレアウイルスが見つかった、あるいはガストレアウイルスの初の感染者が出たのが10年前とは言っていないだろう？」

「……まあ確かにな」

「そこで、だ。それよりも早くガストレアウイルスが存在していたとしたら？ それこそ16年前にガストレアウイルスがあったとしたら？」

「……!! つまり、悠梨が感染していてもおかしくないってか？」

「その通りだ。都合のいい話だが、あり得ない事でもないだろう？」

「……じゃあ悠梨が男なのに感染している、というのはどういう理由付けにする気だ？」

「ガストレアウイルスは新しいものを取り込んで進化している。人を学ぶ途中で男に感染してもおかしくはない。その後、女性の方が優れていると判断したからそちらだけを

作り出すようになったのかもしれないね」

董先生が、「ガストレアはデザイナーだ」と言っていたことを思い出した。それに関連してくる話か。

今の所、反論する要素もないので続きを促す。

「……で、後者は？」

「赤目で生まれた緋上君だったが、当時はガストレアウイルスという概念がないから検査にもひつかからず、目が赤いだけの普通の子として育てられる。だが、ガストレア大戦が勃発。親が、誰か親しい人でも失ったのだろう、ガストレアショックを患ってしまい、緋上君を捨てた。その後はどうにかして生きてきて、倒れたところを偶然私が発見した、というところか」

「……なるほどな」

だが、悠梨の正体からして知っている俺から言えるのは、

「詭弁だな」

「パパを馬鹿にしないで」

「ちっ……」

首筋に当たる刀に籠る力が強くなった。今の発言が小比奈の癩に触ったらしい。めんどくせえ。小さく舌打ちをする。

「小比奈。あまりやりすぎるんじゃないよ。そして里見君。私も詭弁だということは理解している。最初に言ったとおり、あくまで仮定の話だ。すべて嘘だって可能性もある」

「……ああ、そうだな、全部嘘っぱちだな」

完全に影胤の世界に呑み込まれていたことに今更気付く。悠梨の事情を明かすわけにはいかない。

「だが、嘘かどうか判断するのは私達ではないだろうか？」

「……どういう意味だ」

影胤は俺の問いに答えず話を続ける。

「後半はほとんど冗談だが、ガストレアウイルスが10年以上前からあった云々の話はありません。あり得ない話ではない」

「でも存在しないかもしれないだろ？」

「では聞こう。初の感染者はいつ、だれがなった？」

「……分かるかよそんなもん」

「そうだ。そして私も分からない。この世界の人類のほとんどがそうだろう」

「……………」

「なればこそ、緋上君がウイルスを持っていないと言い切れないだろうか？」

「だから詭弁……」

「それが通用すると思ってるのかい？」

「悠梨が赤目じゃないってことは俺が分かってる!!」

「なら教えて欲しいね。緋上君は一体何者なんだい？」

「それはっ……っ!」

危うく悠梨が別の世界の人間だと叫ぶところだった。そんなことをしては今迄のことが全て水泡に帰す。慌てて口を閉じたが、それは悪手だった。

「答えられない、か。それでは意味がない。君が分かっているから、なんてことは何の意味も持たないのさ」

「ちゃんと説明すりゃ……!!」

「甘いね。人は見た目というファクターを重視していることは君とて知らない訳はないだろう? 赤目ということが知れ渡れば、それだけで迫害する輩が出てくるのは必然」

つまり、

「緋上悠梨という存在を決定づけるのは私達ではない。私の仮定を聞いて、それを真実だと信じるか、嘘だと切り捨てるか。その選択が出来る無能な人々こそが緋上悠梨という存在を決めることが出来るのだよ。……どうだい? これで最初の問いには答えたい?」

「な……で、でも俺達がしつかりと誤解を解けば……」

「……里見君、気付いていないのかい？」

「……何にだ？」

「さつきから緋上君が『赤目』という前提に立って私と口論しているという事にだよ」

「……………あ」

「その様子だと全く気付いてなか

しまった、完全に俺のミスだ……。

目の前が暗くなる。膝をつくことだけは、首筋に刀が突きつけられていることを思い出して堪えた。

「さて、里見君は論破したが……。緋上君がまだフリーズから回復していないのか。仕方ない。小比奈、里見君の右手を切り落とせ」

「……………あ？」

何を言われたかわからない。

刹那

ガキン!!

「蹴れなかった!!」

「切れなかった!!」

金属音が響き、刀が弾かれる。お互いがその反動を利用して距離をとりプロモーターのところまで下が「えうっ!」る。降り立った人物は……

「延珠か……」

目を紅く染め、力を解放した延珠だ。

「追いつこうと思つて走つて来たら……誰だ此奴らは」

「……蛭子、影胤……」

「……そうか、こいつが。ところで蓮太郎? 顔がいつも以上に暗くなっているし、悠梨もないではないか。一体なにがあつた?」

しれつと罵倒された気もするが頭が上手く回らないから気のせいだと思う。それに悠梨がない筈は……。

「悠梨ならそこに……あ?」

いない。

「……延珠ちゃん、下見て、下」

「下?」

延珠が下を向く。

右足に踏みつけにされている、地面に突つ伏した悠梨がいた。

「うわわっ!?! す、すまぬ悠梨!!」

慌てて延珠が足をどける。

(「そーいや延珠が降りた場所は、さっきまで悠梨が立ってた所か……」)

不運だったな、うん……。

「あーびつくりした……」

「悠梨、本当にすまない……」

「あはは……まあ大丈夫だよ。おかげで意識を戻せたし」

「……そこは『重かった』って言うのがテンプレえいっ!？」

あれ、鳩尾に裏拳が……っ！何故だ!？」

「何、すんだ、よ延珠……っ!？」

「レディーに重いとは、どういうつもりだ」

「……ああ、頭が回ってなかったから何言ったか覚えてなごふう!!」

に、一発目……っ!!

「抑えたから大丈夫であろう」

「そういう、レベル、の話じゃない、からな……っ!!」

アカン、吐く。

「……悠梨、後は、任せた……うええ……」

l o o s i d e 悠梨 l o o

蓮さんが道端で口から【自主規制】を吐いてるとても描写出来ないグロッキーな状態になつちやつたので交代。

「……あれ大丈夫なの？」

「あれなら日常茶飯事だ」

「……あ、そう……」

僕が見てないところでもやられてそうだよね（5話とか。メタア）。

「……漫才は終わりでいいかね？」

「あ、はいどうぞ。……やるなら、やりますよ？」

そう告げてスチエツキンを引き抜く。

「やれやれ……私は事を構えるつもりは余りないんだが……」

どこからか「どの口がそんなことを……うえつ」と聞こえてくるのを無視して影胤さんが銃を抜く。

「しかも2丁ですか……刺々しいですね」

『『スパンキング・ソドミー』と『サイケデリック・ゴスペル』という。威力は……試し
てみるかい？』

「よ」

「ちよつと、（ ）内が!!」

不本意過ぎる!!

「（ ）がどうかしたかい? ……それよりも、抜き差しならない状況になったがどうするかね?」

「……そりやもちろん」

「待て、悠梨」

戦おうとした僕に横合いから声がかかる。蓮さんが口元をぬぐいながら歩み寄ってきた。

「蓮さん生きてましたか。良かったです」

「勝手に殺すな。それと今は戦闘はやめろ。住宅街で戦うと無駄に被害が大きくなる」

「……あ、なるほど」

そうか、確かに周りは人がたくさんいる。被害を抑えないといけないのか。

向こうの世界では、俗にいう廃墟みたいな場所でいつも戦闘してたから、周りの被害とか考えること自体なかったからなあ……。

(次はちゃんと考えるようにしないと)

「ヒヒ、賢明な判断だ。私達は被害を気にしない分、君達は不利だからね」

「……悪党ですね」

影胤さんは小さく笑いを零すと、2丁とも拳銃をしまい、僕達に背を向ける。

「最初からそのつもりだ。では、ここら辺で失礼するでしょう。……とその前に」
首から上だけをこちらに向けてこちらに問う。

「最終確認だ。私達の仲間にならないかね？」

「断る」

「遠慮しときます」

「蓮太郎が行かないなら妾も行かぬ」

三人とも即答だった。

「……そうか。なら、君達には現実を見てもらうとしよう。明日、学校に行くのを楽しみにしているんだね。行くよ、小比奈」

それだけ言い残して、影胤さんは夜闇に溶けていった。

—————

「……ただいま」

誰もいない部屋に向かって声をかける。

あのあと、蓮さんに、僕が赤目だという事に気付かせてしまった、と謝罪された。

まあ、いつかバレることだっただろうし、大丈夫だ、と何回も告げて別れたが、

(…………この分だと明日も気にしてそうだなあ…………)

まあ、なるようになるか。

「()飯はいいや…………今日は風呂入って寝よ」

影胤さんの最後の言葉の意味も深く考えず、僕はさっさと眠りについた。

……翌日、あんなことになるとは露程も思わずに……。

18 (sub). 夢の中で1『極東支部』

2069年。極東支部。緋上悠梨、14歳。

—————

「こんにちはー」

「よう、緋上のガキ。運搬ご苦労さん」

「いえいえ。それよりもガキって……。僕14歳ですよ?」

「50越えてる俺からしたらガキだ」

「それ、一生ガキって言われ続けるやつじゃないですか……」

「言われたくなかったらまず身長伸ばすんだな」

「それ禁句ー!!!」

僕の反論に豪快に笑うおっさん(悪意込み)。くっそう……四捨五入すれば150cm
mいくのに!! (149.7cm)

ちなみに会話の相手はスタングレネード製造班の班長だ。僕の父さんの後任でもあ

る。

……え？父さんどうしたかって？ 3年くらい前に1人でちよつと外出して行って、そのままアラガミに襲われて帰らぬ人となった。

僕と母さんが残された……でも母さんも半年前に病気でぽっくり……。

……大丈夫、立ち直ってるから!!それにこのご時世、僕みたいに両親失った孤児とか珍しくないしね。

とりあえず（配給はあるが）食い扶持は稼がなきゃいけないから極東支部でバイトします。

「……とりあえず爆縮体とマグネシウム、ちゃんと届けましたよ」

「おう、お疲れさーん」

「んじや失礼します」

（さて、他は回復錠の素材と武器の素材か……どっちからいくか……）

「……ん？おお、悠梨じゃねえか。運搬中か？」

正面から声をかけられたので、運搬表から顔をあげる。

「あ、リンドウさん！どうもです。ちようど回復錠の素材運んでるところで」

「おー、精が出るなあ。お疲れさん」

この人は雨宮リンドウさん。この極東支部の第一部隊の隊長で、会話から分かる通り

きさくな人だ。なのだが……

「で、だ。お前さん、またあれ頼むわ」

「また逃げたんですか……」

サボリ癖があるのが玉に瑕。要は『報告書を部隊員に任せたから、そいつが追いかけなくても何も言うな』ということだ。

特に強力なアラガミが集まる極東支部において、討伐班とも呼ばれる第一部隊と言えば世界屈指の実力。その隊長となったら実力はかなりのもの………なのだろうけど、どうも支部内にいると軽口を叩いてばかりで、そんな様子が全く見てとれない。

「だってめんどくさいんだぜあれ……」

「仕事めんどくさがってどうするんですか」

「俺はアラガミ討伐することが仕事だってんだ。……んじゃ、後は頼んだわ」

「え、まだ僕は承諾してn……」

僕の返事を聞かずに「配給ビール配給ビール……」と呟いてリンドウさんはどこかに歩いて行った。

(……まあいいか)

もし探してる人いたら言っちゃえー。さて、回復錠から届けるとしよう。

割愛、配達終了。

最後は神機保管庫だ。

残りの資材の乗った車を押して、エレベーターまでいき、来るのを待つ。

すぐにエレベーターが来たが、そこには先客がいた。

「どうもー」

「……あ、ああ、ごめん！今降りるよ!!」

黄色いバンダナにお腹の出た上着を来た人（男）。あまり見たことがない人だ。そして寒そう。腕輪がついているので、ゴッドイーターだということが分かる。

何やら考え事をしてたようだ。

車を少しよけて、その人が降りやすいようにする。その後に乗ってドアを閉めようとしたら声をかけられた。

「なあ、一つ聞きたいことあるんだけどいい？」

「あ、はい。なんですか？」

「リンドウさん見てない？」

（……今回のリンドウさんの被害者はこの人か）

普段は死神とか言われるソーマさんとかに書類仕事を無理やり押し付けていたりするが、今回はこの人みたいだ。

まあ、さっきのことを言ってしまうって構わないだろう。

「ちよつと前、と言つても10分ぐらい前ですけど、スタングレネード工場のところを歩いてましたよ」

「なんでそんなところに……。とりあえずありがと!!」

そのまま走つていつてしまった。

せわしない人だなー。

「……続き続き」

これ以上気にしても仕方ない。エレベーターのボタンを押す。

止まつてドアが開くと、たくさんの神機が格納されている部屋が広がっている。神機保管庫だ。

「リツカさん、素材持つてきましたよー」

僕と似たような髪色を持つている女性が振り返る。彼女が楠リツカさんだ。技術・開発部に所属していて、神機の整備などを担当している。

「あ、悠梨君ありがとーちよつと持つてきてー」

言われた通り持つていく。

「んーとね、これがあそこで、これはそつちでこれが……」

言われた通りに素材を分配する。パシリじゃないよ。何時ものことだ。

「……よし、これで全部ーありがとねー」

「いえいえ。……あ、そうだ。リツカさん
「ん？」

さっきの人のことを聞いてみよう。

「全身黄色の服を着たゴッドイーターの人とすれ違つたんですけど、誰か分かります？」

「あー、多分コウタ君だね。藤木コウタ君」

ゴッドイーターの人ならリツカさんは絶対知っているだろうと思ひ聞いてみたが、
やっぱ知っていた。

「藤木コウタさん……新人？ 転属？」

「新人だよ。ユウ君と同期でアサルト使い」

「……じゃあこの間来たばかりなのに、もう書類押し付けられてるんだ……」

「あくそれか……ユウ君もやらされるのは時間の問題かな」

「……否定が出来ない」

「もうとつくに押し付けられてたりするんじゃない？」

「……だとしたらユウさんマジ乙です」

「……あれ、俺の話題？」

僕の背後、エレベーターの辺りから声。振り向くと、茶髪に碧眼、そして神機を持つた男の人が歩み寄ってきていた。

「ユウさんこんにちちはー」

「お疲れ様ー。訓練だっけね？」

「訓練だけのつもりだったけど、コンゴウ倒しなくなつたもんでちよつと沈黙の廃寺まで出向いてきたとこ」

「おおおう……」

この人、ホントに新人なのだろうか？

神薙ユウさん、世界初の第二世代型神機適合者（確定）で、極東支部の新人（多分）。着任初日にユウさんが「食堂どこだー!!」って迷子になつてたので、案内したのをきつかけに知り合いになつた。

因みにコンゴウといつたら、極東支部以外では「1人で倒せたら一人前」とか言われてた気が。ヤダこの人怖い。

「そんなありえない物を見る目で俺を見ないでくれ。……んで、俺の名前が出てたみたいだけど何の話？」

「悠梨君がコウタ君と初遭遇したらしくてき。ユウ君と同期だ、って話をね」

「あー、なるほど。コウタとね」

「どんな人なんですか？」

「ま、このご時世でよくこんな風に育つたもんだなー、つてくらいまつすぐ。馬鹿だけ

ど」

「ユウさんユウさん、発言がおっさん臭い上に最後で台無しです」

「だって講義中に寝てたりしてるしな」

あー……、と僕とリツカさんの声が被る。

「ちなみに何処でコウタを見たんだ？」

「リンドウさんの書類仕事押し付けられたみたいで、やり方知らないのか、焦って探してたのを見たんですよ」

「ユウ君も押し付けられないよう注意した方がいいよ」

「……ああ、あれね……」

ユウさんが遠い目をする。

「……まさかユウ君……」

「……うん、もうやらされた……」

「……ドンマイ（です）」

とりあえずユウさんに合掌。注意を促す前にやられてたとは。

「……ちよつと仕返しついでにリンドウさん探すの手伝ってくるわ」

ユウさんの発言が悪ふざけであることは分かっているので特に咎めない。

「あははっ、行ってらっしゃーい」

「ユウさん頑張ってるー」

「おー」

んじや、と背中越しに右手をあげて答え、ユウさんがエレベーターに乗ってその場を後にした。

「……楽しそうだなあ」

「まあ、変に気負ってるよりはいいんじゃない?」

ポツリと呟いた一言にリツカさんが反応してくれる。

「ずっと気を張ってるのは余計な疲れを生むだけだから。ああいう息抜きとかあった方がいいんだよ」

「……そうですね」

「人生は楽しいのが一番! ……でも、リンドウさんが息抜きとかの理由であんなことやってるとは思えないけどね」

「……そうですね」

全く同じ返答なのにどうしてここまで含まれた意味が違うのか

まあ、楽しいのが一番だ。

—————

「あ、いた!! リンドウさん!! さっきの書類なんすけど……」

「げ、何故ここが分かったし……あー、うん、それならこの間ユウにやらせたからユウに聞け。んじや任せた」

「あ、ちよ、リンドウさん!!? 話終わってないんすけど!!!」

「……コウタ!」

「あれ、ユウ? なんでここに?」

「悠梨とリツカからお前が書類仕事押し付けられて困ってるって聞いたんだよ」

「悠梨が誰かは分かんねえけど助かった!! さっきリンドウさんがユウに……」

「ん? 俺? 俺は何もしてねえぞ。それよりもリンドウさんは最強の味方が捕まえに行つたからもう問題ねえよ」

「まさか……」

「おう、そのまさか」

「……あらリンドウ、こんなところで会うなんて奇遇ね。どこへ行くのかしら?」

「……え、あの、サクヤさん? どうしてここにいらつしやるんで……?」

「ユウから事情を聞いたのよ。……後輩に仕事を押し付けるなんて、一体何をやってい
るのかしら……?」

「……ようしサクヤ、落ち着いて話をしあ、待て、その関節はそっちには曲がらな
ボキッ

「……あ、リンドウさんオワタ」

—————

うん、楽しいのが1番だ。

「じゃ、僕はそろそろ失礼しますね」

「あ、ちよつと待って！ ヒバリに届け物を頼みたいんだけどいいかな？」

「勿論大丈夫ですよー」

「良かった、ありがと!!」

「いえいえ」

うん、やつぱりツカさんの笑顔はいいなあ……。

さて、じゃあ最後にエントランスまで回りますか。

—————

「ヒバリさん！お届……け、物……で……す……」

思わず声が尻すぼみになった。エレベーターを降りてすぐ見えた光景が原因だ。リンドウさんがエントランスのソファーに正座させられて、サクヤさんに怒られていた。

念のためもう一度確認。

リンドウさんが、ロビー（階段の上。一般人は入れない）じゃなくて、エントランス（一般人立ち位置可）で、ソファーに正座させられて、サクヤさんに怒られていた。

「何これ、公開処刑？」

「ちよ、悠梨、黙ってこっちこい」

ユウさんから呼ばれたので、急いでヒバリに荷物を渡してしまおう。

一瞬リンドウさんがこつちを恨みがましい目で見てきたが……自業自得だと思ふのは僕だけかな？

しかもサクヤさんにすぐに気付かれて「よそ見しないの」とゴキユ、と音を立てて正面を向かされるおまけ付き。リンドウさんのご冥福をお祈りします。

つていうかヒバリさんも顔青ざめさせてるじゃん……こんなヒバリさん初めて見たよ。

サクツと渡してそそくさとユウさんの所に逃げ込む。藤木さんもいるよ。

「ユウさん、一体何があったんですか……？」

「さっきの書類のやつさ、サクヤさんに手伝ってもらおう思ったらあんなことに……」
「……あ、ああ……」

ちよつとだけ申し訳ない気持ちになった。そしてそんな僕に藤木さんが声をかけた。

「え、つと悠梨、だっけ？ ありがとな、さっきは助けてくれて」

「あ、藤木さん。いいですよあれくらい」

「ん？なんで俺の名前知ってるの？」

「さつきリツカさんとユウさんにきいたんですよ」

「あ、そつかなるほど。コウタでいいから！ よろしくな!!」

「分かりましたコウタさん！ こちらこそよろしくです！」

—————

「……いやー若いっていいねえ……」

「リンドウ、聞いているの？」

「はい、すみません……」

—————

「……………んあ？」

なんか変な所で目が覚めた…………。

「でも懐かしいなあ…………リンドウさんがいなくなる前だから、もう4年くらい前の話か…………」

随分と懐かしい夢を見たものだ。きつと影胤さんとの遭遇時に、向こうの世界と色々繋がる場所があったからに違いない。

「結局リンドウさんとかユウさんは極東に戻ってから会えなかったしね」

二人とも、クレイドルの任務で世界を飛び回ってた筈だ。いつかまた会える日が来るのだろうか。

「いや、絶対会いに行かないとね」

僕がゴッドイーターに選ばれた時に誓った約束、「いつか皆で一緒に戦おう」を果たすためにも…………!!

19. 突きつけられる現実

―――side 悠梨―――

いつも通り、ランチちゃんに見送られて奏と一緒に登校した。

「……あーなるほど。確かに悠梨の歳で赤目っていない、っていう考えも、確かに合ってるっちゃ合ってるね」

「うん。バレた時にそれで通せる……かも、くらいだけさ」

「まーっ逃げ道が出来たってのはいいことじゃん」

返事は返せなかった。

いいことなんだろうとは思う。でもその言い方だと、「僕と『呪われた子ども』達は全く別の生物だ」と主張しているみたいで……。

蓮さんの言葉を借りるなら、『彼女達は人間』じゃないと言っているみたい感じられてしまう。

「……ま、僕も化物なんだけど」

「ん？ なんか言った？」

あれ、どうやら言葉にしてたみたいだ。誤魔化しておこう。

「夢でさ、向こうの世界の仲間といた頃を見てさ、ちよつと懐かしくて」

「……そつか。早く戻る方法見つかるといいね。ボクも協力するからさ」

「……ありがとね、奏」

（……でもその時は、奏と別れる時でもあるよね……）

それはそれで寂しくない訳がない。一度でも仲良くなつたら、別れが辛くない理由はないわけで。でもまた向こうの仲間と会える、一緒に戦えるということは間違いなく嬉しいわけで。

……最近よく思う。どっちの世界が、僕の正しい居場所なんだろう、って。いやまあ、向こうが本当の世界だつてことは分かつてるけど……でもこの世界でも、人と繋がりを持つて生活してる訳で。

（……これは戻る時に難しい決断を迫られそう……）

「……り、悠梨！ 危ない!!」

「……はい？」

気付くと赤信号に突つ込もうとしていた。

「……うっわ危ない!!」

「それはこつちの台詞だよ!! どうしたの? 今日ボーツとし過ぎじゃない?」

「いや、そんなつもりはないけど……」

「傍から見てると凄く危なっかしいんだけど……どうする？　ボクから担任に休む、つて伝えとこうか？」

「あー……体調悪いわけじゃないし、大丈夫だよ」

「……無理だけはしないように、いいね？」

「……うん」

……ここで帰っていれば、というのは意味のない言葉だ。それは結局問題の先送りに過ぎないからね。

—————

いつも通り、遅刻ちよつと前に教室に滑り込む。

「おはよー」

「ん？　……よ、よお悠梨？」

……あれ、なんか違和感。

「どうしたの皆？　なんかあった」

「い、いやなんもねえよ」

「ほら、先生来ちまうから席つこうぜ」

そう言うとすぐに自分の席へ戻ってしまった。

「……なんだろ？」

「……さあ？」

まあ、気にしても仕方ない。席につかないと。

—————

そして昼休み。

「あーお腹空いた……」

さつさと弁当食べよ……

「本当ですかツ?!?!」

「つ!?!」

何事!?

突然蓮さんが大声と共に立ち上がった。クラスは前に木更さんが電話が来た時のように啞然として見ているが、今回は周囲の様子に気付いていない。

……というか、

(周りを見る余裕がない?)

表情が異常な程焦っているように感じる……とか思ってたら鞆持ってダツシユで教室を出て行つた。

(……後でどうしたのか聞いてみよ)

今気にしても仕方ないかな。そう考えて、いつものグループに移動する……のだが、「どしたの皆?」

やけにそわそわしてる。今日多くないかなそういう人?

「あ、いや、なんでも……よ、よし食うぞ!」

「……勿論そのつもりだけど?」

そう言つて席につくが、皆は食べようとしない。それどころか、何やらアイコンタクトを飛ばしあっている。

……まさか。

「今日はアイコンタクトで会話しなきゃいけない日だった!」

「」「」「違えよ!!」」「」

「なんだ違うのか……」

あつてると思つただけだなあ……。

「なんでこいつはいつも通りなんだ……」

「マジで聞くの？ 俺やだよ？」

「でももしそうだったらどうするのよ」

「いや、どうって言われてもな……」

「あーもう！ 分かった、俺が聞く!!」

何やら皆が小声で話しているのを見かねたのか、そう叫んで僕の隣にいる男子が立ち上がった。

「ん？ 何を？」

「悠梨、単刀直入に聞くぞ。嘘は答えんなよ。いいな？」

「あ、うん……」

なんだろう……嫌な予感が。

「お前さ………赤目って、マジか？」

「……ツ!?!」

ガタン!!

「奏!?! 大丈夫!?!」

「あ、うん……ビツクリし過ぎただけ……」

奏がひっくりかえって友達に心配されているようだけど、

(……………え、うん、バレたってことでおk?)

ぼくはその程度しか考えられてないです。

「あ、あれ……………どつからそんな噂が……………?」

「いや、なんか今朝来たらどこからともなくそんな話が流れてきてよ……………多分クラスの大半が聞いてるぜ? だよなあ?」

その言葉に頷く僕と奏以外の全員。……………人の口に戸は立てられぬ、とはよく言ったもんだなあ……………。

「……………んで、どうなんだ悠梨?」

「あ、えつと……………」

「悠梨、ちよつと来て!!」

「うわっ!?!」

どう答えようか悩んでた僕の腕を、奏が突然引つ張つて廊下に連れ出し、「見ないように!!」と告げて扉を閉じた。その時に悲鳴を押し殺したような声があがったけど……………大方、奏が僕に触れてガストレアウイルスに感染したとも思っただらう……………。

(……………つて以外と冷静だな僕……………)

「自分が以外と冷静だな、なんて驚いてる場合じゃないよ!!」

「……………奏、何でわかつたの……………?」

「顔に出てる!!」

あれー? そんな馬鹿な。

「つてそうじゃないよ……どうするの!?!」

「あー、うん、どうしようか……」

いや、どうするもこうするもないんだけど。ちゃんと話すしかないような気がする。

「つていうかどっからそんな話が出たんだろ……悠梨に心当たりはある?」

「心当たりは………あ」

困ったことに一つあった。

「あるの!?!」

「うん。昨日の影胤さんの発言だけ……」

—————

「君達には現実を見てもらおうとしよう。明日、学校に行くのを楽しみにしているんだね」

—————

このことを奏に告げる。

「影胤って敵のあの人だよな?……そっか、そんなことが……ってあれ、待って。さっき里見君が急いで教室を出て行ったよな?」

「うん、でてったけど……」

それがどうかしたのだろうか?

「……それで確か、里見君のイニシエーターは学校に通ってるんだよね……?」

「うん……あ!! 延珠ちゃんも僕と同じことになってるかもしれないってこと!! なんとかしないと……」

「ないとは言えない……」

「そんな!!」

延珠ちゃんが酷い目にあってるかもしれない!!そう思っただけですぐに駆け出そうとした僕の腕を、奏が掴んで引き止める。

「奏!?! なんて行かせてくれないの!?!」

「それはこっちのセリフだよ!! どうして里見君のイニシエーターを一番に助けようとしてるの!?!」

「どうして……延珠ちゃんに限らなくても、仲間を助けたいって思うのは普通でしょ。……じゃ、僕行くよ!?!」

そう言っただけで腕を振り払おうとするが、奏の手は離れない。……腕力どうなってるのさ

?

「待ってってば!! この状況でいなくなるのは一番まずいって分かってるでしょ!」

「分かってるけどそれどころじゃないよ!!」

「なんで!? 自分がどうなってもいいの!」

「僕はどうでもいい!! 早くしないと延珠ちゃんがツ……」

Wanna know why Wanna know your fantasy

y~♪

「蓮さんからだ!!」

「……このタイミングでシリアスブレイクとか、ボクもう……」

ついに奏が腕から手を話した。シリアルないと作者が持たないから……って何の話だこれ。

「蓮さん!!延珠ちゃんは!?!」

電話口から聞こえてきた蓮さんの声は、明らかに弱っていた。

『ああ……担任が早退させたって言ってた』

「そつちも『赤目』だって噂が……?」

『……延珠が『赤目』だって噂が突然立ち上ったらしくて、昼休みには嫌がらせが……つて、そっち『も』つて、まさかそっちもか!』

……あ、しまった。蓮さんに余計な不安を与えるつもりはなかったんだけど。

「ええ、まあ……まだこっちは直接的なものには発展してないですけど。……それよりも早く延珠ちゃんのところ!! 僕も行きますから……」

『なんでお前が来る必要があるんだよ。こっちは俺がなんとかする。……悪いな、そっち行けなくて』

「僕の心配はいいですから!! それよりなんで僕が行くのをとめるんですか!』」

『止めて当たり前だろ。余計な負担を背負わせるつもりはねえよ。……俺はこのまま延珠の様子見に帰る。……本当にすまん』

それだけ言つて、通話が途切れた。

「……来なくていい、つて言われた……なんでだろ……?」

呆然となる。仲間の危機に、『またも』自分が何も出来ない。……それが、悔しくて悔しくてたまらない。

でもそのことは、奏にも分からないみたいで。

「当たり前だよ!! 自分が辛い状況の時に人の心配するとか普通ありえないよッ」

「でも、僕も何かしなきゃ……」

「そつちは里見君が行くんでしょ？ 少しは信頼してあげなよ!!」

「……信頼、ね……」

……蓮さんのことを信頼しているかどうかと聞かれたら、勿論しているって胸を張って答えられる。そして、延珠ちゃんのことを一番分かっているのは蓮さんだ。これもある種の信頼だろう。

(……でも、それでも!!)

仲間が辛い思いをしてるんだと思うと……!!

そうだよ……あの時も、絶対無事に帰ってくるって、明るい笑顔で帰ってくるって信じこもうとしたんだよ……!!

けれど、けれど2人は……ッ!!

「……り!! 悠梨!?! どうしたの!?!」

「……あ、ごめん、ちよつと意識飛んでたかも」

どうやらけっこうな時間黙り込んでいたみたいだ。手のひらに爪が食い込むくらい拳に力を込めていたことに今更気付く。

「ずっと黙ってるから心配したよ……それで、本当にどうするの？ 皆待ってるよ？」

「……分かった、じゃあこっちのカタを早目につけて帰る」

「あ、ちよ、悠梨!？」

早く助けに行きたきや、早くこっちを解決すればいいだけだ。後ろから奏が止めようとしたが、無視して教室の扉をあける。その瞬間、教室中の視線が僕に集中した。

「……来たか。話がまとまったんなら、話してもらおうぞ」

「勿論。……だけどちよつと待ってね」

「まだ待つのか？」

「大丈夫、今度はすぐ」

そう告げて……両目のカラーコンタクトを外す。その動作で、もうばれてるだろうけど。

「……ご覧の通り、僕は『赤目』だよ」

「「……………」」

「化物!!」「お前、騙してたのか!!」

そう叫び出すクラスメイト。……予想の範囲内。心は想像以上に痛いけど。

しかし、非難するのを制する声。先ほど僕に赤目かどうか聞いてきた男子だ。

「待て!! まだ俺の話は終わってない。……悠梨、まだ聞きたいことが3つある。いい

な？」

「答えられる範囲でなら」

「……分かった。一つ目。何故隠してた？」

これは、セーフ。

「いらぬい混乱を産まないため、かな。騙すつもりじゃなかった、とかは言わないから安心して」

むしろこれ以外にはない。

「そうか。……二つ目。なんで目が赤い？」

これも、セーフ。

「生まれつき……ってのは『子供たち』と一緒になんだよね。元々だよ」

「元々か……。……最後だ。お前は『呪われた子供たち』なのか？」

これは……ある意味、アウトだ。

「僕は『子供たち』じゃない……って言いたいけど、それは違うね」

「悠梨!?!」

「奏、大丈夫だよ」

そう言っって軽く笑いかける。

「舐めてんのかお前!!」

『赤目』は早くいなくなつてよ!!」

「……やだなあ……僕の話はまだ終わつてないんだけど?」

「うるせえ!! 化物の話なんか聞くかよ!!」

「なんで普通溶け込んでるのよ!?!」

「まだ何も話してない……」

「両者一旦落ち着け!!」

その声にクラスが静寂に包まれる。

「まだ話してないことはある、つて言つたな? 話していいぞ」

「おい!!」

「いいから聞け!!」

その言葉にまた押し黙る。この男子にここまでのカリスマがあるとは思つてもいなかった。感謝をしながら持論を展開する。

「ありがとね。……『僕は『赤目』じゃありません。普通の人間です』……つて言つたら少しは収まるのかもね。……でも僕はこれ、嫌いなんだよね。なんで分かる?」

……しばらく待つが、冷静組からも答えがなかったのでもう一度口を開く。

「何故嫌いか……それは『赤目の子達を人間じゃないと認めることになる』からだよ」

『赤目』は全部バケモンだろうが!! 何が人間だ!?!」

ああ……大人でもそう言う人がいるから、高校生でもいてもおかしくないとは思ってたけど……いくらクラスメイトでも、流石に気に入らないなあ……。

「じゃあさ、その子達と触れ合ったことがある？」

「あるわけではないでしょ!! 触ると感染するのよ!!」

……これは、さつき悲鳴を押し殺した女子か。

「接触感染とか、空気感染はしないんですよ? そういう結果は出てるんだから」

確かそうだった……記憶が正しければ。

「それが確実って話はないのよ!!」

「じゃあ逆に絶対空気感染する、って話があるわけでもないじゃん?」

怒りに支配されてもいいのに、何故か心はどんどん覚めていく。つられて頭もどんどんクールダウンしていく。

『子供たち』は危害を加える、とはよく言われるが、そっちはどうなんだ!!」

それには一応持論がある。

「これは完全に僕の予測だけど。……結局『子供たち』を外周区に追いやってるのは『奪われた世代』? だよな? 彼女達から生きる術を奪っているのはその『奪われた世代』でしょ? 人間として扱わないで、それで問答無用で取り締まるってのは酷すぎると思うんだけどね」

逆に何故そう思わないのかが不思議なんだけども。……と、思っていたが、

「化物を人間として扱えつてのが無理な話だつて……」

ドゴン!!

冷えていたはずの頭が、たった一言で爆発した。

「何度言ったら分かるの? 彼女達は人間なんだ、つて」

思わず机に拳を叩きつけてしまった。直前に力を抜いて、机を叩き潰すことだけはなんとか避けたが。

「何を言おうと『呪われた子供たち』は人間。そこを認めない限り、僕は、話は平行線だと思っけど?」

「じゃあそれでいいからでてけ!!」

「そうよ!! 『赤目』なんて滅べばいいのよ!!」

「……でも悠梨君のいうことも何となく分かるかなあ……」

「正気かお前!」

「まあ……俺も確かに、『子供たち』を憎むのは違うかも、つて思うなあ……」

「あの『赤目』の化物によって家族が殺されたんだぞ!! 許すのか!」

「そう!! 『赤目』は全て消え去ればいいだけなの!!」

「……化物つて結局なんなんだろうな」

『赤目』全部!!』

「……ガストレアだけで、『子供たち』は違う?」

「俺、ちよつと差別主義者ってなんか間違ってたかなって思い始めたんだけど」

「ウイルスを持つてるのが近くにいるとか耐えられないわ!!」

「静粛に!!」

またクラスが静寂につつまれる。

「悠梨の意見にも一理ある、というか俺は差別主義者じゃないから、むしろお前には賛成だな」

「てめえ、裏切るのか!!」

「裏切るもなにも、この手のことで立場表明したことはないんだが。……だが、悠梨。せめて証拠みたいなものはないのか?」

「……証拠、ねえ……?」

そんなことを言われても、今すぐ用意出来るような物は……

『それならあるで!!』

……おや、未織さんの声が……。

「……何やってんですか会長?!?!?!」

その姿を認めた瞬間、クラスが一斉に突っ込んだ。……うん、皆が突っ込みたくなる

のも分かるよ。だって今、未織さんは……

「……なんでラベリングしてるんですか？」

何故か窓の外にロープでぶら下がっていた。

「階段降りるより早いやんか……よっ、とお」

空いてた窓から未織さんが教室に入る。もはや何も言うまい。

「……で、司馬会長？ 証拠があると聞いたが……」

驚愕からいち早く立ち直つたらしい進行役の男子が、未織さんに証拠について問う。

……正直、僕はその証拠に全く心当たりがないんだけども……。

「それなら……ほら、この通りや」

そう言つて懐から二枚の紙を取り出して、カリスマ持ち男子……もういいか。本名、新堂君に手渡す。そして僕に目配せ……合わせろ、ですか。

しばらくして、2枚の紙を見続けていた新堂君が驚いたと言わんばかりに目を見開いた。

「……これは……!!」

「悠梨君の血液を採取して検査した結果や。1枚はうちの会社の研究所からのやつ。もう1枚はあの室戸董医師に頼んだ奴や」

……董先生そんな仕事もしてたんだ、とか思う前に、僕そもそも血液を採取された記

憶すらないんですがね……。

「どうや!! これでも悠梨君が人間やないと言う……」

「「……誰?」」

「あら?」

未織さんの惚けた声。そこへ奏が冷静に指摘を入れる。

「会長、ボク達はガストレア関連で知ってると思いますけど、普通は知らないんじゃないんですかね……?」

うん、申し訳ないけど、僕も同意。あそこに引きこもってる人が有名人な訳がないと思う。

「……あ、ま、まあ、そうやね! ……でも1人くらい知つたらんのか?」

最初に妙などもりがあったが、僕はいないと思う……。

「あ、あの……私知ってます……」

「いた!」

奏と声がハモった。声をあげたのは、数学でクラス……どころか学年トップの女子だ。

「え、どうして知ってるの?」

「今まで解かれなかった数学の理論を次々と解いている人がいて……誰かと思って調べ

てみたらその室戸先生という人だったんですよ」

……あの、天才だったりするのかな？

「そうや！ 天才なんや!! ……これで、今その子が持つとる書類の信憑性はバツチリやろ？」

「……まあ俺はいいですけど……」

「信じられるかそんなもん!!」

「偽装つてこともあるかもしれないじゃない!!」

「……つとまあ、こんな意見が出るのは予想出来たことかと」

……新堂君、達観してるなあ……。

「そもそもなんで会長は悠梨の肩を持つんですかッ？」

今度は未織さんを批判する声まで出てきた。

「まっ……」

「悠梨君、黙つとき」

立ち上がるうとした僕の目の前で、扇子が開かれる。

「……友達を助けるのに、理由なんているん？ 当たり前のことやないか」

その言葉、一部のクラスメイトが、ハツとしたような顔をする。

「……まだ希望は残ってるみたいやね」

そう言つて不適に笑う未織さん。その姿は格好良く、凛々しくて……。
そしてその姿を見てる僕は……。

「……すいません未織さん。ありがとうございます。僕、行きますね」

「……帰るん？」

「ええ。……まだ半数以上は、僕がいることに反対でしょうからね」

僕に向けられる敵意を持った視線は、最初に比べれば幾分か減つたものの、それでもまだまだ多い。

(……しばらくは来ないほうがいいよね)

僕だつてこの視線の中いたくはないし。

「ま、そんなわけで……。奏もありがとね。……じゃあ、また」

それだけ言つて、誰の返事も聞かず、僕は教室から逃げるように駆け出した。

(……いや、実際に逃げたんだよ)

奏でもなく、新堂君でもなく、クラスメイトでもなく……。

……未織さんから。

守る側になると、仲間を絶対守るんだと、あの時誓つたはずなのに。

なのに結局僕は、1人じゃ何も出来なくて、守られて……。

……だからさっきの未織さんの姿を見た時に、格好良い、凛々しいと思うと同時に、……『悔しい』なんて感情が出てきたんだ。

あの器の大きさ、つまり人を受け入れる度量、そして何より守る為に必要な力を、彼女は用意していた。

僕の為に、だ。

(僕が皆を守る力に、なるって誓ったのに……ッ)

これじゃあ何も意味がない!!

あの時は2人を助けられず、今は延珠ちゃんを救えず、それどころか未織さんに助けてもらっている。

感謝の気持ちがないわけじゃない。むしろ多大にある。……でもそれを、黒い気持ち
が邪魔をする。

……ただひたすら、自分が惨めだった。

20. 力なき現状

l l l s i d e 悠梨 l l l

……とりあえず事務所に戻ってみたはいいものの……

「……蓮さんも延珠ちゃんもいない……」

見事にもぬけの殻だった。ふう、とため息を一つつくど、喉がひりついた。教室を飛び出してからここまでずっと走ってきたのだから当たり前か。台所に入って水を一口飲むついでに、汗だくの顔を洗う。少しだけさっぱりした。

「……とりあえず蓮さんに連絡してみようかな……」

闇雲に蓮さんや延珠ちゃんを探しに飛び出すのはまずいだろう。少し冷静になった今ならそう考えられる。事務所のソファアームに座ってポケットからスマホを取り出し、蓮さんへ電話をかける。

P r …

『延珠か!?!』

「つ……蓮さん、僕です」

ワンコールもしないうちに電話が繋がった。スマホを目の前においてあったんだらうか。

『ああ、悠梨か……』

「ごめんなさい、延珠ちゃんじゃなくて」

『いや、いい』

(……声がすごい焦ってるな……)

やっぱり延珠ちゃんは家にも戻ってない様だ。

「蓮さん、一つだけ。事務所にも延珠ちゃんはいないんで、こっちは来るのは無駄です」

『……そうか、分かった』

いい情報とは言えないけど、少しは探すのが楽になればなあ……という気持ちでなければの情報を伝える。

『……それで、そっちはどうなった？』

そりや気になるよなあ……誤魔化すのは無駄だろう。

「……まあとりあえず未織さんに助けられて逃げ帰り、つてとこですね」

『未織が来たのか……。……ホントに、いてやれなくて悪い』

「いえ。大丈夫ですよ。それに奏や新堂君を筆頭に分かってくれる人もいましたしね」

『……新堂って誰だ?』

「ちゃんとクラスメイトの名前覚えときましようよ……」

蓮さんのここは本当に心配なんだけど……とか考えられるくらいには落ち着いてきた。

「それで、延珠ちゃんは……」

途端、蓮さんの声が少し低くなる。

『ああ、分かっている。……とりあえず明日の朝までは延珠が帰ってくるかもしれないから家にいるつもりだ。来なかったら39区まで足を伸ばしてみる』

「39区?」

『……まあ、一応あいつの故郷だ』

「なるほど。ならいるかもしれないってことですね」

『可能性しかないけどな』

「……きつと、いますよ」

『……ああ、絶対連れ帰ってくる』

「お願いしますね。僕も今日は事務所にずっといるんで」

『夜にはちゃんと帰れよ』

「……………勿論ですよ」

『なんだ今の間。帰れよ』

「分かりましたよ……」

まあ、これくらいはさせてもらってもバチは当たらないだろう。

「じゃあまた」

『おう……ありがとな』

「いえいえ。お礼を言うのはこっちですよ。それでは」

そう告げて電話を切る。

「ふう……」

電話を切ると、思わずため息が漏れた。蓮さんと電話していた時は大丈夫そうだと
思ったが、思ったほど精神は回復していないみたいだ

(……少し、寝ようかな……)

このままじゃ夜までもたないかもしれない。そう僕は判断し、ソファで仮眠をとるこ
とにした

……起きたときに、少しでも状況が好転していることを願いながら。

バンツ!!

「——悠梨っ!!!」

「うわう!？」

唐突に僕を呼ぶ声がして目が覚めた。声の主は……

「……奏?」

奏が事務所の入り口に、息を切らせて立っていた。

「どうしたの、そんなに焦っ……」

「悠梨っ!!」

そして突然、僕に抱き付いてきた。

「え、ちよ、奏!？」

「ごめん、ごめんね悠梨……ボク、何にも出来なかった……!!」

「何にも出来なかった……って、ああ……」

どうやらさっきのことを言っているみたいだ。……でも、謝られてもなあ……。

「……別に、奏が悪いことはないでしょ?」

僕は本気でこう言っただけど、奏には違っただらしく、

「あるよ!!たくさん!!」

と反論されてしまった。

「えーそうかな……?」

「そうだよ！例えば……」

「あの、奏、ちよつとストツプ」

「何!？」

話の腰を折る形になってしまったが、無理やり言葉を介入させる。……正直、これ以上は耐えられない。

「……そろそろ離れてもらつてもいいかなあ……?」

「……………あ」

僕に勢いで抱き付いたままだ、というのを今の今まで失念していたといったような様子で奏が顔を少し赤くしつつか離れる。……まあ僕も少し顔が赤くなっているのは否定しないけどさ……。

コホンと一回咳払いしてから僕は言葉を紡ぐ。

「でね、奏。僕はホントに奏が何も悪いとは思ってないから。実際隠してたのは僕が悪いんだしね」

「それだつたらボクだつて共犯だよ!？」

「共犯、ねえ……」

すぐに言い返してきた奏に、思わず考え込んでしまう。何を言ったらいいものか……。

(まあ何が一番悪いって、僕がこの世界に来てしまったことだけろうけどね)
そんな大元を考えても仕方ないわけで。

「僕はホントに大丈夫だからさ」

「……ホントに？」

不安の色を瞳に宿してこちらを見つめてくる奏。いつものさばさばした奏らしくなくて、なんか変な気分になる。

「大丈夫だって。明日にはマンションに戻るからさ」

「……明日？ 今日には？」

「延珠ちゃんが帰ってくるかもしれないから待つてる、ってさつき蓮さんに言ったしね、このまま事務所にいるもりだよ」

その発言を聞いた途端、奏が盛大な溜息をついた。

「もう……ここまできてはまだ人の心配を……」

「いやだって僕なんてどうでもいいじゃん？」

「良くないよ!!」

またすぐに切り返されてしまった。

「いい!?!悠梨は自分のことどうでもいいかもしれないけど、ほかの人は心配してるんだからね!?!それを忘れないように!!分かった!?!」

「だから僕h」

「分・か・つ・た・ね!？」

「……はい」

勢いに押されて頷いてしまった。

「明日の夜には部屋に戻るんだね？」

「う、うん、そのつもり」

「……ちゃんと戻ってきてね？」

「……それは演技？」

「あ、ばれた？」

一瞬で不安の色を消し、ペロつと舌をだす奏。何時の間にか通常運転に戻っていた。

「それくらい分かるってば……」

「そっかそっか。んじゃちゃんと明日もどつてくること。あと学校の方は任せてよ？」

「分かったよ」

「了解、任された」

んじやまたねーと言って奏は事務所を出ていった。あれくらいの軽さのほうが奏らしくてやっぱいいと思う。

「ってなんか最後、学校がなんとか言ってたっけ……?」

……どちらにしろ行けないし、まあいいか。そう思いつつソファに腰を下ろした。

………そして、二日間、延珠ちゃんは事務所には帰ってこなかった。

約束通り、夜には一度マンションに戻った。

今の僕たちの状況と裏腹に、煌々と灯りの灯る廊下を抜け、二日ぶりに帰ってきた803号室……我が家の鍵を開ける。

少しは事務所の冷蔵庫にあったものを食べていたが、それだけで足りはしなないと思うのだが、如何せん食欲があまりわかない。夕飯も食べなくていいか、と思いつながら部屋の電気をつけ……そして机の上に置いてあるものを確認し、一瞬考えたのちにスマホを取り出し、とある番号をコール。

P r r r r r ……

『あ、戻ってきたの悠梨？』

「約束通り戻ってきたよ、奏。……そして、机の上にあるあれは？」

『悠梨の夕飯に決まってるよ?』

「それは見ればわかるけどさ。どうやって置きに來たのかなど」

『もちろん合鍵』

「完全に不法侵入だ!？」

いくらおいしそうな夕飯とはいえ、合鍵を持たれているというショックで魅力が半減しそうだ。

「捨てて、と言つても無駄なんだろうねえ……」

『その気はないよ!!』

「リボ○ズの真似もいいから……」

ちなみになぜ奏が置いて行つたか分かつたかというところ、食器に見覚えがありまくりだつたからである。

「お皿は明日にでも返すから」

『分かつたよー』

「……ありがとね、奏」

『どういたしましてだよ』

そこで電話は終わった。それとやっぱり奏の料理はおいしかった。

さらにその翌日。

久々に朝日を浴びながら起きた。時刻を確認するともう8時半……

「……あ、メールだ、つて蓮さん!？」

急いでメールを開く。

T O 悠梨

さつき延珠の単位んから連絡があって、延珠は今日学校にきてるといっていい。

だから、もう探さんくて大丈夫だ。

「……どんだけ急いで打ったんですか蓮さん」

誤字だらけだが、言いたいことは分かった。とりあえず今日はもう部屋にいることにしよう。下手に出て知り合いにばったり会うのもまずいしね。

とりあえず部屋にほこりが少したまっていたから、それをきれいにしてから奏に皿を返すことにする。

掃除をしている間にヘリが上空を二回ほど通ったようで、ローターの音が聞こえてきた。あれに乗って作戦ポイントまで行ってたなあと思わず考える。

(いや、それよりも早めに皿を返そう)

さくつと掃除を終わらたあと、昨日料理が盛り付けられていた皿を持って、奏の部屋のインターホンを鳴らす。すぐにランちゃんが出てきてくれた。

「お久しぶりです悠梨さん。あの、その、今回は……」

「あー、まあ大丈夫だからね？ 気にしないで？」

「あ、はい……奏呼んできます？」

「あ、お願いしていいかな？」

分かりましたと言ってランちゃんが奥に入っていった。

Wanna know why
 Wanna know your fantas
 y♪♪

「おっ？」

一応ポケットに突っこんでおいたスマホから着メロが流れだした。

「どうしました木更さん？」

珍しく木更さんからの着信だった。

『悠梨君ごめんね!! さつき例の感染源ガストレアが32区で発見されたの。そこで学費

はたいてへりを借りて里見君と延珠ちゃんをそこまで運んでもらうように頼んだのはいいのだけれども、悠梨君を連れていくよう頼むのを忘れちゃって……」

Oh……………」

「……………」えーと、僕も行った方がいいんですね？」

『蛭子影胤の件もあるし、人が多い方が何かといいとは思うのだけれど……………」いけそうか

し……』

「まあどうにかして行きますよー」

『ありがとう悠梨君！ホントにごめんね……………!!』

最後まで聞かず電話をすぐに切り、部屋に神機を取りに行こう……………」としたところで、後ろから肩を掴まれた。

「まあ悠梨、ボクの車に乗ってきなよ？」

「……………」奏の車？」

「……………」よかった、奏が運転するんじゃないかと……………」

「いやまだ18歳になってないからねボクも？」

というわけで僕と奏、そしてその他二名（運転手の人と助手席の人、どちらもA Eの戦闘員）が車に乗って32区に向かっていた。ちょうどA Eのほうにも感染源ガストレアが見つかつたという報告が入つたらしく、奏の便宜でちょうど出撃する車の一台のせてもらえた。

「まあ戦場についたらライバルということはお忘れなく」

「もちろん分かつてる。こつちだつて負けないよ」

いたずらつぽく笑う奏に負けじと言い返す。まあ蓮さんが先行してるし、そうそう負けはしないだろう。

「……奏様、つきました」

「あ、すいませんあ、ありがとうございました」

一応お礼を言つてから車を降りて、軽く体をほぐす。その脇で戦闘員の人たちは着々と戦闘準備を整えていく。一方ラフな格好のまま降りてきた奏に僕は声をかけた。

「ホントにありがとね奏。ここまで早く来れてホントにありがたいよ」

「ま。友達だもんそれくらいはね。……でもここからはさつき言つた通り……」

「わかつてる。ライバルだね。お互い気を付けて」

「うん！」

そう言つて奏と別れた。

(……さて、蓮さん達はどこにいるかな)

森の中を探すのは骨が折れそう……

ビュン!!

「うわ!?!」

目の前を黄色い物体が飛んでいった。いったい何事かと飛んでいった方を見ると

……

「あ、延珠ちゃん!!」

「!! 悠梨!?!」

よかった、蓮さんが見つけたとは聞いてたけど延珠ちゃんにまた会えて……

どすつ、つと延珠ちゃんが僕に抱き付いてくる、その赤い眼には大粒の涙が……

「——悠梨つ!! 蓮太郎、蓮太郎があつ……!!」

「……え」

21. 決意の刻

……最初に感じたのはわずかな振動。だが、目をちやんと開く気力はない。誰かが俺に向かつて怒鳴っているようだが、それもまともな耳に入っていない。

しばらくすると振動が止まり、僅かに開いた目の隙間から強い光が差し込んで来た。

ここはどこだろう？ そう思い、あたりを見渡そうと頑張つて目を開きながら首を動か
し、

「^つ!!? ???」

そこにあつた鏡に映る自分の姿を見て、声なき悲鳴を上げた。

切り落とされた右手右足、そして抉られた左目からとめどなく血を流す己の姿。思い出したかのように全身を激痛が苛んでくる。

ふと、頭上に誰かの気配。眼球だけを動かして見やると、そこには緑色の手術衣を着た女医が立っていた。その女医は右手に持った紙を眼前に持つてきて言った。

「はじめまして、里見蓮太郎君。そしてもうすぐさようなら。今私が右手に持っているものは死亡診断書だ。これに私が書き込めばその時点で君の存在は抹消され、すぐに燃

やされるだろう。だが」

そこで女医は一度言葉を切り、今度は左手に持った紙を突き付けてくる。

「こちらの紙は、君の生を取り戻すのが可能な紙だ。勿論アフターケアも私がしよう。ただ、こちらを選ぶと、とんでもなく辛い道が待っているだろう。もしかしたらここで死んだ方がよかつたと、君は思うかもしれない。それでも生き延びることは出来る。このどちらを選ぶのかは君の自由だ。左手で指差すだけで構わない」

さあ、と女医は続けた。

「どちらを選ぶ？ 楽に死ぬか、辛くとも生きるか。選ぶんだ、里見蓮太郎君」

残っていた左手をわずかに持ち上げる。それだけであり得ないほどの痛みが襲ってきた。

(このまま死ねば、楽になれる……ごめん、父さん母さん、先に……)

手が、女医の右手の方に動きかけ、

『死にたくなければ、生きろ、蓮太郎』

……気づけば、自分の手は女医の左手にある紙を指していた。

いい子だ、という女医の言葉を最後に意識が途切れた。

「……あら、起きたのね」

「……い……さあ、さ……?」

声が出ない? いや、喉がカラカラに渴いて掠れているだけか。

「あ、水出すわね」

そんな俺の気持ちを汲み取ったか、木更さんが水を手渡し、ついでにベッドを起こしてくれた。手渡された水をゆっくり飲んで、人心地つく。

「……悪い木更さん、ありがとうな」

「お礼なら延珠ちゃんと悠梨君に言いなさい。君をここまで連れてきたのは2人なんだから」

「ん?……!! そうか、俺は影胤と……」

思い……出した……!!

俺は未踏査領域に感染源ガストレアを倒しに生き、延珠が撃破したところまでは良かったものの、そこで影胤と小比奈が現れ、俺をボコボコにして川に落とし、

『『七星の遺産』を……あいつら……!!』

「まあ待ちなさい。七星の遺産関係については後で話してあげる。とりあえず悠梨君を呼ぶから。その間に延珠ちゃんと話していたら?」

「は？ 延珠？」

「……あ、悠梨君？ 里見君起きたわよ……」

（ガン無視かよ……）

木更さんが答えてくれそうにないので、仕方なく首だけを巡らせて周囲を見渡すも、特に延珠は見当たらない。むしろ真つ白な部屋が起き抜けの目には眩しいくらいだ……

もぞっ

「……は？」

……いる。何かが。布団の中に。間違いなくいる。

俺は今、上半身を起こされて腰から下だけを布団で覆っているわけだが……嫌な予感しかない。

掛け布団を勢いよくめくり上げる。……いた。延珠が俺の左足に抱き付いて眠っていた。

「つたく……おい、起きろ、延珠」

「ぬう？……つてあー！！！」

叫ぶやいなや飛びついてくる延珠。

「ちよ、声でけえし痛えし……！！」

俺に全力で抱き付くのはいいんだが（いやよくないけど）傷にこすれて痛い。

「延珠、頼む……傷に響くから離れてくれ……」

「知るかああああ!! 一日以上も目を覚まさなかつたのだぞ!! 心配するなという方が無理だ!!」

「……は？ そんなに？」

想像以上に時間が経っていたに驚く。焦らないわけがない。

「な、なあ、木更さん……俺どんぐらい寝てたんだ……？」

「だいたい1日と3時間くらいかしら。あ、悠梨君もすぐ来るって……」

「蓮さん大丈夫ですか!？」

「「早っ!?!」」

木更さんが電話をしまった直後に病室のドアが開いて、悠梨が飛び込んできた。

「何でそんなに早いのか……? しかもほとんど息切れしていないみたいだし」

「偶然近くにいたのと身体能力全開で来たからじゃないですか?」

「……そうか、ありがとよ」

この際、誰かに見られたんじゃないかとかそういう疑問は置いておこう。

「……ありがとな2人とも、助けてくれて」

「気にしないで下さいよ、僕はもつと助けてもらってるんですし」

「妾ももう大丈夫だ。だが……」

バン×
!!2

「いつてえ!?!」「痛い!?!」

延珠の手刀が俺と悠梨の頭に振り下ろされた。

「2人に罰は与えておくぞ」

「おい、怪我人なんだから手加減しろよ……!!」

「僕なんかしたつけ……?」

「しなければ罰は与えないぞ。それに、罰なのだから痛くしたに決まっている」

「罰って……」

「蓮太郎は妾に一人で逃げさせたこと、悠梨は何も考えず川に飛び込んだこと……その

罰だ」

「いや、でもさ……」

「ちよつと待て」

記憶が正しければ、あの日は雨が降っていて川は増水していたはずだ。

「お前、あの川に飛び込んだのか……?」

「蓮さんが流された、つて思ったらもうそれしか頭になかったです、はい」

「……アホか。お前も流されたら元も子もないだろうが」

こいつは人の心配はしすぎほどしてるのに、自分のことは全く顧みないんだよなあ……。

「……いいか？ お前が死んだら悲しむ奴がいる、つてこと忘れんなよ？ いいな？」

「……それ、奏にも言われましたよ……」

そう言つて苦笑いする悠梨。

「僕だつて自分のことを考えてないわけじゃないですよ？ ただ人が傷つく、いなくなるよりは自分が傷ついたりした方がマシだと思つてるだけで……」

「ドアホ」

悠梨の額に軽くデコピンをお見舞いする。

「痛っ!？ 何するんですかっ？」

「いいか？ もつと自分のことも考えろ。お前は自己犠牲の気持ちが強すぎる。何がお前をそこまで急ぎ立ててるのか分からねえが、そもそも死んだら元も子もねえよ。もうちつと自分のことも考えろ、いいな？」

「……分かりましたよ、二人に言われちゃ……」

不満がありそうな表情だが、一応納得はしてくれたみたいだ。この際言質が取れば何でもいい。

「……さて、そろそろいいかしらね？ 里見君に情報を話したいのだけれど」

「あ、了解です」

返事をした悠梨がベッドから離れたのを確認して、木更さんが話し始める

「聖天使側が情報をよこしたわ。プロモーター蛭子影胤。彼の出す斥力フィールドは対戦車ライフルの銃弾をはじくらしいわ。イニシエーターは蛭子小比奈。モデル・マンティス、つまりカマキリの因子を持っていて、ある程度以上の刃渡りのある刀剣を持たせたら敵はいないと言われているそうよ。そして、IP序列は元134位」

「134位!？」

道理でむちやくちやな強さのはずだ。今更ながら、よく命があつたもんだと思う。

「……………つて元? 今は?」

「問題行動……………まあ殺人が多すぎて、今はライセンスを停止されているらしいわ」

「なんつーやつだ……………」

民警同士のいざこざなんてものは日常茶飯事だし、それで殺し合いに発展することだつてまもあるのが実情だ。その度に民警ライセンスを取り上げていたら、すぐに民警はいなくなってしまう。なので、相当数の犯罪を犯さない限り、ライセンスを取り上げられることはないはずだ。

……………だが、現実問題、影胤はライセンスを取り上げられているという。つまり、奴は超一級の危険人物ということだ。

「話を続けるわね。今あの二人は、未踏査領域に逃げて、ステージVを召喚する準備に入っていると予想される。そこで、政府主導での大規模な作戦が予定されているの」

「大規模な作戦、ねえ……それは俺も参加するのか？」

「当たり前じゃない」

「あ、蓮さん、僕も行きますよ」

「……そうか、んじやまあ俺が行かないわけにはいかないか」

まあ使える戦力は一部を残して総投入となったんだろうな。それか悠梨が自分から志願したか。

と、その時。

くく♪

「『亡き王女のパヴァーヌ』……」

つまり木更さんの携帯の着信音だ。

「『亡き王女のためのセプテット』じゃないんですか？」

「逆になんだその曲？」

「あら？……何かしらこの電話番号？ まあ一応出てみましょうか……」

「え、ちよ、アンタ……」

「はい、もしも……」

止めるも無駄に終わった……と思つたら二言三言話すと、すぐに俺に携帯を渡してきた。疑問に思いながら電話を代わる。

『里見さん、私です』

「……人違いじゃねえの？ 俺とアンタは知り合いじゃねえだろ」

『いいえ、貴方であつています。天童民間警備会社所属の民警、里見蓮太郎さん』

「……で、聖天使様が今更一介の民警に何の用だ？」

延珠と悠梨が驚いた顔でこちらを見てくるので、黙つてろとジエスチャーをして通話に意識を戻す。

『間もなく、蛭子影胤追撃作戦が開始されます。多数の民警が参加する、東京エリア始まって以来の大作戦となります。病み上がりで申し訳ありませんが、私は、貴方にこの作戦に参加してもらいたいと考えています』

「……どうして俺に？」

『それは、貴方が一番分かっているはずです。蛭子影胤を止める力を持つのは、貴方しかいませんから』

「俺だけ、ねえ……」

馬鹿馬鹿しい、そう俺は吐き捨てた。だいたいこの件自体、お上の隠ぺい体質が招いたものとも言える。必要な対策も打たず、不祥事を隠し続けてきたツゲがこのような形

になって表れたただけだ。その尻拭いをさせられるのが俺達一般人とかどう考えてもおかしい。

「……というわけで俺は参加したくないんだが、そしたらどうなるよ?」

『東京エリアは滅びますね』

「簡単に言うなアンタ。仮にも元首だろうが」

『貴方にはどうでもいいことかもしれないので』

いや住むとこなくなるから一概にはどうでもいいとも言えないが。

『それよりも、こういった方が確実に効果的ですから』

そして、そのあとに続く言葉は、簡単に予想ができる。

『貴方の友人が、大切な人が東京エリアの道連れとなって死にます』

「……やっぱな。そう来ると思ったよチクシヨウ」

分かり切ってたことだ。これは依頼の体をとった命令に他ならない。人質を取られているようなものだ。断れるわけがない。

「……いろいろ言ったが、元々参加はするつもりだ。こつちにはカタをつけたい因縁もあるしな」

『……そうですが、ありが——』

「但し、だ」

聖天使様の言葉を遮る。これだけはちやんと言っておきたい。

「俺は、自分の大切な仲間を守るために闘わせてもらう。決してアンタ達のためじゃない、ってことだけ覚えておけ」

『それで構いません。あなたが守りたいものを守ることは、すなわち東京エリアを守ることに繋がりますから。……では里見さん、ご武運を——』

「あ、待て」

『はい？ 何ですか？』

よかった、まだ繋がっていた。

「もう一つ、アンタに言っておきたいことがある」

『……聞きましょう、どうぞ言ってください』

「緋上悠梨——この名前を覚えておけ」

「え、蓮さん？ なんで僕の名前を？」

『……何かしらの意味はあるのですよね？』

「ああ、そのうち否が応でも聞く時が来るだろうよ」

『……では、覚えておきましょう。やらなければならないことがあるので、そろそろ失礼いたします』

「え、あの——……？」

そう言つて聖天使は電話を切つた。スマホを木更さんに返してベッドに身を預ける

「ちよつと里見君。仮にも相手は国家元首よ？ 態度どうにかならなかつたの？」

「いちいちんなもん気にしてられつかよ。それに、俺は俺の目的のために闘うことに変わりはないんだしな」

「本当にぶれないわね。……勝てるの？」

突然木更さんが不安げな表情になつて聞いてくるので、思わず胸が高鳴つた。

「勝てるか、じゃないな。……勝たなきゃ駄目なんだよ。そうしないと目的は果たせねえ」

「死ぬわよ？」

「覚悟してる。何もしないで死ぬよりはよっぽどいい」

「全くもう……頑固なんだから。延珠ちゃんと悠梨君は？」

「妾は蓮太郎が行くなら行くぞ!!」

「僕は最初から行くつもりでしたから……。それになんか名前出されちゃつたし、行かないわけにもかかないですし。それに、今更止めても無駄ですよ木更さん？」

決まっていると強く示したいのか、二人とも食い気味に答えた。

「馬鹿ばつかね、死に行くなんて……」

「分かつてても、やらなきゃならないことがある——」

「……誰も死にませんよ。僕が、絶対に殺させません……!!!」

……俺の言葉に重なった悠梨のその言葉には、とても強い意志を感じた。

「……ええ、そうね。ごめんなさい、弱気なこと言つて。それじゃ、私も気になることがあるし、それを調べてみるわね」

そこで木更さんは表情を引き締め直し、続けた。

「ここからは社長命令です！ 蛭子影胤、小比奈ペアを倒し、ステージVの召喚を阻止、そして、3人揃つて無事に帰つて来なさい、以上!!」

「了解!!」

俺と延珠、悠梨の声がきれいに重なつた。

—— side 聖天使 ——

……里見蓮太郎が参加するということは確定した。これで自分が東京エリアを守るために打てる手は全て打つたはず。そう言い聞かせる、それでもないとやっていられない。

「失礼いたします。……聖天使様、全員お揃いになりました。そろそろお願いいたします。」

「分かりました。今向かいます」

SPが近づいてきて、JNSC（日本国家安全保障会議）の全メンバーがそろったことを告げた。……あの計器だらけの狭い作戦会議室が、自分の死に場所になるかもしれない。覚悟はどうに決めている。東京エリアとともに、自分は消えるのだ。

椅子から立ち上がり、……ふと、電話の最後に里見蓮太郎が言っていたことが気にかかった。とりあえず自分の秘書官である天童菊之丞に聞いてみることにする。

「菊之丞さん。緋上悠梨、という名前に心当たりはありますか？」

「緋上……？ 聞いたこともありませんな。蓮太郎が何か変なことでも？」

「いえ、そういうわけでは」

失礼しました、とだけ告げ、顔を戻す。菊之丞が里見蓮太郎の利用にあまり賛成していないのは知っているから、あまり彼に関係した話をしないほうがいいだろう。

それに、だ。菊之丞が知らないということは、緋上悠梨なる人物は天童の関係者ではないだろうし、政治家でもないはずだ。そして、民警の高位序列者にも、自分の知っている範囲ではそのような名前はなかったはずだ。

（……彼が、緋上悠梨が、何をするとこのうのでしよう……東京エリアを守る力になつてく

ればよいのですが……
(

2.2. 作戦かい……し……？

— side 悠梨 —

ババババババ……

(ああ、なんかすでに懐かしいなこの感じ……)

夜間とはいえ、晴れているので窓から星はきれいに見える。だが、眼下には光一つ見
辺りはしない。当然だ。今、僕達はヘリに乗って未踏査領域の上空を飛んでいるから。

ヘリコプターは、僕達ゴッドイーターにとつても、なじみ深い乗り物の一つだ。移動
時間においても車に勝るだろうし、飛行機と違って着陸に土地をそんなに必要としな
い。騒音を考えなければ、もつとも利便性の高い乗り物なんじゃないかとさえ僕は思っ
ていたりする。

それに乗っている間、ブラッドのみんなとたわいない雑談をしたり、任務の内容を話
し合ったりと、何かと思いい深い場所でもある。誰かがそうしようと言ったわけでもな
く、自然とそうするような感じになって……

(……いや、作戦のほうはシエルが来たころに始めたんだっけ？ しかも強制で……)

ま、まあ思い出はきれいなまま残しておくでしょう、うん。

そんなわけで（どういうわけだ）今回も軽い気持ちで蓮さんに話しかけてみる。

「ねえ、蓮s……」

「ああ!! 前に見た映画で撃墜されていたヘリだな!!」

「おいコラ延珠!! 余計なこと言うな!!」

あーつと、やつぱり顔を逸らしておいたよさそうだ。逸らす直前にパイロットの人が嫌そうな顔でこつちを振り向くのが見えてしまったけど。……え？ 逸らした理由？ 話すのを回避するためだよ？ それ以外に他意はないよ？ ないっいたらないんだよ？

……笑いをこらえたりしてないからね？

「で、だ。これのどこが改良されているのだ？」

「お前へり好きだな……。確かローターが云々……」

しばらく蓮さんのヘリに関するうんちく話を聞き続け……。ふと、延珠ちゃんがなんでこんなことを聞いているのか気になった。顔をわずかにあげ、延珠ちゃんの方を見て、（……なるほどね）

緊張。それが延珠ちゃんの顔から見て取れた。よくよく考えてみなくてもその理由はすぐに分かる。彼女はまだ10歳の子供なんだ。それが東京エリアの滅亡とかそう

いう話に巻き込まれているんだから。なんでこんな小さい子たちを戦わせて、大人たちは裏でふんぞり返っていて……

(……嫌な奴思い出した……)

誰とは言わないけどさ。あのクソ局長め。態度と体だけはデカいんだから。

……話が逸れたけど、何が言いたいかつていうと、緊張するのも仕方ない、つてこと。緊張をほぐすためになんかできるか……

「……蓮太郎蓮太郎！ アレはなんだ？」

「アレ？ ……ああ、天の梯子か」

「天の梯子？」

なんとなく心をくすぐられるワードに思わず反応してしまった。

「ああ。あれはな——」

以下、蓮さんの説明。

ガストレア大戦末期に作られた線形超電磁波投射装置——俗称レールガン・モジュール。完成したはいいものの、ガストレア侵攻によって放棄を余儀なくされ、一度も使われることなく終戦を迎えた無念の兵器。

「……これが通称『天の梯子』の簡単な説明だな。分かったか？」

「何所でそんなこと知ったのだ？」

「結構前に董先生が気まぐれに教えてくれたんだよ。人類の切り札になり得た『死体』だつてな」

「し、死体なんですかねあれ……?」

「さあな……10年近く放置されてるわけだから『使えなさそう』、つて意味じゃ死体なんじゃねえか?」

「うわー勿体ない……レールガンとかロマンの塊なのに……」

思わず落ち込む。それを見て延珠ちゃんが苦笑する。その後、

「いいタイミングです。つきましたよ」

パイロットの人がそう言つて、降下体制に入る。

……あ、僕の出る幕がなかった。

積まれていた各自の武器を下ろすと、任務を終えたへりは僕たちを置いて高く飛んでいった。蓮さんの指示で、ガストレアに気づかれにくくするためにライトはつけてない。未だ闇に慣れない目では、目の前の森の中もはつきりと見ることも叶わない。……だけでも感じる、この気持ち悪さは、蓮さんを助けた日に降っていた大雨の残りの湿気

だった。まあ僕も同意だけどね……。

「悠梨はたぶん分かってるよな? ……いいか延珠? 今のは閃光手榴弾が爆発した音だ。強烈な閃光と爆風で相手の視界を奪いダメージを与えるものなんだけどな。まあさっきの通りすさまじい騒音もするわけだ。これが何を意味するか分かるか?」

「……???'」

延珠ちゃんが首をかしげると、蓮さんは延珠ちゃんに見せつけるかのようにホルスターから銃を抜き、

「答えは、『森が起きる。』」

先ほど進もうとしていた道に向かいバラニウム弾を一発放った。

「ギイツ!?!」

情けない悲鳴を一つ上げて、ステージIと思われるガストレアが撃ち抜かれ、絶命していた。

「森が起きる、なんてまた言い得て妙ですねえ。どこのペアだ分からないですけど、正気の人間がやることじゃないです」

「ああ、それに今ので森中のガストレアが覚醒しちまっただろうな。……くそつ、隠密行動の予定がパーだ……!! 今頃手榴弾使ったペアはやられて……あ、悠梨!?!」

やられて、という言葉聞いた瞬間、僕の体は勝手に走り出していた。なぜすぐそこ

に思考が思い至らなかつたのか。

(助けないと……!!)

ただその一心で暗闇に包まれている森に向かって走り出す。

「あんの馬鹿……！延珠、行くぞ!! 悠梨を見失うな!!」

「わ、分かつた!!」

後ろから蓮さんと延珠ちゃんもついてきているようだ。だけど、

(ごめんなさい、蓮さん……先に προκαせてもらいます!!)

全速力で走り抜ける。間に合わなかつたなんてことにはしたくない。

キャ……

「っ!!」

横合いから飛び出してきたガストレアに対し、ガルドラをふるい絶命させる。直後に真正面から先ほどの物より大きい個体が迫ってくる。

「……邪魔っ!!」

それに対して逆に間合いを詰め、ガストレアの意表を突いたところで頭上から全力で刀身を敵にめがけて叩きつける。見事なミンチが完成した。

(こんなのに構つてられない……)

肉片を踏みつけさらに暗い道を進み……

(ガサッ)

後ろ、と思つた瞬間にパリングアップを放てる姿勢になつた。案の定蜘蛛型のガス
トレアが木の上から降つてきたところを大甲で受け止め、そのままガルドラを下段から
上段に向かつてふるい、上空に撥ね飛ばす。と、

「ッ!? シイツ!!」

そこへ延珠ちゃんがあつこんできてガストレアを彼方へと蹴り飛ばした。さすがの
反応速度だと改めて思う。

「ナイス延珠ちゃん!……じゃ、行くね!!」

「じゃ!!、じゃない!!」

いい笑顔で、サムズアップして逃げようとしたのに失敗した。仕方なく立ち止まる。

「延珠ちゃん、ごめん、急いでるんだけど……」

「悠梨がしたいことは分かっている!! 手榴弾を爆発させたペアを助けに行こうとして
いるのだろうか!?!」

「うん、そうだよ。だから急がないと……」

「待てと言っている!!」

「だから急いでるんだって言って……!!」

走り出そうとした足を下ろし、再び延珠ちゃんに向き直り、

——延珠ちゃんのパンチが胴体に突き刺さった。

「げふっ」

能力を開放した彼女の一撃には流石に耐えられず、膝をつく。

「え、延珠ちゃん……なん、で……？」

「悠梨が暴走しようとするからだ!!」

暴走？ そんなことを言われる筋合いは一切ない。僕はただ助けられる人を助けようとしているだけだというのに。……というかこれを言っただけだからダメなのか？

「助けられる人は助けなきゃ——」

「……ああもう、落ち着け悠梨。いかにお前が強いといっても、先走らせるわけにはいかねえんだよ」

僕の言葉を遮るように発言しつつ、蓮さんも追いついてくる。何か都合の悪いことでも言ったかと思いを巡らせるが……特に思い当たる節はない。

「悠梨……すべての人を助けるのは、無理だ……」

「!!」

「……延珠……」

見ると、俯き、何かをこらえるように両手を握りしめた延珠ちゃんがいた。

「妾は……顔見知りすら助けられない……だから、全部の人を助けられるなんてもつと無理なのだ……だから、今は行くな悠梨!! お主までいなくなつてほしくはない!!」

「……だ、だとしても僕は……!!」

「……悪い、悠梨。今は延珠を立ててやってくれ」

延珠ちゃんの、あまりの迫力に思わず言葉がつかまる。そしてそこにかぶせられた蓮さんの沈んだ言葉で、ついに僕は先行を断念するしかなかった。

23. 森林の戦闘

— side 蓮太郎 —

「蓮さん……延珠ちゃん、なんかあったんですか？」

その後、「妾が先頭で行く!!」と延珠が頑として譲らなかつたため、仕方なく先頭を任せて、俺と悠梨はそれぞれ左右と後方を警戒して進んでいる（間違ひなく悠梨が先走らないようにするためだろう）。その間に、延珠に聞こえないであろう程度の声量で悠梨が問いかけてきた。

「まあ、ちよつとな……自分が助けられなかつた奴がいたからだろうな……」

影胤と遭遇する数日前だったか。俺と延珠で買い物に出た際、『呪われた子供たち』の一人が盗みを働き、逃けている場面に遭遇してしまった。しかもその『子供たち』は延珠と顔見知りだったらしく、延珠に助けを求めかけたのだが、俺がその手を振り払い、警察が問答無用で『子供たち』を連行した後延珠にキレられた……ということをかいつまんで悠梨に話した。

「だもんでな、ちようどさつきのお前とダブるところがあったんだらうよ」

「なるほど、そこは延珠ちゃんに同情しますね」

言うと思ったよ、と心の中で悪態をつく。だが悠梨の言葉はここで止まらなかった。「でも延珠ちゃんが今普通に蓮さんと接してる、ってことは……………」

「黙秘権を行使する。…………その『分かってますよ』的な顔はやめろ…………!!」

うぜえ…………!!

…………まあ結局、俺も人のことはあんま言えないってことだ。何せあの後、警察に連れていかれて瀕死の重傷を負った『子供たち』を助けてしまったのから。俺はあの場で『子供たち』の手を振り払ったのは、延珠も「同じだ」とバレないようにするためにも必要だったし、なにより盗みをしたこと自体は問題であるから、間違いではなかったと今でも思っている。思ってはいるが…………

(ちっ、甘い俺も…………)

延珠の求める「正義の味方」であるつもりは毛頭ないのだが。

「蓮太郎、悠梨。あれ」

「あん?」

そんなことを考えていると、不意に延珠から声がかけられた。…………見ると、少し先に首の長い、俺たちに背を向けるように佇む、巨大なガストレアがいた。明らかにステージⅢⅣだ。いったい何種類混じっているのか想像がつかない。特徴から推測すると

すれば、だ。

「首が長い……あれはキリンか？」

「なんかキリンと言われると変な愛嬌が出てくるな……ほかに首が長い動物もいないし、多分キリンだろうけど……ん？」

そこで思い出す。キリンの首の可動範囲はどれぐらいであったかと。……狭くもないが、真後ろまでは見えなかったはずだ。ならば、気付かれないように離れるのが得策だろう。

「……延珠、悠梨、いいか、静かに……」

引くぞ、そう言いかけた瞬間。

ガストレアの首がグリーン！と180度曲がり、こちらを向いた。

「嘘お!!??」

あの首もどきはキリンじゃなかった。たぶんアレ蛇か何かには違いない。……つてそんなことを考えてる場合じゃねえ!!

「おい、逃げるぞ!!」

いち早くフリーズから復活した俺の声に押され、二人も駆け出す、……が。

「ちっ、無駄に早い……!!」

あんな巨体のくせして、無駄にスピードが出ていて、うっとうしいこと極まりない。だがこのままでは追いつかれる。

☒(どうする……!!)

「……さん、蓮さん？」

「ふほう!!」

思わずバランスを崩してすっ転びかけた。

「おい悠梨!! 脇腹つつくんじゃねえ!!」

「だって蓮さん反応してくれないんですもん。……で、あれって倒しちやってもいいんですか？」

「へ?……っあ、ああ、でも今それをどうするか考えてるところで……」

「あ、じゃあ僕に策があるんですけど」

「……悠梨、お前、策とか立てられたのか」

「それぐらいやりますよ!! 僕が隊長だつてこと忘れてません!!」

思わず目を逸らすと本気で心外そうな顔をされた。とりあえず突っ込んでく猪突猛進タイプだと思つてたのに、意外な一面もあるもんだ。

「悠梨!! さっさと作戦を話せ!! もうすぐ後ろまで来てるのだぞ!!」

「げっ!？」

一応しゃべりながらも逃げてはいたのだが、気付いたらかなり近くまで接近されていた。悠梨が焦ったように作戦を伝える。

「すいませんが二人とも、5秒でいいので囿になってください!!」

「それだけでいいの!?」

「あともう一つ! 僕が合図をしたら、僕の後ろに飛びのいてください!! だいたい5秒くらい!」

「了解!」

そして、俺と延珠がそこでブレーキをかけ、俺は腰のXD拳銃をドロ―。延珠も態勢を低く構える。悠梨は、ちょうど目の前にあった木の根を飛び越し、俺たちの10mほど後ろで停止した。

—————
作戦開始。

発砲。ガストレアの足に着弾。ガストレアが憎悪の目を俺に向け、長い首を伸ばし、捕食しようと向かってくる。

俺と首の間に延珠が右から飛び込み、勢いのままにガストレアの顎を蹴り飛ばす。

4 —

のけぞるガストレアだが、長い首を戻すスイングのような動作で延珠をブツ飛ばそうとしてくる。

3 —

延珠がガストレアの攻撃を飛びあがって回避。続けて、俺が振り切った顔を狙って射撃、4発撃って2発命中。

2 —

そのまま俺がガストレアの左に、延珠が着地後右に向かって飛び込み。

1 —

から空きの横つ腹に銃弾と蹴りによる一撃をそれぞれ叩き込む。

— 0! —

「OKです!!」

声が聞こえた直後、全力後退し、悠梨の後ろに退避。その悠梨は武器である神機は剣状態になっており、それを肩に担ぐようにして力を溜めている、ように見えた。更に

(なんだ……?)

その刀身には赤黒いオーラがまとわりついており、飛んでもない威力を秘めてるのだ

と主張しているかのようだ。そして、

「——せえいつ!!」

悠梨はオーラをまとった大剣を、突っこんできたガストレアに向けそのまま振り下ろした。ガストレアは、今の今まで悠梨に気付いていなかったのか勢いを殺すことはかなわず、悠梨の振り下ろした大剣に首からしっぽの先までを真つ二つにされ、周囲の木々を巻き込みながら倒れ、絶命した。

「……ふう……。すいません、わざわざ囿になってもらって……」

「いや、今の威力見れば文句なんてないけどよ。どうせチャージが必要な攻撃だったりするんだろ?」

「その通りです。バスターの刀身につく特殊攻撃で『チャージクラッシュ』って言います。オラクルを刀身にまとわせて、一撃で叩ききるための特殊攻撃ですね」

「必殺技的なのか……。神機ってホント万能だな」

「……。……ある意味生体兵器ですからね、柔軟性は高いですよ」

「妾、もつと神機が欲しくなったぞ」

「使えないだろって……」

「延珠ちゃんは機動性に物を言うタイプだから、逆に神機は邪魔じゃないかな?」

「かつこいいではないか!!」

苦笑いを返す悠梨だが、その表情はどこか暗いように俺の目には映った。

— side 悠梨 —

(ブラッドアーツが使えない……)

転生してきた直後から、いろいろな戦闘モーションをしてきているけど、「……そう言えればブラッドアーツ使えないな？」と先日ふと気づいてしまった。

作者へ一応ブラッドアーツについて説明を。

第三世代神機使い「ブラッド」の「血の力」の発現により使用可能になる特殊な技で、オラクルの力で攻撃が強化される。通常攻撃が必殺技に進化するというもので、敵に近接武器で通常攻撃を当て続ける事により 覚醒率 が上昇し、100%になるとその攻撃が「ブラッドアーツ」として覚醒・進化する。特殊な行動をする必要は無く、対応する攻撃をするだけで発動する。進化した技はヒット数が増加したりアラガミのオラクル弾を無効化したりするなど、様々な効果が付加される。

作者へ以上GE2RBwikiより引用（一部改変あり）でした。また以下BAと略

します。

はいはい毎度説明どもも。

実はさつき（前回の話）、蜘蛛型ガストレアをぶつ飛ばす前にわざわざパリングアツパーで一度攻撃を受け止めたのも、B Aが発動するかしないか確認するためだったりする。パリングアツパーで発動しないこと自体は想定内といえれば想定内だけでも。

——流石にチャージクラッシュでも使えないとなるとなかなかまずい。

僕が多用していたのが、そのチャージクラッシュのB Aであり、もしかしたらこれなら使えるかも、という思いがあった。中でも一番得意とするB Aは勿論ジュリウス……『世界を拓く者』と戦うときもセットしていたんだけど、ちょっと特殊で、街中でやるという感じに被害が拡大しかねないので、B Aが使えないことに気付いてからも試すことが叶わなかった。なので今回、これ幸いとばかりに使わせてもらった……までは良かったんだけど、ここにおいてもB Aを使うことできなかった。

B Aを発動するときは、体の中を血が駆け巡るといふか……力で満たされるといふか……なんかとにかく表現しづらいけど、何か体が中を駆け回る感じがするんだけど、こつちの世界に来てからその感覚が一度として訪れていない。

（……それどころか、血の力自体が消滅してしまっているかもしれない）

僕の血の力は『喚起』。仲間の隠された力を引き出すなんていう、実に客観的な判断の下にくい能力だから、発動してるんだがしてないんだかホントに分かりにくい。僕以外の『ブラッド』のメンバーの血の力はシエルの『直覚』しかり、ナナの『誘因』しかり、ギルの『鼓吹』しかり、そしてジュリウスの『統率』しかり。発動したのがすぐわかる物ばかりで、プラスの影響を与えるものばかりだった。だから、皆が羨ましくて、「僕の力なんて役に立つのかなー」とか思ったりもしたし、実際にポロツとそう零したこともあった。

……それが偶然近くにいたシエルに聞かれてしまい、小一時間怒られたり、励まされたり、まあとにかくいろいろ言われたのだ。

要約していえば、「君の力がなければ、私達の血の力は発現しなかったかもしれないのだから、その力が役に立たないなんて言わないでください」ということだった。なぜこれを伝えるのに小一時間かかったんだ……。

……でも、こう言われてうれしかったのは間違いないし、そのテンションのまま出たミツシオンで思わずウコンバサラとカバラ・カバラを見るも無残に惨殺してしまった。一緒に来ていたナナとロミオ先輩がドン引きしたけどまあ気にしない気にしない。

……あ、さっきのでロミオ先輩は忘れたんじやなくて、血の力が発言してないから取り上げようがなかったただけなんだからねっ!?(謎のツンデレ風味)

……閑話休題。

BAが使えないということは、そのまま僕が取れる先述の幅が狭くなることにも直結する。さてどうしたものか……。

ガサツ

「「!!」」

近くの茂みで音がした。瞬間、シロガネに変形させていた神機を茂みに向け、いつ敵が飛び出してきたでもいいように構える。

——side 蓮太郎——

「……」

「……」

沈黙が場を支配し。

「……あ」

それを破ったのは、茂みから聞こえた、少女の物と思われる何とも間抜けな声だった。
「「…………『あ』？」」

思わず3人で反復してしまう。そして

「お兄さん、私です」

そう言葉が続き、によき、つと茂みから腕が生えた。どうやら攻撃意思がないことを示しているらしい。だが、その右手にはシヨットガンが握られている。

「…………悠梨、お客さんだぞ」

「僕な訳ないじゃないですか」

「だよなあ…………」

茂みから腕だけ生えているという、ストーキング中でもなかなかお目にかかれそうにない不気味な光景に思わず悠梨に振ってしまっただが、元々そんなに期待はしていなかった。

ドロウしてあったXDを改めて茂みに向けて構え直し、茂みに向かって告げる」

「…………とりあえず顔を見せてもらわねえとなんともならねえ。まず武器を置け」

「分かりました」

意外と素直に話を通る。腕が茂みに一旦引つ込み、先ほどのシヨットガンを俺達に見えるように茂みの前に置いた。そしてもう一度腕だけ茂みから生えてくる。

やっぱり何となく不気味ではある。

「よし、立て」

そう俺がいうと茂みがガサガサと動き、一人の少女が立ち上がった。そして、俺はその顔に見覚えがあった。

「……ああ、思い出したぞ。防衛省にいたっけなお前」

「ええ。覚えてもらえていたようで何よりです。千寿夏世と言います」
そういうと、夏世と名乗った少女は頭を下げた。